
東方神喰者

wing

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方神喰者

【Nコード】

N6664U

【作者名】

Wing

【あらすじ】

時はアラガミが神機保管庫エリアに侵入した事件が収まった直後。F S A Tから派遣された新型神機使い、行方サヤカとミツシヨンに出る主人公、戌亥^{いぬい}レイジ。しかしアラガミ達の妙に巧みな戦術により崖から落ちてしまう。気が付けば幻想郷。行方不明のあの男も幻想入り！？はたして主人公はサヤカと合流し、元の世界に戻るのか！？*これは東方とゴツドイーターの二次創作です。処女作なので文法が変だったり、キャラ崩壊の可能性があります。ネタバレも含みます。

M i s s i o n 1 幻想入り（前書き）

みなさん、おはようございます、こんにちは、こんばんは。w i n
gです。生まれて初めて書くので、文法的におかしかったり、キヤ
ラ崩壊するかもしれません。それでもよければ、「ゆっくりしてい
ってね！」

Mission 1 幻想入り

それは、フェンリル極東支部（通称アナグラ）の神機保管庫エリアにアラガミが侵入した事件による騒ぎが収まった直後の頃のことだった――

医務室にて

コウタ「おっす！どうだ、体調は良くなったか、リーダー？」

声をかけられた少年はうなずく。

コウタ「相変わらずお前は無口だなー。」

？「・・・」

読者の皆、俺は藤木コウタ。フェンリル極東支部の第一部隊に所属してる。そして今俺が話してるヤツは俺とほぼ同時に入隊し、俺の親友！今は第一部隊の隊長をやってる成亥^{いぬい}レイジだ。こいつは基本的に無口で、たまゝに無茶なことするヤツだけど、神機使いとしての腕はピカイチだぜ！あいつ基本的にちょん避^{さく}けで攻撃かわしてるからな・・・なぜかって？あいつ道場をやってる家の生まれでさ。空手、柔道、剣道など日本で生まれた武道を全般的に教えてる道場で、中でもあいつは並外れた強さなんだってさ。それ故のちょん避^{さく}けだな。でも、入隊する少し前に道場がアラガミに襲われたらしく

てさ・・・生き残ったのはあいっただけなんだとか・・・

おっと、なんか暗くなっちまったな。それにしても、いくら神機が壊れたからといって、リンドウさんの神機を使うとはな。ほんと、無茶しやがって・・・ん、誰か来たようだ。

アリサ「失礼します」

コウタ「おお、アリサか、お前もお見舞いか？」

アリサ「ええ、体調が良くなってきたとはいえ、心配ですから・・・」

コウタ「・・・お前、レイジがそんなに気になるのかあ？」

アリサ「・・・どういう意味ですか？」

コウタ「お前さ、あの事件から、毎日レイジんとこ行ってるじゃん」

アリサ「なっ、ち、違いますよ！何を言い出すんですか！／＼／＼からかわないでください！」

すると、まあまあと止めに入るレイジ。うん、平和だなあ。

今俺が話していた相手はアリサ。えっと、アリサ・イリーニチナ・アミエーラだったっけ。フェンリルロシア支部からここ極東支部にやってきたんだ。入隊当初は高飛車な態度で人間関係がぎくしゃくしてたんだけど、今は反省して仲良くやってるよ。

そしてしばらく俺達三人は楽しく雑談をした。俺達が去った後から、リツカさん、ソーマ、第二、第三部隊のメンバーも・・・ん？ソー

マ？・・・まあとにかく、何をしても人気者だな、あいつ。ちょっと羨ましい。こうして、またいつもの明るいアナグラが戻ってきた。

↓その日の夜↓

レイジは夕飯を食べ終え、医務室のベッドに戻り、一刻も早く復帰できるように早めに寝ようとすると、

？「体調はどうですか？レイジさん」

一人の少年に呼び止められた。そして特に異常がないことを伝える。

？「そうですか。よかった」

？「まったく、あそこで普通他人の神機使おうと思うかしら？」

？「あ、アーティさん。ケガと体調は大丈夫ですか？」

アーティ「ええ、まだ少しフラフラするけど」

話についていけないと思うので、少し長くなるが説明をする。
レイジの体調を心配する少年はレン。神機保管庫にアラガミが侵入した際、突然現れて助けてくれたのは彼である。そしてケガのため体中の所々に包帯を巻いた少女。彼女はアーティ。偶然にもアラガミがアナグラに侵入するのを一番に発見し、交戦。しかし彼女は体

調不良だったため満足に動けず、攻撃をいくつか食らってしまい、神機格納庫の隔壁に吹き飛ばされ、激突。隔壁は崩壊、彼女も叩き付けられたダメージで先頭不能、レイジはリンドウの神機を使おうとしたが侵喰の苦痛でまともに動けず。万事休すかと思われたその時に、レンが現れ助けてくれた——というワケなのである。

アーティ「あんたがいなかったらマジで死ぬところだったわ、ありがとう」

レン「いえいえ、お気になさらずに。今日はお二人とも早く休んだほうがいいですよ。」

アーティ「レイジ、夜更かししちゃダメよ」

レイジは余計なお世話だと思ったが、あながち間違いではないから何とも言えない。ここは素直に聞いておくべきだろう。リンドウを早く助ける意味でも。そういうワケでこの日はいつもより早く眠りについた。

次の日、レンに復帰しても大丈夫かどうか尋ねた。彼は医療班に所属している。そしてアラガミ化した人間の治療法の研究をしているため、彼に診てもらうのが手っ取り早い。結果、問題ないと診断され、雨宮ツバキ、ペイラー・サカキ博士に復帰の報告をすることにした。雨宮ツバキは主に第一、第三部隊の指揮官および教練担当。ペイラー・サカキ博士はフェンリル創設メンバーの一人。フェンリル極東支部アラガミ技術開発統括責任者だ。さらに神機使いたちの教育もしており、講義を開くこともある。現在はアーク計画事件で亡くなったサカキの友人であり元極東支部長でもあるヨハネス・フオン・シツクザールに代わって極東支部長を兼任している。

レイジは支部長室に向かい、ツバキとサカキに復帰の申請をする。

サカキ「予想以上に早いね。もう大丈夫なのかい？」

医療班に診てもらい、復帰の申請を許可してくれたことを伝える。

サカキ「わかった。もしまた腕に違和感があったら、すぐに知らせるんだよ。じゃあツバキ君、君の用事を済ませたらどうだい？」

ツバキ「わかりました。ではレイジ。フェンリル本部から極東支部に神機使いが一人派遣される。第一部隊のメンバーを出撃ゲート前に集合させる。」

その指示を受けた後、レイジは第一部隊メンバーを集合させる。招集をかけてから十分ほど経過した頃、

ツバキ「待たせたな。本日からフェンリル本部の意向により、フェンリル本部直属の特殊部隊、フェンリルスペシャルアサルトチームFSATから一名、第一部隊に配属されることになった。よろしく頼むぞ」

すると、ツバキの隣に立つ少女が緊張した様子で自己紹介を始める。見た目的にはレイジ、コウタと同じくらいの年齢だろう。

サヤカ「は、初めまして！ここ最近極東地域で強力なアラガミが増えているためフェンリル本部の意向により本日付でF S A Tから第一部隊に配属になりました！行方サヤカです！よろしく願いますっ！」

かなり緊張しているようだ。少し噛みそうになったが、皆そんなことは気にせず、笑顔で迎え入れた。

コウタ「女の子ならいつでも大歓迎だよ！」

アリサ「アリサです、よろしくお願いします（今の言葉どこかで聞いたような・・・）」

ソーマ「よろしく頼む」

サクヤ「よろしくね、サヤカちゃん」

サヤカ「はいっ！よろしくおねぎゃっ・・・願いますっ！」

思わぬところで噛んだため、皆（ソーマ以外）から笑い声がこぼれた。サヤカは赤面している。

ツバキ「サヤカ、早速だが入隊の手続きを済ませた後、レイジとアラガミ討伐に向かってもらう。こっちだ」

サヤカ「あ、はい！」

二人はエレベーターで役員区画に向かう。

コウタ「あの子けっこう可愛かったな！」

アリサ「あなたはそんなところにしか興味がないんですか……。それにしても、F S A Tから派遣だなんて、異例ですね」

サクヤ「そうね、最近強力なアラガミが増えてるからかな」

ソーマ「またアナグラが賑やかになるな」

しばらくの間、彼女の話題で賑わうアナグラであった。

（数時間後、贖罪の街）

サヤカ「レイジさん、今回のミッション、お疲れ様でした！すごくカッコよかったです！それに、それは鞘……？ホルスター……ですか？それに神機を収めて背中に背負う人は初めて見ました！まるで漫画の主人公の勇者みたいですよ！」

レイジは少し謙遜し照れ笑顔を見せる。とはいえ彼は武道を取り入れた戦法を使うため、動きに無駄がなく、人によっては美しく見え

てしまうことも。その上レイジは手先が器用で、神機を背中に背負うような形で収めるホルスターは彼が作った。ホルスターは本来、ピストルなどの銃をしまうものだが彼はそれを神機用にアレンジしたものを使っている。レイジは目を光らせてこちらを見るサヤカに過大評価しすぎだと謙遜をし続けていた。一方のサヤカも、FSAに所属しているだけあり、無駄な動きが少ない。彼女は狙撃を得意とするため銃身はスナイパー「ステラスウーム真」を使っている。刀身はショート「ナイフ極」、装甲は「ヘラクレス堅」だ。ちなみにレイジはアサルト「フランクス極」、バスター「神斬りクレイモア真」、装甲「剛支援シールド真」である。

サヤカ「それにしても、最近のアラガミ、妙に集団で要領よく動くようになりましたよね。まるで誰かが指揮してるみたい・・・」

レイジは同感した。本来群れることのない種が他種のアラガミと連携して襲うようになっていたのだ。例えば、コンゴウ種が索敵をし、発見したら雄叫びを挙げて他種のアラガミを呼び寄せる。コンゴウ種の間だけでならこの行動はたびたびみられたが、他種のアラガミを呼び寄せることはしなかった。

サヤカ「いったい何があったんでしょうね」

これに対し、レイジは一つ心当たりがあった。これについては後で述べるが、その心当たりは彼にとってそれはトラウマな出来事なのだ。なので、違っただろうとあまり深く考えないことにした。

討伐したアラガミを捕喰し素材を回収、少々雑談しながら帰投して

いると、

「グアアアアアアア！」

サヤカ・レイジ「!？」

突如、アラガミ「ヴァジユラ」が襲いかかってきた。しかしあまりに距離が近いため、装甲の展開が間に合わず、ヴァジユラのパンチがサヤカに直撃した。

サヤカ「うあッ・・・！」

サヤカは大きく吹き飛ばされ、崖ギリギリの所で留まった。レイジは慌ててサヤカの所に走り、様子を見る。すると、彼女の頭から出血、攻撃のショックにより気絶していた。このままでは危ない。一刻でも早く帰投しないと。直感でそう思ったレイジは目の前で襲いかかろうとしたヴァジユラの撃退を試みる。その瞬間、

「グオオオオ!!」

なんと、もう一体のヴァジユラが、レイジが攻撃しようとしたヴァジユラの背後から飛び込んできた。サヤカの推理とレイジの「心当たり」が的中したような気がした。反射的に装甲を展開する。刀身

がバスターのため、アドバンスド・ガードで攻撃を防ぐのには成功したもののジャンプによる勢いのせいで衝撃が大きく、体制が崩れてしまう。背後には崖。運の悪いことに足がサヤカにぶつかり、レイジはバランスを崩し二人とも崖から落下してしまう。下は薄暗くてよく見えない。せめてサヤカだけでもケガを減らそうとレイジが下に回る。そして二人はそのまま、奈落へと落ちて行ってしまった。

？「お前達、崖の下に行くよ。今日はごちそうだねえ。きちんと平等に分けて喰うんだよ」

Mission 1 幻想入り（後書き）

作者「俺の知ってるプロローグはこんなに長かったか・・・？」

弟「なげーよクソ兄貴」

作「クソは余計だ・・・。しかしキャラ紹介も兼ねてやったからなあ。長くなるのは無理も」

弟「はいはい言い訳乙」

次回も長くなるかもしれませんが、よろしくお願いします。

Mission 2 迷路（前書き）

皆さん、おはこんばちは（おはようございますとこんにちはとこんばんはの略）、wingです。今回から幻想郷の世界でお話が始まります。それではどうぞ

Mission 2 迷路

気が付くと、レイジは崖の下にあった大穴の底に倒れていた。ゆっくりと起き上がると、

レン「レイジさん！無事でよかった」

アーティ「ん、ようやく起きたのね」

レイジは驚愕した。二人はミッションに参加していないはずだ。なぜここにいるのだろうか？ふと上を向くと、大きな穴の下から橙に染まる空が見える。かなりの高さだ。よく生きていたものだ。レイジは思った。次に周囲を見渡してみた。するとあることに気付く。・・・サヤカがいない。彼女と一緒に落ちて来たはずなのに、どこにも見当たらない。ありえない。これは夢なのか？レイジはだんだん混乱していく。するとレンが彼を落ち着かせるように、

レン「レイジさん、僕達だって困惑しています。僕は医務室を出ようとしたらいきなりこんな所に・・・」

アーティ「あたしなんか便所に入ろうとしたらここに来ちゃったのよ。まったく、早く用を足したいのに」

レン「とにかく、ここを出る方法を探しましょう」

レイジはとりあえず通信機器を取り出しサヤカと繋がるか試してみる。しかし地底深くにいるためか、ノイズ音しか聞こえない。次に通信機にある非常時用ボタンを押した。このボタンを押せば極東支部に無線を繋ぐことができる。だが聞こえたのはノイズ音のみ。

これで通信手段は断たれてしまった。残る方法は、この壁を登り地上に出るか、さらに地底の奥に続く洞窟から地上を目指すか。前者はほぼ無理だろうという理由で却下。地底の奥への道を進むことにした。

レン「それにしてもここ、地底で灯りも何も無いのに、明るいですね。壁が光ってるのかな・・・？」

アーティ「それよりもレイジ、あんたユーバーセンス使えるんでしょ？それでこの道がどこに続くか見て頂戴」

レイジの神機の装甲「剛支援シールド真」のスキルにはユーバーセンスがついている。これは、補足した対象の位置や目標とするものの位置、地形も離れたところから見通すことが出来る。レイジはこれを発動する際、左目が紫色に変化し、目の中央はレーザーポインターで当てられたかのような赤い点が発光する。

アーティに言われるがまま、ユーバーセンスを発動させる。今三人がいる場所も含めて、ここの地形が手に取るようにわかる。だが地上に出る道へはかなり距離があるようだ。その上ここの地形はかなり複雑に入り組んでおり、ユーバーセンスを解除したらすぐに迷ってしまうだろう。なので今はこの状態を維持、レイジが先頭に立つ

て進み、三人の現在地から一番近い比較的広く開けた場所に向かうことにした。

そして歩くこと五分。ひとまずの目標地点に着いた。しかし・・・

アーティ「うわっなによここ、蜘蛛の巣でいっぱいじゃない」

レン「うーん、広い場所なら誰かいてもおかしくないと思ったんですけど・・・違ったみたいですね」

するとレイジは何かを見つけたのか急に立ち止まり、顔を上に向けている。

レイジ「・・・」

何を見ているのかと尋ねようとするレン。その時、

？「おや、見つかったようだね」

突然天井から声が響いた。

レン・アーティ「！」

レイジ「・・・」

神機を構え天井からの声の主に警戒するレン。レイジとアーティは警戒の体勢をとらずそのまま声の主を見続けている。なんと声の主は少女だ。しかも天井に張り付いている。

？「こんな所に来るなんて物好きな人間だねえ。待てよ、もしかしてここが私達妖怪が住む地底だということを知らずに来たのかい？」

妖怪という言葉に疑問を抱いたが、レイジは素直にうなずく。少女は何か細い糸のようなものでゆっくりと降りてくる。

？「私は黒谷ヤマメ、土蜘蛛の妖怪さ。あんた、ここ等辺では見ない格好だね。外人かい？」

少女の言っていることが理解出来ず首を傾げる三人。

ヤマメ「あゝ、なんか説明めんどくさいや、キスメ、代わりに説明しといておくれ」

すると、キスメという人物（？）がヤマメの背後からひょっこりと姿を現した。大きな桶に少女が中に入っているような容姿だ。

キスメ「もう、そのくらい自分で言えがいいのに……。初めまして。私は釣瓶落としての妖怪、キスメです。今あなた達と私たちがいる所は幻想郷といって、あなた達のいた元の世界とは隔離された場所にあるんです。そして外来人とは、あなた達のようにひょんなことからこの幻想郷に迷い込んだ人達を指します」

三人は完璧には理解できなかったが、異世界に迷い込んだことは理解した。

ヤマメ「そういうこと。・・・さて、ここからが本題だ」

ヤマメは真剣な表情でレイジを見つめ、言い放つ。

ヤマメ「ここはただの人間が来る所じゃない。ここから先はたくさん妖怪がうろつろしてるから人間には危険だ。遊び半分でここに来たのなら、即刻来た道に戻るんだね」

レン「・・・困りましたね。今から戻っても何もありませんし・・・レイジさん、どうします?」

レンの言葉を気にも留めず、レイジは全く動じずにヤマメを見続けている。

しばらくの沈黙が続いた後、引き返す気がないと悟ったヤマメは、ヤマメ「引き返す気はないようだね。・・・わかった。それなら、ここを通っても大丈夫な人間かどうか、私達と弾幕ごっこで決めるよ！」

そう言い終わらないうちに、ヤマメとキスメは弾幕をレイジに向かって展開してきた。密度が高くヤマメ達の姿が見えない。

レン「レイジさん、危n（ガシッ）アーティさん!？」

アーティ「大丈夫よ。見ててなさい」

レン「えっ・・・？」

ふとレイジの方を見る。するとレイジは、二人を相手にして、あれだけの弾幕を全て綺麗に避けている。それもちょん避けて。その上余裕の表情を見せている。しかしレンはレイジの動きに気になることがあった。

レン「すごい・・・あれだけの弾幕を避けきってる・・・でもなぜ反撃しないんですか？」

アーティ「あんたは、知らない人をいきなり斬ったりするの？」

レン「するわけないじゃないですか。・・・あ、なるほど」

アーティ「そゆこと」

一方で、キスメは遠くからの攻撃は当たらないと思い、釣瓶落としの名の如く真上から落下して攻撃しようと考えた。弾幕で姿をくらしながらレイジの真上に飛ぶ。そしてレイジが自分に注意が行っていないことを確認し、彼の頭に目掛け真っ直ぐに落下した。

キスメ「（ごめんなさい・・・!）」

渾身の体当たりはレイジに直撃――

するはずだったが、すでにレイジは攻撃を察知しており、当たる直前にかわした。

キスメ「・・・あれ?（ヒュッ）ひゃっ!？」

外れたと思った時には、キスメの眼前に正拳を突き付けられていた。キスメは一瞬、状況がわからず困惑する。

キスメ「ま・・・参りました・・・」

ヤマメ「あんた・・・やるね」

妖怪に勝てる人間はそうそういない。ヤマメは遠くから比較的低密度の弾幕でレイジの実力を測っていたが、キスメを呆気なく降参させたため、本気でいこうと考えた。

ヤマメ「これで一対一か。じゃそろそろ本気を出させてもらっよ！」

するとヤマメは一枚の紙を取り出し頭上に掲げ高らかに宣言する。

ヤマメ「瘴気「原因不明の熱病」！」

アーティ「なにそれこわっ」

その恐ろしい名前の通り、今までよりも圧倒的な密度の弾幕が張られる。

ヤマメ「こいつはスペルカードといってね、今まで私たちが放った弾幕よりも強力だよ！」

多数の弾が一斉に襲い掛かる。流石に密度が高いため、数回服をか

すりはしたものの、レイジは全て避けきった。

ヤマメ「まだまだだよ！」

何度も何度も繰り返し弾幕を展開する。だがレイジは一向に回避を続けるだけで反撃の動きを見せない。そのため、ヤマメはナメられていると思ったのかだんだん苛立ち始め、ついには痺れを切らしてレイジに突進してきた。

ヤマメ「このおおおお！なんで攻撃しないのさ！あんた私をナメてんの！？」

キスメ「ああつ！？ヤマメちゃん、ただの小手調べなのに直接攻撃はダメですよ！」

爪を立てたヤマメの手が襲い掛かる。いくらレイジとはいえまともに妖怪の攻撃を受ければタダでは済まない。しかしそれでもレイジは冷静だった。ヤマメの腕を受け流しつつ掴み上げ、足を引っかけつつ伏せに転倒させる。そして起き上がられないようもう一方の腕で背中を抑えながら掴んだ腕を締め上げる。ヤマメはたまらず悲鳴を上げる。

ヤマメ「痛い痛い痛い痛い！！ま、参った！参ったからやめておくれえええ！」

キスメ「今後はすぐに怒っちゃダメですよ？」

「ママ、わかった！ わかったから！ ひぎいいいいいいいい！」

アーティ「ね、あたしの言う通りだったでしょ？」

レンはただただ言葉を失うのみだった。

Mission 2 迷路（後書き）

作「うん、出来としてははこんなもんかな」

弟「クソ兄貴にしちゃあまあまあじゃね（棒読み）」

作「よしこれからもがんばるぞー！」

弟「（単純なヤツ・・・）」

次回からも頑張って書きます！

M i s s i o n 3 ダンス・パーティ（前書き）

大学のテストのため投稿が遅れました・・・すみません。
では、本編どうぞ。

Mission 3 ダンス・パーティ

ヤマメ「いたた・・・あんた、人間のわりにはやるじゃないか」

レイジは拘束を解き、ヤマメはゆっくり起き上がりながらつぶやく。

ヤマメ「さてと・・・あんたはこれからどうするつもりなんだい？
・出口はどこかって？ああそれならキスメに任せときな。この先に地下街があるんだ。今日はそこで一服していきなよ。私なんか疲れたし、あんたももっとここについて知りたいだろ？」

三人はお言葉に甘えて、案内をお願いすることにした。再び一行は迷路のような道を進んでいく。

キスメ「なんで私はこんな役回りなの・・・」

ヤマメ「私説明めんどいから」

キスメ「私エ・・・」

十分くらい歩き続けた後、一行は広い空間に出た。ヤマメ達と会った場所よりも遥かに広大で、江戸時代の街並みのような風景が視界いっぱいに広がっていた。ヤマメの説明によれば、地底にあるので、一部分を除き日光が当たらないためほぼ常に夜の状態であるらしい。

ヤマメ「着いたよ、ここが地下街だ。今日はとりあえず私の友人のいる宿に行こうとしようか」

キスメ「こつちですよー」

レン「すごいですね・・・ほとんど江戸時代の街並みみたいです」

ちらほらと建物の中から妖怪達が楽しそうに宴会をしているのが見える。その様子がレイジ達にはとても美しく、羨ましく見えた。街を歩き始めて間もなく、

キスメ「到着！」

ヤマメ「おーす、勇儀いるかい？ってまだ宴会やってたの！？昼からやってたよね！？」

昼から宴会をしていたため、その場にいたほとんどの者達は酔いつぶれ、ダウンしていた。しかし一人だけピンピンしている人物が一人。彼女が星熊勇儀である。

勇儀「ははは、酒が無くなるまでが宴会さ！あんたも飲んでくかい？・・・ん、後ろにいるのは誰だ？」

ヤマメ「ああ、こいつは外来人だよ。なんでここに迷い込んだか知らないけど。ただの人間だったら追い払ってたところだったけど、な

かなか強いからここに連れてきても大丈夫だと思ってね。名前は・
・なんだっけ（神機使い返答中・・・）そうそう、戌亥レイジだ」

勇儀「ふうん・・・強いのか」

ヤマメ「（げっ！しまった！こいつは・・・！）」

勇儀「よし！レイジ！宴会が終わったら表で待ってな！私と一勝負しようじゃないか！あと、準備運動忘れんなよ！」

レイジ「！？」

アーティ「ねえ・・・ここには出会ったら即バトルってヤツしかないのかしら？」

レン「さあ・・・」

ヤマメ「レイジ・・・あいつは鬼だから、妖怪よりも遥かに強い力を持つてる。でも悪気はないんだ、許してやっておくれ。・・・気をつけなよ」

レイジ「・・・（・・・・・）」

あまりに唐突だったため、断ろうにも断れず、ヤマメもなぜか勇儀と決闘すること前提で話しかけてくるので、仕方なく外で「準備運動」をすることにした。

神機使い運動中・・・

レイジは相手が鬼ということで生半可な戦い方では自分に何が起るかわからないと思い、レン、アーティと共同で運動することにした。その内容とは、まずレイジを挟むようにレンとアーティが立つ。そして二人は全力で神機でレイジを攻撃。それを避け続けるというかなり危険な準備運動である。

レン「準備運動なのになんでこんなことしなきゃならないんですか・
・・」

アーティ「さあね。相手が鬼だからじゃない？」

レン「それにしても・・・この「準備運動」、危険すぎやしませんか？僕としてはもう止めたいんですけど・・・」

アーティ「あら、あたし達はいつもアラガミと命のやりとりをしているのよ？それなのにあんたは鬼とやるのは嫌なワケ？」
オウガ

レン「上手いことを言ったつもりですか・・・。こんな時にボケたって何も面白くありませんよ・・・」

アーティ「そこはノリなさいよ・・・」

ヤマメ「なんかレイジのヤツ、すごい動きだね・・・」

キスメ「その上、なんだか綺麗に見えます。あれを見てると私達が負けたことに納得できそう」

ヤマメ「私はあんま認めたくないんだけどね・・・」

そして、決闘の時は訪れた。決闘と聞いてやってきた妖怪達がたくさん集まっており、二人の決闘の開始を今か今かと待っている。それから間もなく宿の中から颯爽と勇儀が現れ、妖怪達から声援が送られる。しかし、なぜか彼女の手には宴会で使っていた杯が。レイジは疑問に思い、なぜなのか聞いてみると、

勇儀「ああ、これかい？いやなに、私は鬼だからさ、普通に戦うとすぐ私が勝っちゃうんだよ。そこでハンデとして杯から酒を一滴もこぼさずに戦うルールを自分に課してるワケさ」

なるほど、と感嘆の表情を見せるレイジ。

勇儀「さあてお喋りはここまでだ、決闘を始めようじゃないか！」

その時。

「グアアアアアアア！」

全員「！？」

咆哮が響いた方向を見ると、なんと無数のオウガテイルが地下街を襲っているのが見えた。妖怪達は追い払おうと応戦するが・・・

妖怪「な、なんだこいつ」ぎゃああああ！」

妖怪「攻撃が効かんがあッ!!！」

妖怪「馬鹿な！ヴゾダンドくぐああああ！」

アラガミは今のところ神機と同じアラガミの攻撃しか通用しないことがわかっていて。よって妖怪達の攻撃は跳ね返され、オウガティル達は次々と妖怪達を喰らっていく。

アーティ「アラガミがなんでこんなとこにまで……！いくわよ二人とも！」

レン「はい！ここを全力で守りましょう！」

レイジ達三人はオウガティルの群れの中に飛び込む。

勇儀「あっおい！……まったく、せっかく面白くなるとこだったのに。怪物ども！決闘は大人しく鑑賞するのがマナーってもんだよ！」

勇儀も負けじと群れに向かって走る。

キスメ「ヤマメちゃん、ddどうしよう・・・」

ヤマメ「落ち着け！とりあえず逃げ遅れたヤツを探して安全なところに避難するよ！」

地下街に溢れていた笑い声は悲鳴に変わり、大混乱となってしまった。

Mission 4 ダンス・パーティ2（前書き）

皆さん、おはこんばちは、wingです。前話が少し短めだったので、今回は長めにしてみました。
それではどうぞ。

Mission 4 ダンス・パーティ2

アーティ「とりあえず、一旦分かれて各個撃破よ！」

レン「はい！皆さんお気をつけて！」

あまりに数が多いため、三人は一度バラバラになり、広範囲を索敵しつつ、オウガテイルを発見次第撃破していく作戦をとった。

アーティ「一通り片付いたら勇儀がいた宿に集合しなさい！」

レン「わかりました！」

三人はそれぞれ違う方向に走り出す。レイジはまず、逃げ遅れた者がいないか確認しながらオウガテイルを撃破していくことにした。建物が多い場所を一通り回っていき、建物の中を確認する。時々建物の中から奇襲を受けたが、問題なく返り討ちにし、逃げ遅れた妖怪達を逃がしていった。するとある妖怪が逃げる際に、

妖怪「おい兄ちゃん！あのバケモノどもを倒せるんだろ！？だったらヤマメちゃん達のところに行つてやつてくれ！俺達を逃がすために街に残つてたんだが、バケモノどもに囲まれちまつたんだ！勇儀さんが助けに行つてるらしいがあの数じゃ心配だ、援護してやつてくれ！」

それを聞くとすぐにレイジはヤマメ達の救出に向かった。

ヤマメ「こりやまずい、囲まれちゃったね・・・」

キスメ「私達の攻撃が全然効かないなんて・・・」

勇儀「私もこんなに堅い奴らと戦うのは初めてだ・・・。十発くらいぶん殴ればいけるけど、キリがないね」

キスメ「まだ私死にたくないですう・・・」

ヤマメ「諦めるな！きつと何か・・・方法があるはずだ！」

勇儀「皆逃げ切ったようだし、後はこいつらをなんとかするだけだけど・・・どうしたものか」

ヤマメ、キスメ、勇儀は必死に抵抗を続けるが、勇儀以外の攻撃は全く通用しない。その上勇儀の攻撃もかなりの回数を叩き込まなければ倒すことはままならず、次第に追い詰められてしまった。

ヤマメ「くッ・・・ここまでか・・・」

キスメ「うわっん」

勇儀「参ったね・・・」

オウガテイル達の牙、大きな尾が三人に襲い掛かる。万事休すか・
・誰もがもうダメかと思ったその時、

「グアアッ！」

オウガテイル達の中の一体が悲鳴を上げた。その後、次々とオウガテイルが血を吹き出しながら吹き飛ばされていく。

ヤマメ「なんだ？・・・ん、あいつは・・・レイジ！」

ヤマメ達の目には、大量のオウガテイルを、たった一人で薙ぎ倒していくレイジの姿が映っていた。あんなに倒すのに苦労していたオウガテイルを、たった一撃でばたとやられていくのを見てヤマメ達は呆然としていた。そして最後の一体を倒すと、レンとアーティが戻ってきた。

レン「そちらはどうでしたか？こちらは特に問題はありませんでした」

アーティ「こっちも大丈夫よ。でもまだこれだけの数がいたなんてね・・・レイジ大変だったわねー」

勇儀「・・・ふう、助かったよレイジ。危ないところを助けてもらってありがとうな。それにしてもあんたはすごい武器を使ってたんだ

ねえ。・・・え、この怪物どもを倒すための武器？で、お前はこいつらを倒す仕事をしている？へえ、そいつは驚きだね。どおりで強いワケだ！」

ヤマメ「はッ！そうだ地霊殿は！？」

キスメ「そうだ！地霊殿の安全をまだ確認していないんでした！」

勇儀「だがいつまたあいつらが街に現れるかわからないし・・・仕方ない、レイジ、すまないがお前が地霊殿のヤツらを助けてやってくれないか？私達はこの事態の収拾をつけないといけないからな地霊殿の場所はおっちだ、頼んだよ」

そう言う勇儀達は逃げた妖怪達を呼び戻すため、街を後にした。

レイジ達は勇儀に言われた通り、地霊殿に向かう。

走って行くこと5分。地霊殿がレイジ達の前に姿を見せ始める。ここもやはり、アラガミに襲われているようだ。

レン「レイジさん、僕達で地霊殿周辺のアラガミを倒してきます！レイジさんは中を！」

アーティ「今度はザイゴートとコクーンメイデンもいるわね」

レン、アーティは地霊殿周辺の群れの中に飛び込み、神機を振り回し、倒していく。レイジは進路上のアラガミを薙ぎ倒しながら地霊殿の内部に走り込む。

レイジが入口に入ると、

バターーーーン！！

突然、開いていた入口の扉の閉まる音が響く。これ以上内部に入れないために閉めたのだろうか。レイジは一瞬疑問に思うが、自衛のためなのだろう、仕方ないと深く考えないことにし、アラガミを片っ端から始末することにした。

〈地霊殿1F〉

地霊殿の内部では、ほぼ戦争状態となっていた。これ以上侵入を許すものかと少女の姿をした妖精が弾幕で攻撃している。しかし地下街のときと同様、一方的に妖精側がやられてしまっている。レイジは妖精達を援護しようと走り出すが・・・

妖精「ん、ねーねーあいつなんだろう？」

妖精「あいつだけかつこうがちがうね」

妖精「わかった！きつとあいつはかいぶつどものりーだよ！」

妖精「たしかにそれっぽい！」

妖精「あいつをやっつければかいぶつどもはにげるはず！」

妖精「やっちゃえー！！！」

レイジ「・・・！？」

なんと、アラガミ達に向けて放たれていた弾幕の矛先が、一斉にレイジに向けられた。レイジは自分は敵じゃないと訴えようとするが、妖精達は聞く耳を持つとせず激しく攻撃を続ける。攻撃を避けながら訴えるチャンスを狙うが、絶え間なく弾幕が張られるためこのままでは埒が明かないと思い、仕方なく弾幕を避けながらアラガミ達を倒すことにした。そんな状況が10分程続き、気が付けば一階にいたアラガミは全滅しなくなっていた。この状況を見て、妖精達はレイジの行動に疑問を持ち始める。

妖精「ねーねー、あいつさっきからこつちをこっげきしてこないよー？」

妖精「きがついたらかいぶつがいなくなってる」

妖精「あいつなにしにきたんだろ」

妖精「もしかしてたすけにきてくれたのかな」

妖精「さあ・・・」

妖精がざわつき始め、弾幕を張らなくなったが未だ警戒を解かないためひとまず近くにあった二階に続く階段に避難することにした。階段を上る途中、二階でも地霊殿の住人に襲われるかもしれないと思ったレイジは、強化パーツ「ガード強化3（ガード範囲拡大、総合被ダメージ減少）」と「討伐部隊（カリスマ、駆除部隊）」を神機にセット。深呼吸をし、二階に上がる。すると意外なことに、二階には誰もいなかった。変だと思い三階、四階も調べてみるがアラガミの姿は見当たらない。一階にだけアラガミが集中していたということがどうしても気になってしまふ。なぜなら地霊殿を襲撃したアラガミの中には空を飛べるザイゴートがいるのだ。なぜもぬけの殻なのか考え込んでいると、

ズドンッ！！

レイジ「！」

何かを撃ち出す音がどこからともなく鳴り、レイジに向かって弾丸が飛んでくる。それを避け、音がした方向に注意を向ける。

？「あんたで最後かい？怪物どもなら、私の太陽パワーで皆消し飛ばしたよ」

？「気を付けてお空、あいつだけ格好が違ふ。親玉の可能性があるよ」

空「はい、こいし様。では、あいつを囲んで一気に終わらせちゃいましょう」

こいし「よし、お燐！お空！いくよ！」

燐・空「はい！」

すると、突然現れた少女達、こいし、燐、空はレイジを三角形になるように素早く囲み、こいし、燐はスペルカードを、空は砲塔のよなものをレイジに向けた。レイジは完全に誤解されていることを悟る。するとすぐに、レイジは神機を背中ホルスターに収めた。自分は敵ではないことを示そうとしたのだ。しかし・・・

燐「・・・？どうしたのさ、怖気づいたのかい？」

空「諦めたんじゃないの？」

こいし「どの道、やっつけるだけだけどね！一斉に撃つよ！」

燐「はい！妖怪「火焰の車輪」！」

空「爆符「メガフレア」！」

こいし「本能「イドの解放」！」

三人が口々に叫ぶと、空からは太いビームが、こいし、燐からは激しい弾幕。先程の様子からまたも話し合う余地はなさそうだ。とり

あえず、どう避けるか辺りを見回す。

ドカーーーン!!

三人の攻撃がぶつかり、爆発を起こす。もくもくと煙が上がり、三人は爆発した場所を注視する。

燐「やった……のかな……？」

空「なーんだ、思ったより弱かったね」

こいし「……あ！二人とも！あれを見て！」

煙が薄くなった頃、ようやくレイジの姿が見えてきた。するとレイジは、うつ伏せになって頭を手で押さえているのが見えた。どうやら、弾幕を食らう直前に、伏せて攻撃を間一髪かわしたようだ。

空「な、なんてグレイズ……！」

燐「たまたまだよ！次はこうはいかないんだから！」

今度は燐が近接攻撃、空が後方支援という形で攻撃を仕掛けてきた。息の合ったコンビネーションでレイジを追い詰める。

燐「ほらほらっ！避けてばかりじゃやられちまうよ！」

空「てゆーか大人しくやられてほしいんだけどね！」

そしてとうとう壁際に追い詰められてしまった。

燐「ふふふ、もう逃げられないよ」

空「止めに一発でかいのぶち込んでやる」

燐「さあ、終わりだッ！」

空は砲塔のようなものにエネルギーをチャージし始め、燐は爪でレイジを引っ掻こうと飛びかかった。

仕方がない・・・反撃するしか・・・

意を決し、レイジは神機を抜く。そして二人を一閃――

燐「あ・・・あれ？消えた？」

空「・・・うにゅ？・・・あ！お燐！リボンが斬れてる！」

燐「・・・わあああ！ホントだ！ってお空！その制御棒どうしたの！？」

空「え・・・あああ！まっぶたつになってるうつつうつつー！」

燐「うう・・・今日やっと一人で結べるようになったのに・・・」

空「私の制御棒があ・・・」

燐・空「さとりさまあああああー!」

二人は泣きながら上の階へ逃げていった。

レイジはやれやれと一息つく。しかしそれもつかの間、ドンツと誰かに突き飛ばされる。倒れこみ、振り返るが誰もいない。するとレイジの背後から

こいし「こつちだよ」

レイジ「ッ!？」

なんとこいしが音もなくレイジの後ろに立っていた。しかし気づいた時には、またいなくなっている。

こいし「よくも私の大事なペットを傷つけたな・・・」

声のする度に何度も振り向くが、こいしの姿は見えない。

こいし「無駄だよ・・・あなたに私の姿は見えない。いや、正確に

は無意識に見えないと思い込ませてるの」

必死にこいしを探すレイジ。するとまた突然背後から、レイジの耳に囁くように

こいし「だから無駄なんだってば・・・」

レイジ「!？」

気づいた時には、至近距離から弾幕を放たれ、レイジは吹き飛ばされていた。床に倒れこみ、起き上がろうとするがダメージが大きく、ままならない状態だった。

こいし「まだ動けるんだ……。でも苦しいでしょ？ 楽にしておける……」

そう言うときいしは再び姿を消しレイジをかく乱させようとする。彼女の居場所を捉えるには――
するとレイジの脳裏にある言葉が。

「それよりもレイジ、あんたユーバーセンス使えるんでしょ？ それでこの道がどこに続くか見て頂戴」

すっかり忘れていた。自分が全てを見通すスキルを持っていることに。これでこいしの位置がわかる。

レイジは立ち上がり、ユーバーセンスを発動。左目の色が変化する。姿は見えないままだが、こいしは自分のすぐ目の前にいることがわかった。

こいし「死ぬ準備はできた？くらえッ！」

こいしは急に姿を現し弾幕を放つ。大方目の前に現れて驚いている隙に攻撃しようと思っていたのだろう。しかしもうその戦法はレイジには通用しない。レイジは後ろに下がり、神機を捕喰形態に変え、弾幕を喰らう。

こいし「えッ！？わッまぶしッ！」

捕喰形態から剣形態に戻すと、レイジから眩い光が溢れる。レイジはバースト状態になったのだ。その時、彼の瞳から青白い炎のような、オーラのようなものが溢れ出す。これはレイジにのみ起こる現象だ。

話が変わるが、過去にサカキ博士がこの現象を不思議に思い、調べてみたところ、こんなことがわかった。

〈回想〉

サカキ「レイジ君、その目、アラガミのものだね？」

コウタ「はあ！？なんだよそれ、レイジ、なぜ黙ってたんだよ？」

レイジ「・・・」

コウタ「なんでそこで黙るんだよ！」

アリサ「コウタ、落ち着いてください！ここでリーダーを責めても意味はありませんよ！」

サクヤ「その通りよ。・・・レイジ、もしかして、それは君の家がアラガミに襲われた時に・・・？」

レイジ「・・・（コクッ）」

サカキ「詳しくは聞かないでくよ。それに、その目でも日常生活に問題はないようだしね。さて、データによれば君は捕喰攻撃をすると、それだけでリンクバーストLv.3並みに能力が上昇するようだ。つまり通常の三倍以上だね。・・・ん？受け渡し弾をもらって大丈夫なのかって？ああ、君はこれまでに何回かもらったけど大丈夫なんだろう？。心配はいらないよ。ん、実に興味深い！」

コウタ「相変わらずだな、博士・・・」

（回想終）

バーストしたことによって、先程よりも遥かにレイジの動きは俊敏になり、状況は一転した。

こいし「あ、あれ・・・速すぎてよく見えない・・・。でも、姿をくらませば!」

こいしの「無意識を操る程度の能力」で、レイジに姿を無意識に見えなくするようにする。しかし、レイジはじつとこいしのいる方向を見つめている。

こいし「な、なんなの・・・!?!まさか、私の居場所がバレてるの!?!」

レイジはその通りだといつかのようにうなずく。

こいし「う、嘘だ嘘だ!そんなの嘘に決まってる!」

こいしは半ばパニックに陥り、レイジを引き裂こうと突進しこいしの腕が振り下ろされる。しかしレイジは瞬間移動したかのようにその場からいなくなっていた。

こいし「え・・・(ブンツ)ッ!?!・・・う、うああ・・・」

何かを振るような音が聞こえたので振り向くと、目の前で神機を突

き付けるレイジの姿が。こいしは恐怖のあまり涙が溢れ、その場に座り込んでしまった。

こいし「いやだ、死にたくない、死にたくない！いやだよ・・・！私はただ、皆と平和に暮らしたかっただけなのに！」

戦意喪失を確認した後レイジは神機をしまい、こいしの目線に合わせてしゃがみ、自分は敵ではないことを話し始める。優しく、諭すように。

こいし「・・・ほんと？だってお燐とお空を傷つけたのに・・・」

あれは自衛の意味で応戦しただけだということ、本来はアラガミという怪物を倒すために地霊殿に来たこと、燐と空にケガは負わせず、装備を破壊しただけだということなど、誤解を解くために、丁寧に説明をした。

こいし「そうなんだ・・・てつきり、人間の仕業かと思ってたよ。地底の妖怪はあんなことしないから、きっと人間が地上の怪物を送り込んだんだと思って・・・。だから・・・あいつらが襲ってきたとき、殺されるんじゃないかと思った。昔、私のお父さんとお母さんは人間に殺されて・・・私とお姉ちゃんもケガしたの。それで今日、あいつらがやってきた時、まだ人間に命を狙われているんだと思ったら、すごく怖かった。とにかく・・・怖かったよ・・・」

こいしは完全に泣きだし、なだめるかのようにレイジは優しく頭を撫でる。するとこいしは突然レイジの胸に飛びつき、

こいし「本当は、あなたと戦うのも怖かった・・・うつく・・・あなた、人間だよな・・・ねえ、本当に私達の味方なの・・・？」

レイジ「・・・（コク）」

こいし「ひッ・・・うああん・・・」

しばらくこのままにしておいてやろう・・・レイジは胸の中で泣くこいしの頭を撫で続けた。

時は少し遡り、燐達が逃げる際に叫んだ人物、さとりは――

さとり「あんなところにまで怪物が・・・。幸いこの階にはいないみたいけど、攻撃が効かないなんて厄介で仕方ないわ。地底にこんな姿をした者はいないし、地上から来たとは思えないわね・・・誰の仕業かしら・・・」

燐・空「さとりさまあああ！」

さとり「どうしたの、そんな泣き顔で（少女読心中・・・）・・・侵入者の親玉らしき者が！？」

空「そうなんです！戦ったんですがなんかあいつ強くって！制御棒があ……」

「
燐「なんか人間っぽい感じでしたけど……ああ、リボンがあ……」

さとり「……………」

燐「……？あの、さとり様……？」

さとり「人間……敵……！！」

空「さとり様……！？」

さとり「……お燐。代わりのリボンをあげるからこれで結びなさい。お空。制御棒の予備はまだたくさんあったはずよ。早く準備を済ませて返り討ちにしましょう」

燐・空「……はい」

空「（なんかさとり様……怖い）」

鬼気迫る表情のさとりに燐と空は若干恐怖心を抱き、侵入者——
——レイジを始末する準備を急いだ。

Mission 4 ダンス・パーティ2（後書き）

弟「・・・なあクソ兄貴」

作「あ？」

弟「今思っただが、神機をしまうホルスターって何ぞや」

作「・・・あ」

弟「ホルスターっていやあさ、銃を入れるもんだろ」

作「・・・レイジのは銃形も「誤魔化すな」

作「・・・」

弟「・・・」

作「第一話改稿してくらあ」

弟「ああ」

すみません（・・・）ホルスターといっても、神機をしまつたためにアレンジされたモノだと思って頂ければありがたいです；

Mission 5 地獄（前書き）

皆さん、おはこんばちは、wingです。今回は作者暴走回になってしまいました・・・あと、残酷描写が出てきます。色々な意味で、閲覧注意です。

Mission 5 地獄

さとり、燐、空は、レイジを討つ準備を済ませ、レイジがいる四階へ足早に向かっていた。だが燐、空はレイジの行動を思い返し、侵入者にしては妙な戦い方をしていたなと疑問に思い始めていた。

さとり「（そういえば・・・こいしがいない・・・早く探さないと・・・。まったく、人間が・・・今更私達に何の用なのよ・・・!）」

燐「あの・・・さとり様・・・実はその・・・あいつのことなんです」

さとり「何?」

さとりは「今私に話しかけるな」というような鋭い視線を燐に向ける。

燐「ツ・・・! いえ、何も・・・」

空「あの・・・さっき、あいつと戦ってて、少し思ってたんでs」

さとり「大丈夫よ、あなた達は私が守るわ」

空の発言を妨げるように、さとりは言葉を重ねた。

燐「(うわぁ・・・完全にこいし様のことで頭が一杯になってるよ・・・)」

空「(こうなるとさとり様、心を読むことすら忘れちゃうもんなぁ・・・)」

さとり「(この子達にも、こいしにも、もうあんな悲しい目には合わせたくない・・・絶対に守ってみせる・・・!)」

一方、レイジ達は――

こいし「ぐすん・・・やっぱり、人間は悪い人だけじゃないんだね」

レイジ「・・・」

こいし「わかってたつもりだったんだけど、人間を見る度に、昔のことを思い出しちゃってね・・・でも、これで人間嫌いが少しは治るかも。あなたのような優しい人間に出会えたから・・・」

こいしは徐々に泣き止んでいるが、まだレイジの胸にしがみついている。

こいし「そういえば、まだ誤解して攻撃したことを謝ってないね・・・ごめんね」

レイジは気にすることはないと言ったかのように微笑みかける。

こいしも、彼の微笑みを見て安心したのか自然と笑顔になっていた。暖かい雰囲気が彼らの周辺を包み込む。しかしそれは長くは続かず、一人の少女によって一瞬で打ち破られる。

さとり「こいし！」

こいし「お姉ちゃん！お隣、お空も無事でよかった！」

部屋の奥から現れたさとりは声を張り上げてこいしを呼ぶ。しかし後ろにいる隣、空の様子がおかしい。なぜか気難しい顔をしている。こいしは一瞬嫌な予感がしたが、深く考えず素直に家族の無事を喜んだ。しかし・・・

こいし「大丈夫！？ケガはない！？」

こいし「うん、大丈夫だよ。お姉ちゃんも大」

さとり「人間め！私の妹に触るなあ！！」

こいしの予感の中、今のさとりは今回の事件を人間の仕業と思い込み、家族を守ることに躍起になっていた。さとりはレイジに突進、彼の首を掴み、そのまま壁に叩きつける。レイジは振りほどこうと

さとの腕を掴むが、思っていたよりも力が強く、振りほどけない。妖怪故の力だろうか。

こいし「お、おお姉ちゃん!？」

さと「今の私達があの頃のひ弱な少女のままだと思いましたが・・・?もしそう考えていたのならば、それは大きな間違いですよ・・・人間・・・!!」

こいし「お姉ちゃん!やめてよ!お姉ちゃんなら心を読んでこの人の本心がわかるでしょ!？」

さと「人間如きにこの能力を使うまでもないわ!人間は「悪」!人間はいつだって自分勝手で、自らの利益のために私達妖怪は住処を追われ、虐殺され続けてきた!」

空「さ、さとり様、別にそうと決まったわけじゃ」

さと「そうに決まってるわ!これは事実なのよ!・・・ねえ、人間。あなたにこの気持ちわかりますか?妖怪退治と称して罪のない妖怪までもが虐殺され、毎日彼らに怯えながら過ごす私達の気持ち・・・!」

レイジにとつては何が何だかさっぱり、さとりは滅茶苦茶なことを口走ってゆく。さらに首を掴む手をさらに強く締め付ける。

レイジ「・・・ッ!」

燐「さとり様！お止め下さい！」

さとり「あなたには、私達の苦しみの片鱗を味わわせてあげましょう・・・。妖怪の恐ろしさを、思い知らせてあげます」

レイジ「・・・！！」

さとり「・・・何か言いたそうな顔ですね」

レイジ「・・・ふざ・・・けるな・・・！」

さとり「・・・は？」

レイジ「さつきから聞いてれば・・・言いたい放題言って・・・俺
は・・・人間おれたちは・・・お前に定義されるほど・・・ッ、」

レイジ「簡単な存在じゃない！！！！！」

レイジは思い切りさとの腹を蹴り、首から手を離させる。レイジは強く首を絞められていたため、咳込む。

さとり「ぐッ・・・！そんなに死にたいのですか？いいでしょう、では眠りを覚ます恐怖の記憶トラウマで眠るがいい！！」

こいし「お姉ちゃん！！やめてえええ！」

さとり「想起「テリブルスーブニール」！！」

さとりはスペルカード名を叫びながら、レイジの目を覆うように顔を掴む。するとレイジの視界には、あの忌まわしい事件の光景が・

・

一方、地霊殿周辺では――

レン「ふう、ようやく終わりましたね」

アーティ「そうね。・・・はッ！レイジが危ない！！」

突然アーティは地霊殿の入り口に走り出す。そして閉じられた扉を蹴破り、中に入っていた。

レン「アーティさん！？あつ待って下さいよー！」

レイジがまだゴッドイーターになる2年前――

夜、戌亥道場にて

レイジ父「よし、今日の稽古はここまで！！」

弟子「ありがとうございますー！」

レイジ母「お疲れ様、あなた、カナ」

カナ「ねえ母さん、レイジは？なんか昼から見かけないんだけど」

母「ああ、あの子ならフェンリル支部からの呼び出しで出かけてるわ。あの子、神機使いになって人々を守るのが夢だって言ってたから、きつと張り切ってるでしょうね」

父「ははは、違くない」

戌亥一家は父、母、レイジの姉にあたるカナ、レイジの四大家族だ。戌亥家はみな武術に長けており父は柔道、母は剣道、カナは空手を得意分野としている。レイジはどれにおいても突出した才能を持ち、どれも得意だ。この日、レイジは神機の適合候補者に選ばれたという事で極東支部で手続きをしに出かけていた。父、カナは稽古で掻いた汗を拭き、母は二人にスポーツ飲料を持ってくる。弟子達は雑談しながら帰宅の準備をしており、まるで絵に描いたように幸せな生活を送っていた。

しかし・・・

ズドーーーーーン!!

全員「!?!」

?「お邪魔しまーすww」

なんと突然、アラガミ達が道場の壁を突き破って内部に侵入してきたのだ。幸せな日常は一瞬で地獄と化した。ふざけた口調で道場に侵入してきたアラガミは、上半身には妖艶な女性、下半身には禍々しい巨大な四肢。対照的な容姿を持つ、「ヴィーナス」だ。

ヴィーナス「さあお前達、こいつらが今日の夕飯だ、残さず食べるんだよ」

すると壁に開けられた穴からたくさんのアラガミが侵入し、弟子たちを喰らっていく。喰われた者達の肉片が飛び散り見るも無残なこ
とになっていた。

父「お、お前ら……！！貴様ああよくも！」

カナ「あ、あれ……アラガミ！？」

母「逃げるわよ！あなた！早く！」

父「俺がこいつらを食い止める！その隙にお前らは逃げる！」

母、カナは無茶だと父に逃げるよう急かすが、父は全く逃げる素振りを見せないため断腸の思いで二人だけで逃げ出すことにした。

ヴィーナス「おや、あたしから逃げられると思ってるのかい？……
・お前達、」

彼女が指示すると、そばにいたオウガテイル二匹が二人を追い始める。

父「くッ！させるか！」

ヴィーナス「おっと、あんたはあたしと遊ぶんだよ」

父「何が遊ぶだ！俺の可愛い弟子たちを殺しやがって！許さんぞお
おー！」

ヴィーナス「おお、こわいこわい（笑）でも、あんたのような威勢
のいいヤツは嫌いじゃないよ！」

そのころレイジは、念願の神機使いになれると意気揚々と帰宅の道を歩いていた。この知らせを聞いて家族はどんな反応をするか楽しみだ。想像を膨らませながら家に続く曲がり角を曲がると、

なんと上半身だけで倒れているカナの姿が。あまりに無残な状態なのでレイジはひどく驚愕した。

レイジ「ッ!？」

カナ「レイジ・・・なの・・・？」

レイジはカナの背中に手を回し、顔をこちらに向けさせる。

カナ「かあ・・・さん・・・父さ・・・んが・・・」

そう言うと、カナは静かに目を閉じた。

レイジ「・・・!!」

ふとレイジはカナから続く血の跡を見つけ、目で辿る。現在の場所からそこまで離れていない場所に、誰かの左腕が無造作に転がっているのを発見した。

薬指に指輪をはめている。あれは恐らく、母の・・・

レイジはわけがわからなくなり、呆然と、ふらふらと家に向かう。その家もかなりの部分が破壊され、中に入っても、無残な死体、死体・・・

すると、父がいないことに気付く。辺りを見渡して、探していると、

ヴィーナス「探しているのはこいつかなあ？」

レイジ「!？」

レイジの背後から声が聞こえる。振り向くと、レイジの父親――

――の生首を持っているヴィーナスの姿が。

ヴィーナス「首から下はこのヴィーナスがおいしくいただきましたwwあー満腹満腹」

レイジは絶望し、その場にへたり込む。すると突然、レイジの目の前で爆発が起きる。運の悪いことに、爆発で飛び散った破片がレイジの両目を切り、彼は両目を押さえもがき苦しんでいた。

ヴィーナス「わっバカ！クアドリガ何やってんの！？勝手に邪魔すんじゃないよ！」

クアドリガ「ガウ・・・」

ヴィーナス「喰わないのかだって？もうお前腹一杯なんだろ！？ちよつとは腹八分を覚えたらどうだい！？まったく、あたし達が生きていくためにも、人間どもを余計にけしかけさせないためにも、無闇な手出しはすんな、いいね？」

クアドリガ「（´・ω・｀）」

ヴィーナス「・・・本当はあたしだって、自由に暮らしたいのさ・・・でもどの星に移り住んでも、いつも行った先の星の住人に邪魔されちまう・・・もうこの地球が、あたし達の住める最後の場所なんだよ。あんたは長いこと一緒にいたからわかるだろ？」

ヴィーナスはレイジを片手で拾い上げる。レイジは目を押さえ、じ

たばたともがいている。

ヴィーナス「坊や、今日のところは見逃してやるよ。ウチの連れが悪いことしたね。お詫びについてはアレだが、受け取りな」

すると、ヴィーナスは突然自らの両目を取り出し、レイジの目玉も取り出そうと指を動かす。

レイジ「・・・！！」

ヴィーナス「暴れるんじゃない・・・もう少しで終わるから我慢しな、男だろ？・・・よっ、こうして・・・ほい、交換終わった・・・ちよつとものが見えにくいねえ坊やの目は。まあ切れちまったから仕方ないか」

ズバンッ！！

クアドリガ「・・・グガア！？」

ヴィーナス「！？」

突然、クアドリガが血を吹き出し倒れる。どうやら神機使い達がやってきたようだ。メンバーの中にはリンドウの姿もあった。

ヴィーナス「ちッ・・・！！ここに来たとなると、もう表のヤツらは

やられちまったか・・・」

リンドウ「おい！お前、その子に何してやがる！..」

ヴィーナス「え？ケガの治療」

リンドウ「お前達アラガミに、そんな情があるとは思えないがな！..
..ん？お前、喋れるのか？」

ヴィーナス「そうだよ。それが何か？」

リンドウ「へ..ってあ..ったく、お喋りしてる場合じゃない
だろ俺..... そいつを放せ！」

リンドウはヴィーナスに飛びかかり、一太刀浴びせようとする。ヴィーナスはそれを避け、

ヴィーナス「そのつもりだよ、こいつにはもう用はないし。じゃあ
ね」

ヴィーナスはポイとレイジを投げ捨て、道場を後にする。

リンドウ「あつこんの待ちやがれ！.....くそッ、あの速さじゃ追
いつけないな」

神機使い「さ、もう大丈夫だよ。立てるかい？」

レイジ「ッ・・・」

レイジは未だ目を押さえて苦しんでいる。

レイジの目の辺りを中心に、何かに蝕まれるような、痛みなのかよくわからない感覚に襲われる。とにかく苦しい。すると目を押さえていた手の内側から、目から流れ出たのだろうか、血が滲み、滴り出す。

レイジ「ううううううううあああああああああああああ
ああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

こいし「！？目から血が・・・！？」

レイジは蘇る感覚にたまらず絶叫し、目を覆うように顔を掴むさとの手の内側から、血が滴るのが見え、それに一瞬怯むこいし。

レイジ「ううううううううあああああああああああああ
ああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

こいし「！？目から血が・・・！？」

レイジは蘇る感覚にたまらず絶叫し、目を覆うように顔を掴むさとの手の内側から、血が滴るのが見え、それに一瞬怯むこいし。

レイジ「ううううううううあああああああああああああ
ああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

こいし「！？目から血が・・・！？」

レイジは蘇る感覚にたまらず絶叫し、目を覆うように顔を掴むさとの手の内側から、血が滴るのが見え、それに一瞬怯むこいし。

さと「痛いですか！苦しいですか！私達はそれを長い間経験してきたのです！」

さとりは握りつぶさんとするばかりに手に力を籠める。こいし、燐、空は見るに耐えられなくなり、三人がかりでさとりを羽交い絞めにし、レイジから距離を置かせる。

燐「さとり様・・・いくらなんでもやり過ぎです！」

空「私達はもう人間を憎んでなんていませんよ！」

さと「放して！放しなさい・・・ッ！人間なんて・・・人間なんて！」

さとりは腰にしがみついて制止させようとしたこいしを振り払い、こいしはしりもちをつく。いつまでも暴走を止めないさとりに、こいしはとうとう堪忍袋の緒が切れた。

こいし「突撃「無視すんなゴルアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」」

さと「がはあッ！？」

燐・空「！？」

まるでラグビー選手の如き低めの姿勢からのタックルでさとりに突撃。さとりは大きく体を反らしながら吹き飛んだ後倒れこみ、大きく咳込む。

こいし「お姉ちゃん！いい加減にしてよ！確かにこの人は人間だけど、私達を苛めたあいつらとは違う！ここを襲った怪物だって、ほとんどこの人がやつつけてくれたんだよ！！それに今の人間はお姉ちゃんが思ってるほど意地悪な存在じゃないの！実際、地底に引越してからは何事もなく楽しく暮らせたし、たまに地上に出かけても問題なかったでしょ！？ならもういいじゃない！」

燐「（やつぱり・・・おかしいと思ってたんだ。だから私達に極力攻撃してこなかったんだね）」

さとりはようやく我に返り、勢いだけによる行動を恥じる。こいしはその様子を見ると、普段の口調に戻し、

こいし「ここは全てを受け入れる幻想郷なんだよ？なら、人間も妖怪も、仲良く暮らしたっておかしくないんじゃない・・・？」

さとり「・・・」

燐「さとり様、今回はあなたが悪いです。今あなたがしたことは、罪のない者を苛めているも同然ですよ・・・どうか冷静になつて下さい」

空「うにゅ！外にいた怪物が皆倒されてる！」

燐「いい知らせだけど、肝心な時によそ見しないでくれるかなあ・
・」

さとり「・・・ええ。確かに短絡的過ぎたわ。あのことが絡むと、
どうもいても立つてもいらなくなってしまう・・・そのあなた、
・・・先程はごめんなさい。あの・・・少しよろしいですか・・・
？」

さとりはレイジに語りかける。しかしレイジはぐったりとした様子
で、目は虚ろになり、目からの出血も止まってきてはいるがまだ余
韻がある。さとりは自身の能力で心を読もうとするが彼は完全に放
心状態となっていたため、何も読み取れなかった。

さとり「あ・・・」

レイジ「――」

燐「さとり様、今は彼の前にいない方が良いかと。心に大きく傷を
負っているようですから」

さとり「・・・お燐。私はここに残るわ」

燐「さとり様！」

こいし「いいんじゃない？多分、その方がいいよ」

燐「ですが・・・！」

こいし「私、この人のおかげで少しだけ人間嫌い、治ったんだ！お姉ちゃんもこの人とお話してごらんよ！きつと私みたいに人間嫌いが治るかもね！」

燐「ですが彼のあの状態を考えr」

こいし「いいのいいの！二人きりにしてあげよ！さ、邪魔者はとつとと退散しようか！」

燐「わわわ・・・」

空「あ、こいし様あ、どこ行くんですか？あ、お燐、その体勢のままH A N A S E っって言ってみてw」

燐「誰が言うか！」

こいしは燐を引っ張って下の階へ行く。窓の外を見ていた空はそれを見て無意識につられてついていった。

さとりとレイジだけが部屋に取り残され、しばらくの静寂が場の空気を支配する。しかしいつまでも黙っているわけにはいかないと思い、さとりは口を開く。

さとり「先程は本当に申し訳ありませんでした。私は古明地さとり。覚の妖怪で、この地霊殿の主です。私をお姉ちゃんと呼んでいた子は妹のこいし。猫の風貌をしていた子はお燐、翼がある子はお空。あの二人は私のペットです。あなたのお名前は・・・？あ、無理に言わなくてもいいですよ？頭に思い浮かべてくれれば、それを読みとりますので・・・（少女読心中・・・）戌亥レイジさん・・・で

すね。まずは私の部屋に移りましょう。そこで少し横になって下さい」

レイジは大きな精神的負荷を与えられてしまったため、動くのもままならない。ゆっくりと立ち上がるレイジをさとりは補佐し、彼の歩くペースに合わせて、少しずつ彼女の部屋に向かった。

Mission 5 地獄（後書き）

弟「ちょwwwさとりん暴走させすぎだろwww」

作「気が付いたらこうなってた。後悔はしていない」

弟「無意識なら仕方ない」ってか？前書きであんなに未練たらし
くしてたくせによ・・・」

作「レイジが初めて喋ったよ！トラウマも見せたよ！」

弟「でも喋らせた結果がこれだよ！カ〇ーユみたいになっちまって
んじゃねえかよ・・・」

小説を書くのは難しいですね・・・

M i s s i o n 6 傷痕（前書き）

皆さん、おはこんばちは、wingです。だんだん一話一話が長くなってきたいる気がします。区切りつて難しいですね。それでは本編どうぞ。

Mission 6 傷痕

一方、アーティ、レンはレイジを探して地霊殿の至る所を走り回っていた。

アーティ「どこ・・・どこなのよ・・・!」

レン「一体どうしたんですか!さっきから真剣な顔して・・・」

アーティ「普段あたしが真面目じゃないとも言いたいの!?!今レイジがヤバいのよ!」

レン「レイジさんを見ていないのになぜわかるんですか!?!」

アーティ「ていきーんときたのよ!」

レン「・・・」

アーティ「ノリなさいよ!」

レン「・・・いつも通りですね」

同時刻、さとのりの部屋に着いたレイジ達。レイジは神機入りのホルスターを部屋の入口近くに立てかけ、さとりは近くにあったソファにレイジを寝かせる。レイジの目からの出血も止まり、目に光を取り戻し始めていたので、それを見てひとまず安心する。

さとり「しばらくはここで休んでいて下さい。何かありましたら声をかけて下さいね」

とはいえ、さとりは何をすればいいのか思いつかず、とりあえず部屋の片づけをすることにした。しかし元々そこまで散らかっていなかったため、すぐ終わってしまった。何をしようか戸惑う彼女を見て、レイジは微笑を浮かべる。

さとり「ど、どうかしましたか？」

レイジは黙ったまま、微笑を浮かべ続けている。さとりは心を読み、彼女のぎこちない挙動を心中で笑っているのを読み取る。

さとり「な、何を考えてるんですか、もう・・・／＼・・・ん？」

レイジ「・・・」

レイジは眠くなっていたのか、目を閉じ、静かに寝息を立てていた。

さとり「（・・・そういえば、こいしがよくあのソファで勝手に昼寝していたわね）」

さとりはレイジが横になっているソファに腰掛ける。そして膝の上に彼の頭を乗せる。いわゆる膝枕をしたのだ。

さとり「（こうして、よく唄を歌ってあげたっけ・・・）」

そう思うと、こいしを膝枕していた時によく口ずさんでいた唄を歌い始めた。

レン「この部屋かな・・・」

その頃、レン達は別行動をし、レイジを探していた。現在レンはさとの部屋に入ろうとしている。

レン「失礼します・・・」

さとり「！・・・どなたですか？」

レン「えッ・・・！？いや、あの、レイジという人を探してたんだ」

さとり「レイジさんのご友人ですか？彼ならここにいますよ」

レン「えっ・・・あ、本当だ・・・ってレイジさん？眠ってるのかな・・・？」

さとり「ええ、まあ・・・」

レン「よかった・・・とりあえず一安心ですね」

するとアーティがドアを乱暴に開け、中に飛び込んできた。

アーティ「レイジ！どこなの！？・・・あ、レン、いたの？」

レン「他人の家なんですから乱暴にしないで下さいよ・・・。レイジさんならここで眠っています」

アーティ「そう・・・よかった・・・ハア・・・ハア・・・」

さとり「あなたもレイジさんのご友人ですか？」

アーティ「！？・・・どうしてわかったのよ」

さとり「・・・今「なぜ自分の姿が見えるのか」と思いましたね？」

アーティ「・・・なんでわかるのよ。はぐらかさないで答えなさいよ」

さとり「申し遅れました。私は古明地さとり。覚の妖怪で、この地霊殿の主です。そして私はこの第三の目で相手の心を読むことが出来ます。私があなた達を見ることができる要因は恐らくこの能力でしょう。あなた達の正体は彼」

さとりはレン達の正体を口にしようとするが、レンがすかさず止める。

レン「待つて下さい。そのことは、レイジさんの前では言わないでくれますか？もしかしたら起きてるかもしれないので」

さとり「・・・わかりました」

アーティ「ふうん……。覚だけにさとりってワケね・・・」

レン「だからって声に出す必要もないんじゃないですか・・・？」

アーティ「ノリなさいよ」

レン「嫌です」

アーティ「・・・で、レイジは大丈夫なの？こいつの顔に血の跡が見えるんだけど、何かあったんでしょ？」

さとりは急に落ち込んだ表情になる。

さとり「・・・何もなかったといえば、嘘になります・・・」

アーティ「あ？どういうこと？・・・まさかあんた・・・レイジに何かしたんじゃないでしょうね？」

さとり「・・・はい」

アーティ「・・・！」

アーティはさとりに詰め寄り、胸倉を掴み上げる。

アーティ「あんたいったい何をしたのよ！」

さとり「・・・私は今回の事件を人間の仕業と思い込み、家族を守ることばかり考えていました・・・」

アーティ「あいつに何をしたかって言ってるのよ!!」

レン「アーティさん！落ち着いてください！暴力はいけませんよ！・・・さとりさん、すみません。続きを話して下さい」

レンが間に入り、アーティを制止させる。

さとり「一言で言えば、怪物を倒しに來ただけの彼を今回の事件の犯人と思い込み、スペルカードで彼のトラウマを見せ、精神を傷つけました・・・」

レン「先程あなたは、心を読めると言いましたね。レイジさんを襲ったとき、その能力は使わなかったのですか？」

さとり「・・・あの時は家族を守ることで頭が一杯だったため、能力を使うことを忘れていました・・・。その時まで、人間は全て悪だと思い込んでいたので、どうせ彼も同じ悪なのだろう・・・ならば心など読むだけ無駄だと、完全に彼のことを無視していました」

アーティ「フン、どっちが悪よ・・・。覚も心を読むのを忘れるこ

とがあるのね？」

レン「アーティさん！なんでそんなにケンカ腰なんですか！彼女は家族を守るためだったんです、人間が悪というのは僕も納得いきませんが仕方ないじゃありませんか！アーティさんがさとりさんの立場だったら、同じことをするかもしれないでしょ！」

アーティは不意を突かれたのか、何も言い返せず、不満そうに舌打ちをし、体を背けた。

さとり「いえ、お気になさらずに。今回は完全に私が悪いと思ってます・・・本当に申し訳ありませんでした。こんな私は、嫌われても仕方ありません・・・」

嫌な間が空き、険悪な雰囲気部屋を覆う。しばらくの沈黙の後、アーティが体を背けたまま、口を開く。

アーティ「・・・で、結局レイジの容体はどうなの」

さとり「はい、順調に回復してきています。先程は、私に微笑みかけるほどd」

アーティ「あつそ。それを聞いて安心したわ。レイジがあんたを許してるならあたしも許す。さっきは悪かったわね」

さとり「えっ・・・！？いえ、お気になさらずに・・・」

レン「もう、びっくりしましたよ・・・」

アーティ「さて、やっと一息つけるわね」

レン「ここに迷い込んでから、殆ど休みなしで行動してきましたからね」

レンとアーティはレイジが横になっているソファアの反対側にあるソファアに腰掛ける。すると、妖精がボロボロの姿で部屋の中に入ってきた。

妖精「さとり・・・様・・・大変です・・・」

さとり「どうしたの！？・・・その様子じゃ、かなりまずいことが起きたようね」

妖精「今までより大きなバケモノが・・・空さん・・・が・・・管理している・・・灼熱地獄・・・に・・・」

言い終わらない内に、妖精は倒れこみ、気絶してしまった。

さとり「大丈夫！？しっかりしなさい！・・・くっ、お空たちが心配だわ・・・今すぐ向かわなくては・・・！お二人とも、レイジさんを頼みます！」

さとりは大急ぎで地下に向かう。

レン「あっ！待って下さい！まずいですね・・・僕達三人以外では、大型アラガミにはば勝ち目はありません！僕達も行かないと・・・」

しかしレイジを置いていくわけにもいかない。仕方ないので、アーティが下層に行き、レンが留守番をすることにした。しかし・・・

アーティ「じゃあ行つてく・・・あッ！」

レン「どうかしましたか？・・・えッ！？」

なんとソファで眠っていたはずのレイジが忽然と姿を消していた。立てかけていた神機もない。恐らく妖精の言葉を聞いて飛び出したのだろう。二人も急いで灼熱地獄に向かった。

その頃、灼熱地獄では――

隣「くッ・・・こいつ、なんて・・・強さだ・・・！」

空「何度もメガフレアを・・・当ててるのに・・・」

こいし「全然効かない・・・なんて・・・うう・・・」

こいし達はレイジをさとりに任せた後、灼熱地獄で妖精も交えて遊んでいた。そんな時、突如空からアラガミが降下、こいし達を襲う。そのアラガミは、「ハンニバル」だ。

ハンニバルは炎に耐性を持っている。地霊殿を襲ったアラガミのほとんどは火属性に弱かったため空のスペルカード、爆符「メガフレア」によって倒されていたが、ハンニバルには通用せず、一方的に攻撃を受ける形となり、妖精達は壊滅状態、こいし達もやられる寸前まで追い込まれてしまった。

空「体が・・・言うこと聞かないよ・・・」

燐「ここで・・・やられるわけにはいかないのに・・・」

こいし「お姉ちゃん・・・」

ハンニバルは止めの一撃を決めようと腕を振りかぶる。

さとり「待ちなさい、怪物！」

ハンニバルが腕を振り下ろそうとしたその時、上空からさとりが現れ、弾幕を放ち注意を逸らす。

空「さとり様・・・こいつ、私のスペカでも齒が立ちませんよ・・・」

「！」

さとり「あなた達！私がここで注意を引くから、逃げなさい！」

燐「そんな・・・！一人で戦うなんて無茶です！」

こいし「・・・はっ、そうだ・・・！ねえお空、あの怪物、マグマに突き落とせないかな？メガフレアはダメージを与えられなかったけど、のけぞらせることはできるでしょ？」

空「そっか、そうすればなんとかなるかもしれないですね！」

三人は最後の力を振り絞って立ち上がり、こいし、燐は空にメガフレアを撃たせるため、注意を引く。

さとり「何をやってるの！早く逃げなさい！」

こいし「嫌だね！」

燐・空「嫌です！」

こいし「お姉ちゃん、こいつをマグマに突き落としてみようよ！もしかしたら倒せるかもしれない！」

さとり「・・・仕方ないわね。あなた達、ケガをしてるみたいだから私が先頭になるわ。無理をしちゃダメよ？」

こいし「うん、わかった」

さとり、こいし、憐でハンニバルの攻撃が空に向かわないように引き付けつつ、崖際に誘い込む。空は制御棒にエネルギーを集中させる。そして――

空「チャージ完了！爆符「メガフレア」、皆離れて！」

さとり達は真上に飛び、射線上から退避する。空はそれを確認し、残る力全てを籠めた渾身の一撃を放つ。

空「地獄に・・・落ちろおおおおお！！！」

ハンニバルは背中を向けていたため空の攻撃に気付かず、メガフレアが直撃する。ハンニバルは踏み留まろうと踏ん張るが、少しずつ崖の方向へ押されていく。もう少しで落下するところまで押されたその時、

ハンニバル「グオオオオオオオオ！！！」

ハンニバルの背中中の逆鱗が壊れ、炎が溢れ出す。それはまるで翼のようだ。そして腕に炎の剣を纏い、メガフレアを切り裂き、消滅させる。

空「え・・・」

こいし「うそ・・・」

最後の希望を文字通り断ち切られ、愕然とする。だがハンニバルはそんな暇も与えず、上空にいるさとり達に向かってジャンプし、ハンニバルは長い尻尾で攻撃しようとする。

さとり「（はッ！！まずい！）」

咄嗟にさとりは前に出て燐達をかばう。しかし三人とも攻撃を食らってしまい、地面に叩き付けられる。

さとり「ぐはッ！」

こいし「あうッ！」

燐「ぐあッ！」

さとりは比較的ダメージの蓄積が少なかったため何とか起き上がったが、こいし、燐は力を使い果たし動くことができなくなっていた。空も全ての力を籠めて発射したため、倒れこんでしまう。

空「もう・・・立てない・・・」

こいし「うう・・・そん・・・な・・・」

燐「どう・・・すれば・・・」

さとり「みんな・・・！くッ・・・！」

さとりはハンニバルの前に立ち、両腕を広げる。

さとり「（この子達だけでも守らなければ・・・！）」

こいし「お姉・・・ちゃん!？」

ハンニバルはかまわずパンチをしようと左腕を振りかぶる。すると
燐が上空に何かを見つける。

燐「・・・？・・・はっ、さとり様、あれを！」

さとり「え・・・？」

さとりは上に視線を向ける。何かがこちらに落ちてきているのが見える。よく見ると、なんとレイジの姿が。

さとり「レイジさん！」

さとりに、彼はまさに絶望的状况を覆す希望の光のように見えた。ハンニバルがさとりにパンチをしようと左腕を振り始めている。レイジは落下しながら神機を捕喰形態に切り替え、左腕を喰いちぎった。

ハンニバル「グオオオオオオオ!!」

ハンニバルは悲鳴を上げ、痛がっている。レイジはその隙に状况を確認。さとり達はボロボロの状态だ。それを見るとレイジはポケットから「回復錠S」を出し、四人に渡す。

さとり「これは・・・錠剤？」

こいし「飲めばいいの?・・・あ、水なしー錠って書いてある」

燐「迷ってる時間はありません。ありがたく使わせてもらいましよ
う」

空「（ボリボリ）ん、おいし」

四人はすぐ回復錠Sを飲み込む。すると、失われていた元気が一気に戻ってきた。

空「うおおおお、元氣百倍!」

燐「ありがとう、恩に着るよ」

こいし「体が軽い！」

さとり「ありがとうございます、レイジさん」

ハンニバルは怒りで活性化し、雄叫びを上げる。レイジの神機が先程喰らったハンニバルの左腕を喰い終わり、剣形態に戻る。レイジは再びバースト状態になり、弾丸のような速度で敵に向かってダッシュする。ハンニバルは迎え撃とうと爪で攻撃する。レイジはギリギリで避けつつ、ハンニバルの右腕の勢いを利用して刃をめり込ませる。両腕をやられたハンニバルは立つことがままならず、よろよろとしている。

さとり「・・・すごい」

こいし「なんか私達必要ない感じ？」

さとり達は後方から援護していたがレイジのあまりにも圧倒的な戦いぶりに必要ないのではと思い始めていた。レイジは止めに神機を肩に置くような形で構え、神機に意識を集中させる。すると刀身に紫のオーラが発生し、巨大な刃が形作られる。ハンニバルはそれに気づいたのか、フラフラとした足取りでレイジに向かってくる。そしてレイジは、神機を振り下ろす。スペルカード風に言えば、

両断「チャージクラッシュ」といったところか。

ハンニバルは真つ二つになり、ズズンと崩れ落ちる。レイジは神機でハンニバルのコアを捕喰しながら皆の無事を確認する。

燐「・・・これで騒ぎも落ち着きそうですね」

さとり「そうね。・・・レイジさん、危ないところをありがとうございしました。いとも容易くあの怪物を倒すとは・・・その武器には何か秘密があるのですか？」

こいし「もしかして、その武器じゃないと倒せないとか？」

レイジは今回の事件で現れた怪物、「アラガミ」について説明した。

空「へー。つまりあんたじゃないとあいつらを倒すのは難しいんだ」

燐「どうりでお空の大技しか攻撃が効かないわけだよ・・・」

一方で、アーティ達は灼熱地獄と地霊殿を繋ぐ階段を走り下りていた。

アーティ「ようやく見えて来たわね」

レン「あ、あの様子だと、終わったみたいですよ」

アーティ「ん、あれハンニバルじゃない。レイジちゃんと」あのこ

と”知ってるかしら・・・って!”

気付いた時には、ハンニバルは再び動き出していた。ハンニバルはコアを失っても再び生成できるので、不死身なのだ。レイジは初めてそれを見た時驚いたが、コウタを守ろうと必死だったため、よく覚えていない。その上、さとり達と会話しながら階段に向かっていく。よって、完全に後ろがから空き状態なのだ。

アーティ「レイジ！後ろ！！」

レイジ「？」

レイジは後ろではなく、先にアーティのいる方向を向いてしまった。レイジから緊張感が感じられず、アーティとレンは焦る。ハンニバルはすぐそこまで迫っている。すると、さとりがこれに気付く、

さとり「はッ！危ない！」

さとりはレイジに跳びかかりながら突き飛ばす。ハンニバルの腕がさとりの背中をかすめていく。レイジはようやく状況を把握し、まずさとりの様子を確認する。すると、直撃しなかったものの、背中からひどく出血しているのが見える。爪で引っ搔かれたようだ。

こいし「ああっ！お姉ちゃん！すっかりして！」

さとり「ぐう……ッ、私よりも……あの……怪物を……」

空「よくも！！くっそーこいつ、なんで墜ちないのよ！墜ちろおおー！」

空はメガフレアを発射し、ハンニバルを崖の下へ吹き飛ばす。マグマに突き落とされたハンニバルは、苦しそうにもがき、マグマの底へ消えて行った。いくらハンニバルでも、マグマの中では蘇らないようだ。

しかしレイジは後悔で頭がいっぱいだった。ハンニバルは倒しても蘇ることをすっかり忘れていた。今更思い出した自分を責める。

レン「レイジさん！早くリンクエイドを！」

階段を下り終えたレンが回復するよう叫ぶ。

そうだ。今ならまだ間に合う。助けられる。レイジはすぐにさとりの背中に手を置き、リンクエイドする。

すると、かなりの重傷に見えたさとりの引つ掻き傷が、跡形もなく消えていく。信じられない現象に、こいし達は驚く。

さとり「……あれ？」

燐「傷が……消えた？」

こいし「お姉ちゃん・・・大丈夫？」

さとり「ええ・・・痛みもないし・・・レイジさん、ありがとうございます」
「今日は助けられてばかりですね」

空「すごい」

レイジは純粹にさとりの無事を喜べなかった。自分はハンニバルの特徴を身を以て知っていたはずなのに、自分の不注意のせい・・・事態は事なきを得たが、レイジとしては、複雑な心境だった。

Mission 6 傷痕（後書き）

作「……………」

弟「……………」

作「……………」

弟「……………なあクソ兄貴」

作「あ？」

弟「気になったんだが、レイジとサヤカの容姿はなんだ」

作「ああ、それはキリがいいところで登場人物紹介のページ作るから待つとれ」

とりあえず、サヤカsideを一通りキリつけてから登場人物紹介作ります。

Mission 7 抱擁、喧騒、地底にて（前書き）

皆さん、おはこんばちは、wingです。ようやくレイジsideに区切りがつきそうです。それではぶっぞ。

Mission 7 抱擁、喧騒、地底にて

アラガミ地底襲撃事件は、ハンニバルの撃破により、事態は沈静化されていた。地下街では、もうすでに普段の活気を取り戻している。

勇儀「今日は大変なことがあったけど、とりあえず無事解決したし、今日はいつもより騒ぐぞー！」

妖怪達「おーーーーー!!!!!!」

ヤマメ「いやあ、動いた後の酒はうまいねえ」

キスメ「あれ、そういえばレイジ君は？」

ヤマメ「ん、まだ地霊殿のところにいるんじゃないかな」

キスメ「一緒にお酒飲みたいですよ」

パルスイ「・・・私人の多いとこ嫌いなんだけど」

勇儀「いいじゃんか、今日は皆そろって宴会なんだ、お前だけ仲間外れにはさせんぞ！」

パルスイ「そのお気楽な頭が妬ましいわ・・・」

勇儀「どうした？飲まないのか？」

パルスィ「だ、誰も飲まないなんて言っていないわよ！／／／」

勇儀「ならほら、飲んだ飲んだ！」

パルスィ「ちょ、注ぎ過ぎ！」

地下街でワイワイと賑わっている一方で、地霊殿の屋上。地霊殿の遙か上空では、空が見えるほどの大きな穴が開いており、満月になりかけの月の光が地霊殿を照らしている。レイジは屋根の上で体育座りをして夜空を見つめていた。

レンとアーティはレイジのそばで彼の様子を案じている。

アーティ「あんたはホントワケのわからない性格してるわね。あれくらいでそんなに落ち込むなんて」

レン「言い方をもう少し考えましょうよ・・・」

アーティ「だってあれから二時間経ってるのにまだいじけちゃって、男のくせに情けないわ」

レン「数えてたんですか・・・」

すると、さとりが屋根に上ってきた。するとアーティは何かを思いついたのか、レンの腕を引っ張り、レイジがいる場所とは反対の場

所に行き、隠れながら様子を見る。

レン「（・・・なんですかいきなり!?!）」

アーティ「（ちょっといいこと思いついちゃったわ。あたし達じゃレイジを何とかできそうにないから、さとりと二人きりにさせてみようw）」

レン「（・・・まあ、さとりさんは心を読めますし、レイジさんの気持ちをよく理解してくれるかもしれないね・・・って隠れる意味あるんですか!?!）」

アーティ「（ツるさい、黙んなさいよあんだ、聞こえたらどうすんのよ）」

レン「（ンンンーーッ!?!）」

さとり「あら、レイジさん。よくここへの行き方がわかりましたね。」

レイジは顔を伏せ、さとりの方を向こうとしない。さとりはレイジの隣に座る。

さとり「私はこの場所が好きなんです。こうしてきれいな月が見えるから・・・」

レイジ「・・・」

さとり「あなたも、ここを気に入ってくれたみたいですね。嬉しいです」

レイジ「・・・」

さとり「勝手に人の心を読まないでくれ」・・・ですか？ああ、つい癖で。ごめんなさい」

レイジ「・・・」

さとり「（「今の俺は、お前に顔向けできない」・・・か。あの時のことを気にしているのね）」

さとり「レイジさん。私はあのことを気にしてなどいません。むしろ、私の方があなたにひどいことをしました」

レイジは顔を伏せたまま、首を横に振る。

さとり「あなたは・・・優しいんですね。実をいうと、あなたのような人間には・・・今まで会ったことがありませんでした。だから・・・「人」のために何かをしてあげようと思ったのは・・・こんな気持ちになれたのは、あなたが初めてです。なぜだかわかりますか・・・？」

レイジは再び、首を横に振る。

さとり「許してくれたからです。トラウマを思い出させることは、心の傷をさらに深くする・・・誰がやられてもこの上ない苦痛になるでしょう。そして、私はそれをあなたにやった。それでも、あなたは私を責めることなく、私を茶化していましたよね・・・。」

レイジはピクツと反応する。

さとり「あなたを部屋に運ぶ時、内心、ヒヤヒヤしていました。もし元気になったあなたが私を責めたら・・・自分で勝手にやったことだから自業自得なんですが、それでも・・・責めませんでしたよね」

レイジ「・・・」

さとり「正直言つて、怖かったんです・・・責められるのが・・・。私は自分の能力のせいで昔から多くの人間に忌み嫌われていました。だから・・・ッ」

さとりの声が少しだが震える。

さとり「許してくれて・・・嬉しかった・・・！」

レイジ「・・・」

さとり「初めてなんです。私のこの能力、「心を読む程度の能力」

による力を目の当たりにして、自分の容体を気にせず笑って許してくれた……。何度もアラガミから私達を救ってくれた……。あなたには、本当に感謝しています。」

さとり「それと、私がケガをしたことは気にしないでください。あれは、私が勝手にやっただけですから……。」

レイジはゆつくりと顔を上げる。だがさとりの方には向いておらず、顔もよく見えない。

さとり「レイジさん。私はあなたを許します。あなたが私を許してくれたように……。貸したとか、借りだとか、そんなものではありません。こんな私でも、受け入れてくれる「人」に出会えたから……。私からも、何かをしてあげたい……。」

さとり「だから……。泣かないで……。」

さとりはレイジの頬に手を添え、ゆつくりと顔を自分の方向へ向ける。レイジは涙を流していた。

さとり「私はあなたを許します。そして、私はあなたを受け入れます……。」

レイジ「……ッ——」

さとりは、震えた声を漏らしつつ涙を流すレイジをそっと抱き寄せた。それはまるで母親のように優しく、温かった。

さとり「あなたは、不思議な方ですね……。灼熱地獄に行くのに階段を使わず落下してくるような豪快な方と思えば、私のことを心配してくれる繊細な面もある……。性格とは、複雑なものですね」

アーティ「（グスツ、いきなり現れて脅かそうと思ったけど、さとの温かさに心を打たれたわ……）」

レン「（イイハナシダナー（´；ω；´）……って、さっきと目的が違うじゃないですか……）」

さとり「……レンさん、アーティさん、そこにいるのでしょうか？」

アーティ「!?!?!にゃ、にゃーん」

アーティは猫の鳴き真似で誤魔化そうとするが、レンは素直に姿を見せた。

レン「あ……やっぱりバレてました？」

さとり「ええ、私がここに来た時からわかっていましたよ」

アーティ「マジか……。でも雰囲気的にね、出てくるべきじゃないと思ってたのよ」

さとり「ふふ、お気遣いありがとうございます（絶対嘘ね・・・）」

アーティ「ん、なんか街が賑やかになってるわね」

さとり「恐らく今回の騒ぎが収まったので、皆集まって宴会をしているでしょう。皆さんも行きますか？」

アーティ「そうするわ。腹減ってきたし」

レン「お言葉に甘えさせて頂きます」

一行は地下街に足を運び始める。その様子を、地底の天井に開く大きな穴の上から眺める影が一つ。

？「うーん、いい眺めだね。とはいえ、なんかあの二人を追ってたわけわかんないとこに迷い込んでしまっし、ひとまずちっこい奴らを地底に送って様子を見てみると、あの坊やがいるときたもんだ。しかもあたしの目を有効利用してるじゃないか・・・こいつは予想外だし、厄介だね・・・ん、どうした？・・・今から襲ったらいけないかって？馬鹿だねえ、今は展開的に止めといた方がいいのさ。・・・ん？今度は何・・・へえ。もう一人の方が竹林の方に・・・わかった。じゃあその竹林のところに行くとするか。おっと、お前とお前はあの坊やの監視を続ける。何かあったら連絡しな」

そう言うと、影はその場を後にした。

？「さて、もう一人の方ははどれほどやれるのかな・・・？」

一方で、レイジ達は夕飯をまだ食べていないという意味でも、勇儀達の無事を確認する意味でも、宴会に参加することにした。

ヤマメ「おお？珍しいね、さとりが宴会に来るなんて」

さとり「ええ、皆さんの無事を確認しがてら、夕飯を頂こうと」

キスメ「レイジ君も来てくれて嬉しいですう」

こいし「お姉ちゃん、遅いよ！早くしないとなくなっちゃうよ！」

空「あ、さとり様あ、お先に失礼してまあすww」

燐「あんた飲みすぎだよ・・・ベロンベロンじゃないか」

空「何だとお？私は酔ってなんかいなあい！」

燐「それを酔ってるって言うんだよ・・・」

勇儀「おお、レイジじゃないか！こっちへ来い！一緒に飲もう！」

宴会場では、大勢の人数が集まって食っては飲み、騒いでいた。レイジは勇儀に引つ張られ、酒を勧められる。レイジはまだ未成年だ。しかし飲めないとは言っては気分を害すると思い、あまり好きでは

ないと答えた。

勇儀「そいつは残念……。でもまあ、腹が減ってんだろ？たらふく食っていけばいいさ！宴会は楽しむことが一番大事だよ！」

辺り一面に様々な料理が並べられている。レイジはありがたく頂くことにした。

こいし「はいお姉ちゃん！あーん」

さとり「熱ッ！！熱すぎよそれ！」

レン「・・・幻想郷って、こんなに平和なんですね・・・今日はアラガミが襲ってきたのでいまいち実感湧きませんが」

アーティ「私達の世界じゃ、考えられないわね・・・毎日がこんなに平和だったらしいのに・・・。なんか羨ましいわ」

パルスィ「・・・？」

勇儀「ん、どうしたパルスィ」

パルスィ「・・・いえ、何も」

勇儀「宴会中は笑顔以外の表情は必要ない！さあ、もっと飲むぞ！」

パルスィ「あっだから注ぎ過ぎよ！」

こうして、宴会では皆幸せに過ごしていた。そして宴会終了後――

レン「で、なんでこうなるんですか・・・」

アーティ「知らないわ」

状況を説明すると、宴会後、レイジは勇儀に再び決闘を申し込まれ、宴会場の外で行うことになった。勇儀は少し準備をするため、宴会場の中にいる。その間、レイジはレン、アーティと共に再びあの「準備運動」をすることにした。決闘を見に来た妖怪達は決闘する場所から少し離れた場所にいるレイジを見て驚愕している。

こいし「なんか、すごいね・・・」

さとり「そ、そうね・・・（レンさん、アーティさん、お疲れ様・・・）」

パルスィ「妬ましいわ、あの動き・・・」

ヤマメ「伊達にあの怪物どもと戦ってるワケじゃないみたいだしね。こいつは期待出来そうだ」

キスメ「楽しみですう」

そして、勇儀は準備が終わり、颯爽と宿から姿を現す。以前と同様、酒の入った杯を持っている。観客達は歓声、拍手を送る。レイジは勇儀の真正面の位置になるように立つ。レイジにも、歓声と拍手が挙がった。

妖怪「いい勝負しろー！」

こいし「がんばれー！」

ヤマメ「簡単に捻り潰されるんじゃないよー！」

レイジは無反応はいけないと思い、笑顔で手を軽く振る。そのはにかんだ表情に、何人かは心打たれてしまった。

ヤマメ「（なッ、何だ・・・今の・・・！？）」

キスメ「飲みすぎでヤマメちゃんの顔、赤いですう」

さとり「・・・！！！」

こいし「ん、お姉ちゃん顔が赤いよ？」

さとり「えッ？あ、いや、きつとお酒を飲んだからよ」

こいし「ふーん（お姉ちゃんたら、素直じゃないなあ）」

パルスィ「あんな顔ができるなんて・・・少しドキツとしたじゃない

い・・・妬ましい妬ましい・・・。勇儀！」

勇儀「お？」

パルスィ「あ、あんたが勝ったら、その・・・私、美味しいお酒持つてるから、それあげるわ」

勇儀「おお！それはいいね！この勝負、負けられないな！」

パルスィ「わ、私が応援するくらいなのよ、絶対勝ちなさいよね！」

アーティ「レイジ、下手な戦いはすんじゃないわよ」

レン「レイジさん、・・・えーと、頑張ってくださいね」

勇儀「さあ余興はここまでだ！レイジ、遠慮はいらない、全力でかかって来な！」

勇儀は身構え、レイジを睨み付ける。一方レイジは神機はしまったまま自然体のままで勇儀を見つめている。全員に緊張が走り、周りが静かになる。

勇儀「どうした、そっちから来てもいいんだぞ？」

レイジ「・・・」

レイジからは、一切乱れを感じさせない落ち着きが見て取れた。勇

儀は自分の目は間違っていなかったと、心の中で喜ぶ。

勇儀「じゃあ、先手はいただくよッ!!」

勇儀は地面を力強く踏み出し、レイジに向かって走る。とても杯に酒を入れているとは思えないバランス感覚とスピード。しかしレイジは未だ自然体のままだ。勇儀は杯を持っていない方の腕でストリートを放つ。レイジは食らう直前で頭だけ動かし、攻撃をかわした。

勇儀「・・・ほう」

両者ともに落ち着いた表情。今度は続けざまに腕を振るいだす。レイジは最小限の動きで攻撃をかわしていく。

勇儀「私の目は間違っていなかったようだ!ここまで面白いヤツは久しぶりだな!さて、次はこいつでいくとしようか!」

勇儀は一旦距離を取り、スペルカードを取り出し、高らかに宣言する。

勇儀「力業「大江山嵐」!」

すると、大型の弾が無数に現れ、突風のようになだれ込む。かなり広範囲にわたって弾幕が張られるため、レイジだけでなく観客もグレイズする。

ヤマメ「ちょ！危なッ！？」

空「ほえ〜」

燐「あんたまだ酔いが醒めてないのかい・・・」

空「そんなこともふぎゃッ！！」

燐「ああっ！？お空がピチュツた！」

勇儀「おっと、悪いねえ。さあレイジ、ここまで来て、私の酒をこぼさせてみな！私はここにいるぞ！」

勇儀は自分の位置を示し、レイジに反撃のチャンスをちらつかせる。レイジはちょん避けて避けつつ、勇儀のもとに移動する。それからまもなく勇儀の近くに辿り着く。

勇儀「お前のその避けっぷり、シビレるねえ！さあ、このまま肉弾戦を始めようじゃないか！・・・おっと」

なんと、嵐のように乱れ飛ぶ弾丸の真っ只中で格闘戦を仕掛けてきた。一見して勇儀が有利に見えるが、レイジが近くにいるため、勇

儀にも弾が飛んでくるのだ。

勇儀「ほらほら、どうした？弾が怖くちゃ私に勝つことはできないよ！」

弾幕を避け、尚且つ勇儀の格闘攻撃も捌きつつ反撃のチャンスを狙わなければならない。思考よりも、ほぼ直感だけで動く状態になっていた。すると、

勇儀「うおッ！？」

勇儀に弾が当たり、一瞬バランスを崩す。レイジはすかさず杯にめかけダッシュする。しかし、

勇儀「まだまださ！」

レイジ「ッ！！」

勇儀は即座に体勢を戻し、レイジの背中を蹴り飛ばす。倒れこみ、すぐに起き上がるが距離が離れてしまっている。レイジは再び勇儀を中心に乱れ飛ぶ弾幕の嵐をかくぐりながら勇儀のもとへ向かおうとする。すると、勇儀の方からレイジの方へ走ってきた。

勇儀「無駄にスタミナを奪う真似はしないさ！さあ、どんどん来い！」

弾幕の中で激しい攻防が繰り広げられる。観客達も激しく声援を送り続けている。そのまま15分が経過した。

勇儀「ふう・・・まさかここまでやるとはね。お前はすごいんだな」

息が切れてきているが、二人ともまだ落ち着いた表情が見られる。

勇儀「さあ、そろそろ決着を付けようじゃないか！四天王奥義「三步必殺」！」

先程までの弾幕を消し、次のスペルカードを使う。レイジは名前を聞いて、直感で三発目の攻撃で決めるつもりだと思った。勇儀の杯を持っていない方の腕に光が集まり、レイジに突進する。

勇儀「1！」

一発目、レイジめがけフックを放つ。念のため距離を空けようと大きめに避けた。するとを振るった腕から弾幕が。

勇儀「2の！」

二発目、今度は裏拳で薙ぎ払うように攻撃。同じく振るった腕から弾幕が張られ、レイジの逃げ場をなくしていく。

勇儀「さあん！」

最後の一撃はレイジの懷に一瞬で潜り込み、アッパーを決めようと腕を振るい始めていた。左右は弾幕で逃げ場がない。レイジは意を決し、勇儀の頭上を飛び越えるようにジャンプした。勇儀の拳がレイジに迫る。

勇儀「終わりだ！」

しかしレイジは避けるためにジャンプしたのではなかった。勇儀の頭上で彼女の腕を掴み、アッパーの勢いを利用して腕を掴んだまま回転し地面に叩き付けた。

勇儀「うおっ！・・・あっ」

勇儀は倒れたまま、杯を確認する。すると、酒が杯から思い切りこぼれてしまっていた。

勇儀「ふっ・・・あっはははは！参った！私の負けだ！」

勇儀は倒れたまま高笑いをした。

観客達は一瞬ざわつくが、それから間もなく大きな拍手が送られた。

妖怪「二人ともよくやった！」

妖怪「いい戦だったぞー！」

こいし「わーレイジすごい！」

ヤマメ「お疲れさーん！」

勇儀、レイジはお互いの健闘を称え、握手を交わした。

勇儀「いやあ、あそこで反撃されるとはね、私もまだまだってことだな。お前との決闘、楽しかったよ」

レイジも笑顔で答える。束の間の平和を存分に楽しんだレイジであった。

次の日の朝、地霊殿玄関――

さとり「……もう、行ってしまうね」

レイジ「……（コク）」

レイジ、レン、アーティは支度を済ませ、玄関で持ち物を確認していると、さとりが現れ声をかけた。

レン「さとりさん、昨日はお世話になりました」

さとり「いえ、気にすることはありません。ところで、あなた達はこれからどちらに向かわれるのですか？」

アーティ「ああ、レイジがね、連れを探しているのよ。でも地底にはいないようだし、これから地上で探そうと思っ」

さとり「そうですね。あ、地上への出口はここから少し距離があります。私が案内しますね」

レン「助かります」

玄関を出ようとすると、こいしが外に立っていた。

さとり「こいし……また夜更かしして地上をほっつき歩いてたでしょ」

こいし「うん、月が綺麗だったから」

さとり「まったくもう・・・これで三日目よ、睡眠をとらないと、体を壊すわよ」

こいし「まあまあ、それよりさ、人里を無意識に歩いてたらね、「外来人が博霊神社の境内に幻想入りしたらしい」って噂してたよ」

聞き覚えがない場所だが、それを聞いてレイジ達は安心した。

さとり「よかったですねレイジさん。その上場所まで明らかなのは幸いなことです。ついてきてください、地上への道はこちらです」

レイジ達はほっと胸を撫で下ろし、地上に向かった。

M i s s i o n 7 抱擁、喧騒、地底にて（後書き）

作「ようやくサヤカsideに切り替えられそうだ」

弟「つーか今回までレイジ達サヤカのこと忘れてたことね？」

作「・・・」

弟「・・・」

作「・・・まあ、アラガミの騒ぎがあつたからな」

弟「・・・」

次回は皆さんお待ちかね、サヤカsideいきます！

Mission 8 ターン・オブ・サヤカ（前書き）

皆さん、おはこんばちは。winnigです。今回はサヤカsideでのお話です。それではどうぞ。

Mission 8 ターン・オブ・サヤカ

その頃、レイジと共に崖に落下してしまったもう一人の神機使い、サヤカは、暗闇の中を彷徨っていた。

サヤカ「・・・ここ・・・どこなんだろ・・・なんか、ボーっとする・・・」

サヤカの意識ははつきりせず、目の前には暗闇しかない。

サヤカ「私・・・死んだのかな・・・」

すると、誰かの話し声が聞こえたような気がした。

「――」

サヤカ「・・・誰かいるの・・・？」

サヤカは声を聞こうと声のする方向に向かう。すると、突然眩い光が暗闇の中の一点から溢れ出した。

サヤカ「・・・ッ！」

するとサヤカの目には、どこかの部屋の天井が映っていた。どうやら自分は寝ていたらしい。ゆっくりと起き上がり、周囲を確認する。見たところ、病室のようだ。そして自分はベッドに横になっていたこと、上着だけが服を変えられていることを把握し、ベッドから降りる。するとサヤカの様子を見に来たのだろうか、一人の女性が部屋に入ってきた。

？「あら、目が覚めた？」

サヤカ「え、あっはい！」

？「びつくりしたわ、博霊神社の境内に倒れていたあなたをその巫女とそのお友達が運んでくれたのよ」

サヤカ「博霊神社？巫女？・・・と、とにかくその人達が助けてくれたんですね、ではその人にお礼を言わなければ・・・くっ！？」

サヤカの頭に激痛が走り、その場にしゃがみ込む。

？「ああ、ダメよ無理に動いたら！あなたのケガを診てただけど、左腕に打撲、そして頭蓋骨が骨折してたのよ」

サヤカ「ええ！？そんなところ骨折してたのになんで私生きてるんですか！？・・・う！いたた・・・」

？「大声を上げないの！頭蓋骨を元に戻すのは大変だったわ・・・」

サヤカ「・・・すごいですね・・・。あなたはいつたい・・・？」

？「おっと、そういえば自己紹介してなかったわね。私は八意永琳。この幻想郷で医者をやってるわ」

サヤカ「私は行方サヤカです。・・・え、幻想郷？私、確か・・・神社の境内？うーん」

永琳「説明が少し難しいわね・・・。この幻想郷は、忘れ去られた存在がここに流れ着くの。でも最近は、幻想郷の外の世界の人がこのに迷い込んでしまう事件が増えているのよ。私達はそういう人達のことを、外来人と呼んでるわ」

サヤカ「わ、私幻想郷って場所、知らないです・・・。じゃあ私も、その外来人ってことになるんですか？」

永琳「そうね」

サヤカ「・・・は！レイジさんは!？」

永琳「ん、お友達？」

サヤカ「はい、私がここに運ばれたとき、もう一人運ばれたりしませんでした!？」

永琳「いいえ、見てないけど・・・」

サヤカ「そうですか・・・。はあ、これからどうしよう・・・」

？「師匠！郵便物を持って来ましたよ！・・・あ、目が覚めた？君、大丈夫？」

郵便物を持って一人の少女が部屋に入ってきた。彼女の頭には兎の耳が。サヤカは目を丸くしている。

サヤカ「・・・あ、ええ、なんとか。永琳さんのおかげで頭は大分治ってるみたいです」

永琳「ふう、診察の依頼の手紙がこんなに・・・今月も忙しくなりそうね・・・あら？」

永琳は郵便物を見ながら溜息をつく、新聞が目止まる。新聞自体はよく読むのだが、一面となっている記事の写真に、見慣れないものが写っている。

永琳「サヤカちゃん、これに見覚えはない？」

永琳はサヤカにその新聞記事を見せる。

サヤカ「・・・レイジさんだ、レイジさんが写ってる！地底ってここにいたんですね・・・」

永琳「この人がレイジっていうの？あなたと同年かしら？」

サヤカ「ええ。私の憧れでもあるんです。私達の世界では、彼は有名な人ですから」

永琳「へー、一度会ってみたいものだわ。・・・おっと、そろそろ昼食の時間ね。今から作って持ってきてあげるわね。優曇華、しばらくお願い」

優曇華「わかりました。さて、まだ名乗ってなかったね。私の名前は鈴仙・優曇華院・イナバ。長ったらしいから優曇華でいいわ。あなたの名前は？」

サヤカ「あ、はい！私は外来人の行方サヤカと申します！以後、お見知り置きを！」

なぜか敬礼のポーズでぎこちない感じで自己紹介するサヤカ。優曇華は必死に笑いをこらえている。

優曇華「自己紹介で外人って言う人初めて見たww」

サヤカ「そ、そんなに変でしたか？」

優曇華「いやいやサヤカちゃん、気にしないでいいよwそのままでもいいよww」

サヤカ「・・・はあ・・・」

しばらくの雑談が続いた後、永琳が食事を作り終えてサヤカと優曇華がいる病室に永琳が戻ってきた。

永琳「サヤカちゃん、ごめんね。ちょっと食材が足りなくて味噌粥を作ることになったわ」

サヤカ「あ、いえいえお気になさらずに！ありがたくいただきます！」

永琳「私達は違う部屋で食べるから、何かあったら知らせて頂戴」

サヤカ「わかりました」

永琳と優曇華は病室を後にし、サヤカは早速味噌粥を食べ始める。ちょうど腹の虫がなり始めた頃だったので、ものの5分で平らげた。使い終わった食器をベッドのすぐ傍の机に置き、声を張り上げて、

サヤカ「永琳さん！御馳走様でした！お粥とても美味しかったです！台所に食器を運びましょうか？」

永琳「もう食べ終わったの？早いわね。食器はそのままにしておいて頂戴、後で私が持つて行くから。あなたは今は休んだ方がいいわ。傷が塞がったばかりだからね」

サヤカ「わかりましたー！……ッ！いたた……また声を張り過ぎ

たかな・・・」

サヤカはベッドに横になり、しばしの休息を取る。30分後、段々退屈になってきて窓から外の景色を見ることにした。すると、なんとザイゴートが竹林の中を漂っていた。

サヤカ「あれは、ザイゴート・・・！ここは幻想郷なのに、なんで・・・！？」

彼女はポケットに入っていた「回復錠」を飲み頭の傷の回復を早め、神機を取りに行こうと部屋を後にする。幸い神機を探すのにさほど時間はかからず、玄関に置いてあった。どたどたと走り回るサヤカが目にしたのか、永琳が声をかける。

永琳「サヤカちゃん、どうしたの？まだベッドにいなきゃいけないじゃない」

サヤカ「永琳さん！新聞のあの記事、読みましたよね？その記事に載っている「怪物」が、ここの近くにいます！」

永琳「なんですって・・・！？」

サヤカ「ええ、さつき窓から外の景色を見ていたらそいつがいたんです！ちよつと倒しに行つてきます！」

永琳「あつ！ちよつと！その体じゃ無茶よ！・・・行っちゃったわ

ね。優曇華！」

永琳達が食事をとっていた部屋から優曇華が顔を出す。

優曇華「何ですか？」

永琳「あの新聞、あなた読んだ？」

優曇華「ええ、あの変な怪物が地底に現れたってヤツですよね」

永琳「そいつらが今、永遠亭の近くにいらっしゃるいわ」

優曇華「ええ〜っ！？た、大変じゃないですか！」

永琳「さっきサヤカちゃんが怪物を退治しに行っちゃったのよ、あの体じゃ心配だわ、優曇華、あなたがサヤカちゃんを守ってあげて私は姫様の無事を確認するわ」

優曇華「わ、わかりました！」

その頃、サヤカは永遠亭周辺のアラガミを倒して回っていた。

サヤカ「ふう・・・周辺は一通り終わったかな」

優曇華「サヤカちゃん！・・・わ、すごいわね。その体でこんな数を倒せるなんて」

サヤカ「ええ、携帯してる回復薬を飲んだおかげで何とかやれました。あ、そうだ優曇華さん、一つ言っておかないといけないことがあるんです。この怪物達は私と、あの新聞に載ってたレイジさんしか倒すことはできません」

優曇華「・・・なんで？」

サヤカはアラガミについて懇切丁寧に説明した。

優曇華「それは厄介ね。要するにあなたの持つその武器か、同じアラガミによる攻撃、よほど強力な攻撃じゃない限り倒すことは出来ないのね」

サヤカ「はい」

優曇華「私達は薬の開発も行ってるから、そのオラクル細胞・・・だっけ？それがあれば、私達でも対抗できる手段を作れるかもしれない」

サヤカ「オラクル細胞が必要なら、私の血を使いますか？」

意外な答えに、優曇華は驚愕する。

優曇華「ええ！？あなたの体にもあるの！？オラクル細胞が！？」

サヤカ「ええ、人体用に調整されたヤツですけど、基本的には同じだと思います」

優曇華「・・・じゃあ、あなたの血、ちょっと貰ってもいい？」

サヤカ「いいですよ、お構いなく」

二人は永遠亭に戻り、サヤカは献血、優曇華はそれを調べることにした。

優曇華「へえ・・・これはすごいわね。細胞一つ一つが考えて、何でも喰らうことができるなんて」

サヤカ「対抗手段を作るなら、オラクル細胞の強力な細胞結合を破壊、もしくは弱めるものを作るのが手っ取り早いと思いますけど・・・出来ますか？」

優曇華「武器に応用するなら私にもできるかも。私はこれでも元軍人だからね」

サヤカ「ええ！？そうなんですか！？」

優曇華「そうよ。私と師匠、姫様は月からここ幻想郷に来ただけど（略）」

サヤカ「つ、月・・・幻想郷って、何でもアリなんですネ」

優曇華「そ。ここでは、あなた達の世界の常識はほぼ通用しないの」

すると、永琳が実験室に入ってきた。

永琳「あら、優曇華、自分で薬の開発？珍しいわね」

優曇華「あ、師匠。今ですね、あの怪物達の体細胞、オラクル細胞
つていうのを（略）」

永琳「へえ、サヤカちゃんの血を使って・・・ありがとねサヤカちゃん」

サヤカ「いえ、そんなに大したことではありませんよ」

優曇華「で、私達でもアラガミに対抗できるものを開発中なんです
が、どういう形に作ればいいのか迷ってます・・・」

永琳「うーん、そうね・・・。あ、優曇華、あなたがこないだ拾っ
てきた鉄砲の弾に使ってみたら？」

優曇華「ああ！それがありましたね！ちょっと持ってきます！」

サヤカ「鉄砲・・・？」

永琳「一週間くらい前だったかしら。私が永遠亭の周りの掃除をし
ていたら、外の世界から来たと思われる鉄砲が落ちてたのよ。兵器
についてはあの子の方が詳しいから渡してみたんだけど、えらく気
に入っちゃったみたいだね・・・あの子、暇な時はいつもあれ使っ
て射的とかしてるわね」

サヤカ「へえ」

しばらくして、優曇華が銃を持って戻ってきた。スナイパーライフルのようだ。しかしなぜか息を切らしている。

優曇華「た、大変大変！アラガミがわんさかこっちに向かって来ます！」

永琳「何ですって！？仕方ないわ、サヤカちゃん！無理を言うようだけど、アラガミ達をしばらくの間食い止めてくれないかしら！？優曇華！私も薬の開発を手伝うわ！」

サヤカ「問題ありません。防衛任務ですね！了解しました！」

サヤカはすぐに外に飛び出し、アラガミ達を食い止める作戦を開始した。

サヤカ「うわあ、さっきよりも遥かに多いなあ……。でも、小型ばかりだからいける！」

サヤカは銃形態でアラガミを次々と撃ち落とす。レイジは剣で戦うことが多く、得意である一方、サヤカは射撃を得意としている。射撃ならば攻撃範囲が広いため、永遠亭を守る意味でも、動き回り過ぎて傷口を開かせない意味でも有効な戦法だ。サヤカの射撃は正確

に、確実に仕留めている。そんな堅実な戦い方が功をなし、10分後には、ほとんどのアラガミを一掃することが出来た。

サヤカ「ふう・・・大分数が減ってきたし、対して強そうなのもいなさそうだし・・・ってあれ？」

竹林の奥の方から何かがこちらに向かってるのが見える。よく見ると、それはハガンコンゴウだ。しかも普通よりも大きい。

サヤカ「で、でかい・・・！」

ハガンコンゴウはサヤカを見つけると雄叫びを上げる。

サヤカ「（あの動きは、稲妻か！）」

敵の動きを見て即座に攻撃を予測。案の定、稲妻攻撃の予兆として足元が光り出す。横にかわし、残りの小型アラガミを撃ち落とす。すると巨大な稲妻がサヤカの近くに落ちた。

サヤカ「（やばっ・・・威力が・・・違いすぎる・・・！）」

予想以上に強力な稲妻だったため、背筋が凍りつく。それに気を取

られていたため、ハガンコンゴウに攻撃のチャンスを与えてしまう。ハガンコンゴウは丸まって転がり突進してきた。電気を纏っているため、見た目よりも攻撃範囲が広い。サヤカは反応が遅れてしまい、直撃しなかったものの、電撃を食らってしまう。

サヤカ「うわわああわっわわわああああ！！！」

全身に電撃が走り、痺れてその場に倒れ込む。体に力が入らず動けない。ハガンコンゴウはサヤカを驚掴みにし、そのまま握り始めた。

サヤカ「くっ……！しまった……！」

もがいて振りほどこうとするが、体が麻痺して動けず、さらに相手が通常の個体より大きいため、力もより強い。サヤカは一気に絶体絶命に陥った。

サヤカ「（ま、まずい……息が出来ない……！痺れて動けないし、どう……すれば……）」

息が出来ず、どんどん体が締まっていく。意識も遠くなり、死が目前になったその時、

バンッ！！

突然銃声が響き、ハガンコンゴウの頭部に命中する。掴んでいたサヤカを放し、頭を押さえている。

サヤカ「ゲホゲホッゲホッゲホッ・・・優曇華さん、助かりました」

優曇華が永遠亭の屋根の上からスナイパーライフルを構えている。

優曇華「いいってことよ！とにかく時間がないから即席で作ったんだけど、弾丸にオラクル細胞を練り込んでみたわ！」

サヤカ「十分です！さあ、反撃開始といきましょう！」

優曇華「あのアラガミの怯み具合から見て、頭が弱点ね？」

サヤカ「よくわかりましたね、その通りです！私が陽動します！優曇華さんは狙撃に集中してください！」

優曇華「了解！」

永琳「私も手伝うわ」

優曇華「えっ師匠！？」

遅れて永琳が現れた。弓を持ち、矢立を担いでいる。

永琳「大丈夫よ。私も矢にオラクル細胞を塗ったから、少なくとも足手まといにはならないわ」

サヤカ「応援ありがとうございます。永琳さん、私が前に出て陽動しますので、あいつの頭を狙ってください」

永琳「頭ね。わかったわ、無理は禁物よ」

サヤカ「ええ！」

永琳、優曇華はにハガンコンゴウの頭部に狙いを澄ませ、射撃する。サヤカは剣形態に変え永琳達に矛先が向かないよう接近戦を仕掛ける。ハガンコンゴウはサヤカを払いのけようと腕を振る。サヤカは剣を振っている途中だったが、刀身がショートブレードなので、アドバンスドステップで避けつつ足を斬り、ハガンコンゴウを転ばせる。

サヤカ「今です！止めを刺しましょう！」

サヤカは永琳達の邪魔にならないよう射線を空ける。すかさず優曇華は弾を撃ち、永琳は矢を飛ばす。サヤカは銃形態に変形させハガンコンゴウの弱点属性である神属性のレーザーを撃ち込む。三人の攻撃はハガンコンゴウの頭を直撃し、頭を吹き飛ばす。

優曇華「やった……のかな？」

サヤカ「ええ、動く気配はありません。討伐完了です」

永琳「丁度いいわ。サンプルを貰っていきましょう。私もオラクル細胞に興味がわいてきたわ」

サヤカ「なら、このアラガミのコアも使いませんか？何かの役に立つかもしれませんし」

永琳「そんなものであるの？今日は退屈せずに済みそうね」

サヤカはハガンコンゴウからコアを摘出、サンプルのオラクル細胞を摂取し、安堵の深呼吸をしながら永遠亭に戻った。

Mission 8 ターン・オブ・サヤカ（後書き）

作「最近ゴッドイーターバーストやってねえな・・・」

弟「ん、何狩ってんの」

作「ピルグリムでコンゴウ×4」

弟「あそこマジキツイんだよなあ、まあリスポーンするほどじゃないが」

作「ふつ俺もリスポーンは一回もしてないぜ・・・」

弟「オチた回数言ってみろ」

作「23回」

弟「よくリスポーンしなかったよな、そんなにオチて・・・」

自分は戦える味方の人数が少なくなるまでは回復錠使わない主義です（キリッ）

M i s s i o n 9 主人公は遅れて出るもの（前書き）

皆さん、おはこんばちは。wingです。今回まで早いスピードで更新してきましたが、次回から更新が遅れます。予めご了承ください。

Mission 9 主人公は遅れて出るもの

永琳「・・・すごいわね。とても人間とは思えない回復力だわ」

サヤカ「私達神機使いはアラガミと戦うため自ら体内にオラクル細胞を取り込んでますから、携帯してる回復薬を使ったってのもあるんですが、回復力も高くなるんです」

戦いの後、サヤカのケガの回復速度に驚く永琳。普通の人間ならば、まだ動くこともままならない状態なのだ。

永琳「・・・うん。もう頭も腕も完治してるみたいね」

サヤカ「よかった、ありがとうございます。・・・これからどうしようかなあ」

サヤカがこれからの行動について考えていると、玄関から誰かが走り込んできた。

？「おい！なんか竹林で妙な怪物の群れを見たんだがこっちに来なかったか！？」

永琳「あら、妹紅じゃない。そいつらなら、主にこの子がやつつけてくれたわ」

妹紅「え？こいつが？なんだ、それならよかった・・・」

サヤカ「あ、あの・・・あなたは・・・？」

妹紅「おおっと、すまない。私は藤原妹紅。ここの竹林の案内人をやってる」

サヤカ「案内人？この竹林はそんなに広いんですか？」

妹紅「ああ、この竹林は迷いの竹林といってな、目印にできるものがほとんどない。だからとても迷いやすい場所なんだ。無計画に入ったら、まず抜け出せないな」

永琳「そう。だから妹紅が迷った人たちを出口に連れてつてあげる案内人をやってるのよ」

サヤカ「私、何気なく恐ろしい所にいるんですね・・・。あ、そうだ永琳さん、私、博霊神社って所に行きたいです。まだお礼を言っていないから」

永琳「いいわ、レイジ君も探さないといけないんでしょう？気をつけて行ってらっしゃい」

サヤカ「ありがとうございます！レイジさんを見つけたら、また来ますね！」

妹紅「博霊神社に行くのか？なら任せておけ、私についてこい」

サヤカは永琳、優曇華にお礼を言い、服を着替え妹紅と共に永遠亭

を後にする。

竹林の中は静かで、風が竹の葉を揺らす音しか聞こえない。

サヤカ「わあ・・・ホントに竹しかありませんね」

妹紅「まあ竹林だからな。私から離れるなよ。迷っちゃまうからな・・・あ、そういえばまだ名前を聞いてなかったな」

サヤカ「はい、私は行方サヤカと申します。一応私は外人・・・ってことになってるみたいです」

妹紅「やっぱりな。その服といい、その武器といい、何となく想像はついてたよ」

サヤカ「目立ちますよね、この格好は・・・」

妹紅「気にすることはない。この幻想郷じゃ、その程度じゃ誰も驚かないよ」

サヤカ「ほっ、助かりました」

雑談をしていると、竹が生えていない場所に出た。どうやら出口のようだ。

妹紅「着いたぞ。ここが竹林の出口だ。お前は博霊神社に行くんだったよな。なら（少女説明中・・・）いけるか？」

サヤカ「大丈夫です。ご親切にありがとうございました」

妹紅「気にするな。もしまたここに来ることがあったら、竹林に入
った後、私の名前を大声で呼んでくれ。すぐに駆けつける」

サヤカ「わかりました。ありがとうございました、妹紅さん！」

サヤカは手を振りながら、竹林を後にし博霊神社に向かった。
少女移動中……

一方、博霊神社――

？「ふーん……地底に怪物ねえ……文のヤツ、こういう時だけ
まともな記事書くのよねえ」

？「普通の攻撃が効かない怪物なんて、見たことも聞いたこともな
いぜ……これは異変だな」

？「そうね。また地底に行く必要があるわね」

？「じゃ、早速行こうぜ霊夢！」

霊夢「昼食食べてからね。新聞によれば、こいつが解決してくれた
みたいだし」

霊夢と呼ばれた少女は記事の写真に写るレイジを指さす。

？「誰だこいつ？見ない顔だな、外来人か？」

霊夢「多分ね。今回の異変は、こいつと共にやってきた可能性が高いわ。魔理沙、私はひとまず昼食を作るけど、あんたも食べるでしょ？」

魔理沙「おう！」

霊夢は昼食を作り、台所に向かう。魔理沙は新聞を読みながら考え事をする。

魔理沙「（そっぴや今朝神社に遊びに行ったら、血だらけで倒れるヤツがいたよな．．．あいつもこいつと一緒に来たヤツなのか．．．？見慣れない格好だったし）」

一方サヤカは博霊神社に到着、霊夢と魔理沙を探していた。

サヤカ「神社って、ここだね．．．誰もいない．．．なんでだろ」

サヤカは神社の境内に誰もいないことを不思議に思う。とりあえず賽銭を入れようと賽銭箱を探す。

サヤカ「あつた……。えーと財布はここかな……。つと、フェンリルクレジットfcだ
けど……。いいよね」

チャリーン

霊夢は台所にいるにも関わらず、その音を聞き逃さなかった。霊夢は目を光らせ、弾丸のような速度で外に飛び出た。

魔理沙「うおッ!？」

魔理沙は驚き、霊夢の後を追う。

霊夢「今！お賽銭入れたわね!？あんだ!」

サヤカ「え、あ、はい……。いけませんでしたか?」

霊夢「あありがとおおおおおお!!!」

霊夢は突然抱き着いてきた。

魔理沙「どうしたんだよ霊夢、お前が満面の笑みなんて珍しいな……。ん、お前は……」

霊夢「ねえあんだ、いくら入れたの!？いくら?いくら?」

サヤカ「あの・・・ここでのお金の単位は何ですか？」

霊夢「円よ？」

サヤカ「あ、ごめんなさい・・・私が入れたの、フェンリルクレジットfcフってお金です・・・」

霊夢はそれを聞いた瞬間凍りつく。しばし間が開いた後、

霊夢「・・・はっ、あんた誰？」

さっきの行動は完全に無意識だったようだ。

魔理沙「ほら、朝私が遊びに行った時神社の前で倒れてたヤツだぜ」

サヤカ「あ、あの！その時はありがとうございました！ちょうどお礼を言おうとここまで来たんです」

霊夢「お賽銭くれなきゃお礼とは認めないわ」

魔理沙「まあそう言うなって。私は霧雨魔理沙。でこいつは博霊霊夢ってゆうんだ、よろしく頼むぜ」

サヤカ「私は行方サヤカと申します。永琳さんから話は聞いています。助けてくれてありがとうございます」

魔理沙「気にすんなよ。それよりも丁度良かったぜ。私達はこれから昼飯なんだ、お前も食うか？」

サヤカ「ええと、実はもう永琳さんのところで食べて来ちゃいました・・・」

魔理沙「そうか。まあとにかく上がっていけよ、小腹が空いたら余りを食べばいいしさ」

サヤカ「すみません、お言葉に甘えさせていただきます」

サヤカ、魔理沙、霊夢は神社の中に入る。霊夢は台所に戻り、魔理沙はサヤカを居間に連れて行く。

魔理沙「なあお前、この記事に見覚えはないか？」

魔理沙は新聞を見せようとする。サヤカは見せられる前に答える。

サヤカ「ええ、永琳さんのところで読みました。地底にアラガミが現れたってヤツですよね」

魔理沙「・・・アラガミ？お前、何か知ってるのか？」

サヤカ「（少女説明中・・・）」

魔理沙「ふん、大体事情はわかったぜ。普通の攻撃が効かないってのは本当だったんだな・・・」

すると霊夢が鍋を持って居間に入ってきた。

霊夢「お待たせ。とりあえず味噌煮込みにしたわ」

魔理沙「おお、お前にしては豪華な料理じゃないか」

霊夢「うるさいわね、さっさと食って地底調べるわよ・・・あんたは食べないの？」

サヤカ「ええ、昼食はもうとりましたから」

少女食事中・・・

霊夢「御馳走様。さて、サヤカ・・・って言ってたわね。洗いざらい吐いてもらっわよ」

魔理沙「なんでこいつが犯人みたいな口ぶりなんだよ・・・」

霊夢「今回の異変はこいつと、記事に載ってたヤツが最も関連しているって睨んでるわ」

魔理沙「まあ、それは間違いないと思うけどさ。こいつは何も悪いことしてないと思うぜ？」

霊夢「それくらいはわかってるわ、私はただ「こいつと記事に載ってたヤツが関連している」と言っただけよ」

サヤカ「・・・霊夢さんの言う通りです。私は元の世界でも、アラガミと戦う毎日を送っていました」

霊夢「アラガミ・・・記事に載ってた怪物のことね。まずはそういったについて詳しく教えて頂戴」

サヤカ「わかりました」

サヤカはアラガミについて説明し始める。霊夢と魔理沙は真剣な表情でそれを聞く。

霊夢「なるほど、大体理解できたわ。今回の異変は骨が折れそうね」

サヤカ「厄介事を持ち込んでしまってますみません・・・」

霊夢「気にすることはないわ。ここは全てを受け入れる幻想郷。害となる存在じゃなければどんなヤツでも歓迎するわ」

魔理沙「さ、行こうぜ地底に！」

サヤカ「あ、ちょっと待って下さい。今永琳さん達がアラガミに対抗するための手段を研究しています。まずはそこに行きませんか？」

霊夢「それもそうね。いざという時にあんたの足手まといになるの

は癪だし」

魔理沙「じゃ、ちょっとバビューンと飛んでくるぜ、サヤカはここで待ってる、すぐ戻ってくるからな」

すると霊夢と魔理沙は竹林に向かって速いスピードで飛んで行った。サヤカはそれを見て啞然としている。

サヤカ「そ、空を飛んだ・・・！？しかも単体で・・・。優曇華さん、あなたの言う通り、私の知ってる常識がどんどん覆されていきます・・・」

何もすることがないので体操でもしようかと思った頃、魔理沙の言う通り、程無くして戻ってきた。

サヤカ「はやッ！？竹林まで結構距離ありましたよ！？」

魔理沙「諦めろ、ここは幻想郷だぜ？」

サヤカ「はあ・・・あ、まだ支度してないでした、ちょっと待っててください」

サヤカは神機を取りに屋内に戻り、すぐにまた現れる。

魔理沙「じゃ、改めて地底に行くとするか！」

霊夢「サヤカ、魔理沙の後ろに乗りなさい。魔理沙、いけるわね？」

魔理沙「大丈夫だ、問題ないぜ！サヤカ、しっかり捕まってるよ！」

サヤカ「はい！」

三人は地底を目指し、真っ直ぐに跳んで行った。

M i s s i o n 9 主人公は遅れて出るもの（後書き）

弟「お前ホント味噌好きだよな・・・」

作「何が悪い」

弟「味噌粥といい味噌煮込みといい、全部お前の好物じゃねえかよ」

作「諦めろ、ここは幻想郷だぜ？」

弟「その理屈で大体のことが許されるところが幻想郷の怖いところだな・
・・」

次回は再びレイジsideに戻ります。

主要登場人物（Mission 1 ～ Mission 9 現在）（前書き）

注意！ここでは、第一話から第九話を読んでいない方は閲覧を推奨しません！他にも、ゴッドイーターバーストをやってなかったらわからない知識、その他の知識が必要だったり、これからのちよつとしたネタバレも含みます！嫌いな方はバックして戻ることを推奨します！

主要登場人物 (Mission 1 ~ Mission 9 現在)

戌亥^{いぬい}レイジ

主人公。だから無口。何故かって？例えるなら任天堂のゲームの主人公の大半は無口なことから

年齢：16くらい

性別：男

顔：1

髪：黒、17

声：2 (赤羽根健治)、Mission 5「地獄」での悲鳴のみ宮野真守 (刹那・F・セイエイ役の時の) 赤羽根さんと刹那を演じてる時の宮野さんの声って似てね？・・・え、似てない？

服装：F 正式上衣 レッド、ナーヴァルスリット

装備：神斬りクレイモア 真、フアランクス 極、剛支援シールド 真

制御ユニット：ゴッドイーター

強化パーツ：ガード強化3、討伐部隊

フェンリル極東支部第一部隊隊長。基本リアクションで対話してい

る。セリフはないのに説明をするって矛盾してるけど登場人物達の会話が成立出来るからいいよね。無口キャラを扱う時に大助かり。

バレットは今のところ使っていないが、高燃費な（二回連続で撃てない）弾しかない。よって剣で戦うことが多い。バレットエディットしてたかなぜかマスパ並みのレーザーが撃てるバレットを作ってしまった、しかもそれを全属性で作り、携行してるとか。

幻想入りした後地底を出ようとするときまでサヤカのことを忘れて宴会を楽しんだり、ユーバーセンスが使えるのを忘れていてこいしに苦戦するなど意外に忘れっぽい。

神機用のホルスター（革製）を作ってたりと、手先は器用である。

道場の家の出身。父、母、姉のカナとの4人家族。父は柔道、母は剣道、姉は空手が得意。レイジは日本で生まれた武道は皆得意で、道場を開いた父より強い。武道を取り入れた戦い方をするため、人によつては綺麗に見えてしまうことがあるらしい。

基本ちゃん避け。勇儀ほどの相手じゃないとそのスタイルは崩さない。

ゴッドイーターになる2年前、彼が留守中にヴィーナス率いるアラガミ達に襲われ、家族、門下生が全員死亡。彼も目をやられてしまふが、どういうワケかヴィーナスが自らの目と彼の目を交換し、助けてくれた。

現在はその目を有効利用し、バースト時には両目の瞳から青い炎のようなオーラが溢れ出す。どこぞのブラック・オック・シューター？捕喰攻撃を当てるだけでリンクバーストLv.3程の能力上昇幅。

・・・先程述べたマスパバレットなどを含め、この主人公には強キ
ヤラ成分が含まれています。嫌いな方は気をつけてください。

なめかた
行方サヤカ

レイジと共に幻想入りした神機使い。大ケガして幻想入り

年齢：レイジと同じ

性別：女

顔：1

髪：黒、23

声：2（伊藤かな恵）

服装：F S A T ホワイト上、F 強襲下衣 レッド

装備：ナイフ 極、ステラスウオーム 真、 ヘラクレス 堅

制御ユニット：レンジャー

強化パーツ：貫通強化3、全耐性強化

フェンリル本部の特殊部隊、フェンリルスペシャルアサルトチーム
F S A T から極東支部第一部隊に派遣
された新型神機使い。

レイジとミッション中、アラガミの奇襲により頭蓋骨骨折という致命的なケガを負ったが、霊夢、魔理沙、永琳によって助けられる。それからはレイジを探すため現在地底へ向かっている。

F S A Tに所属しているためか、名乗るときに敬礼するクセがある。

緊張すると言葉を噛んだりなどかわいいドジを踏んでくれるが、やはりF S A Tに所属してるだけあって戦闘中の行動には落ち着きが見られる。ドジっ子は見てるだけなら可愛いよね。・・・緊張したら噛むって結構普通じゃね？

レイジとは真逆で狙撃が得意。銃身がスナイパーなのでバレットもレーザー系がメイン。スキルにトリガーハッピーが付いてるので燃費もレイジとは真逆。

レン

レイジとアーティがピンチに陥った時に突然現れ助けてくれた謎の神機使い。

年齢： 不明

性別： 男

装備：この小説内での設定だが、宝剣 楊貴妃 真、シヴァ 秘、トリスメガトス 衛

どこからともなく突然助けに現れた神機使い。医療班所属。アラガ

ミ化した人間の治療法及び予防法の研究をしている。

アーティによく無茶振りされたりと、振り回されることが多い。

ゴッドイーターバーストをやった人には、レンが何者か、わかるよね・・・？

なぜかアーティへのツツコミ担当に任命してしまった作者。無意識
って恐ろしい。

中性的な顔立ちをしている。女装もきつと似合うはず。

何故かアラガミに狙われにくい。よって後方支援を得意とする。

アーティ

年齢：不明

性別：女

装備：クレイモア 極、フランクス 極、リジェクター 真

強化パーツ：大剣強化2、神風セット

現時点では述べられていないが、実はレイジが神機使いになってから初めて出会った神機使い。つまりコウタよりも先に会ったということになる。

アネットよりもひどい攻撃好きっ娘。ガードとか絶対にしない。ある意味、潔い。そのかわりカウンターと避ける技術は高い。そこんところがアネットとは違った。

レンによく無茶振りをするが、スルーされる。

「レンと会話が出来ている・・・!？」「レイジとレン、さとりにしか見えない・・・?」これらの意味することは何なのか、ゴッドイーターバーストをやった人ならわかるはず。

主要登場人物（Mission 1 ～ Mission 9 現在）（後書き）

弟「何だよこれ」

作「あ？」

弟「レイジとサヤカの外見、お前のキャラじゃねーかよ」

作「いいじゃん、出したかったんだもん」

弟「俺のも出せよ」

作「出して欲しかったんかい・・・」

Mission 10 破滅の運命（前書き）

皆さん、おはこんばちは。wingです。今回は紅魔館編となります。それではどうぞ。

Mission 10 破滅の運命

その頃、レイジ達は地上に出た後見送ってくれたさとりとこいしに礼を言った後、博霊神社に向かうことにした。レイジはユーバーセンスを発動させ、脳内で博霊神社への近道を探す。現在は森の中。すると、途中で湖と大きい屋敷があるのが脳内の地図でわかる。だがそれらを迂回していけば大丈夫だろうと、特に心配することなく進んでいた。

アーティ「・・・ねえ」

レン「はい？」

アーティ「なんか・・・肌寒くない？」

レン「そういえばそうですね・・・。あ、湖が見えてきましたよ」

アーティ「ちょっと顔洗おうかしら」

森の中を歩いていると、綺麗で広大な湖が見えてきた。アーティは一足早く顔を洗おうと駆け出した。

アーティ「うわ冷たッ！何よここ、御冷やみたいに冷たいじゃない！」

レン「先程からの気温の低さ・・・何かと関係してるのでしょうか・

・・・？」

すると、湖面がだんだん凍り出していく。

アーティ「なんかさっきから変よここ・・・プリティヴィ・マータ
でもいるのかしら」

レン「確かに、ここまで急速に水面が凍るのは変です。警戒した方が
いいかもしれm」

？「へへーん、びっくりしたー？」

遠くから声が聞こえた。声の主を探すと、凍った湖の真ん中に二人
の少女がいる。

？「ねえねえ、びっくりした？これ全部あたいがやったんだよ！」

？「多分聞こえてないと思うよ・・・」

距離が遠くてよく聞こえないため、レイジは少女達に近づく。地霊
殿にいた妖精と似たような雰囲気だが、姿は全く違う。

？「びっくりした？」

無邪気に問いかけてくる妖精。悪気は全くないようだ。正直に驚いたとつなずく。すると隣にいた妖精が丁寧な口調で話しかけてきた。

？「ごめんなさい、急に脅かすようなことをして。どこかへ行く途中ですか？」

ユーバーセンスで道のりは把握できるが、少しでも情報が多い方がいいだろう。というワケで二人の妖精に博霊神社に行く過程で危険なものがないか訊くことにした。

？「うーんそうだなあ、よし、弾幕ごっこであたいに勝ったら教えてあげる！」

？「チルノちゃん！唐突過ぎるよ！それに戦う必要なんてないでしょ！」

チルノ「えゝ、なんか最近弾幕ごっこしてないし、展開的にやった方がいいかなゝって。いいでしょ大ちゃん？」

大妖精「展開って何！？メタいよ！」

チルノと呼ばれた妖精はスペルカードを掲げ宣言する。

？「氷符「アイシクルフォール」！ほら、大ちゃんも一緒に！」

大妖精「やだよ・・・」

大妖精はあからさまに拒否の表情を見せる。チルノは仕方なく一人で戦うことに。レイジに向かって弾幕を展開する。

アーティ「・・・ハア。弾幕って割には正面がから空きね。レイジ、あいつに生半可な気持ちで戦うことの愚かさを教えてやりなさい」

アーティは呆れている。レイジとて例外ではない。とはいえ無視して逃げるには少々弾幕が邪魔だ。仕方ないので歩いてチルノの元に行き、軽くチョップを当てた。

チルノ「痛い！な、なんであたいの攻撃が当たってないの!？」

大妖精「思いつきり正面安地だったよ・・・」

チルノの味方である大妖精すら呆れの表情をしている。

チルノ「く・・・約束は約束だし、仕方ないわ。博霊神社でしょ？それならあっち」

チルノは左を向いて指さした。

大妖精「そっちじゃないよ・・・」

チルノ「え、そーだっけ？」

大妖精はチルノの問いに答える気も失せ、代わりにレイジの質問に答える。

大妖精「博霊神社はこの先です。途中で紅魔館というお屋敷がありますが迂回していけば大丈夫です。危険なものは特にはありませんが、気をつけてくださいね」

レイジは礼を言い、湖を後にした。暇になった妖精二人。何をしようか考えてると、チルノが森の中で何かが動いているのを見つけた。

チルノ「・・・？」

大妖精「チルノちゃん、どうしたの？」

チルノ「・・・あそこでなんか動いてたような」

大妖精「・・・？何もないよ？」

チルノ「おかしいなあ・・・」

その頃、とある森の中――

？「もう一人の方も中々やるようだね……。ん、どうした？……。ふうん、坊やは今そこにいるのか。じゃあ先回りして、お前達はこのを襲え。あの坊やならきつと助けに駆けつけるだろうさ……。え、作戦の意図がわからない？しょうがないね……。ここの住人は神機使いじゃないから、一部を除きあたし達を傷つけることすら難しい。だからそいつらはあの坊やにとって足枷にしかない。そこをお前たちが囲んで一気に仕留めようという寸法さ。わかったかい？……。さて、今回はちょっと質を上げようか」

――レイジ side――

レイジ達は現在、紅魔館の真横の塀のところに着いた。

アーティ「これが紅魔館……。ひどいセンスね。建物どころか塀まで真っ赤……。目が痛いわ」

レン「……。二人とも、警戒してください。アラガミの声が聞こえます」

アーティ「……。そういえばそうね。それに……。誰かが戦ってるわね」

三人は急いで音がする方へ向かった。すると、紅魔館の門の中にアラガミが次々となだれ込むのが見えた。

アーティ「さつさと終わらせましょ」

レン「同感です！」

一方、紅魔館庭園――

？「おかしい・・・！こいつら、何回攻撃しても倒れない！」

？「美鈴！大丈夫！？援護するわ！」

美鈴「咲夜さん！こいつらなんかおかしいんです！攻撃が効いてる感じがしません！」

咲夜「なら、追い払うだけよ！お嬢様と紅魔館は何としても守らないといけないわ！」

状況を説明すると、紅魔館の門番、紅美鈴は門の前で立ち寝していたところ、何かにぶつかり、はっと目を覚ます。すると見たこともない怪物が門を通ろうとしていたので、拳法やスペルカードで追い払おうとしたが、全く効いている様子がない。必死に食い止めようとするも、後から後から増援が現れ、美鈴だけでは捌ききれない状態になってしまふ。それをいち早く発見した紅魔館のメイド長、十六夜咲夜は妖精メイドを引き連れて美鈴の援護に回っている。

しかし咲夜達が援護に入っても状況は変わらず、ついには紅魔館の内部に侵入されてしまった。

咲夜「くっ！お嬢様が・・・！妖精達、美鈴を援護しなさい！美鈴！私はお嬢様を助けに行ってくるわ！」

美鈴「わかりました！」

この状況で戦力の分散はかなり危険だ。しかし紅魔館と主を見捨てるわけにもいかない。だが状況はさらに悪化していくばかり。妖精達がどんどん喰われていく。

美鈴「（このままじゃ・・・皆やられる！どうすれば・・・！）」

そう思いながら戦っていると、心なしか段々敵の数が減っているような気がした。怪物の死体がちらほら見かけるようになってきている。すると、誰かが怪物を切り裂いているのがチラッと見えた。だが前の敵で手一杯だ。振り向けない。美鈴はやっこの思いで門を最初に通った怪物を倒した時には、庭園にいた怪物は全て倒されていた。驚きつつも礼を言おうと怪物退治を手伝ってくれた人物を探す。見つけたと思った時にはその人物は紅魔館の入口に入ろうとしている。

美鈴「あっちよっと！」

声をかけた時には、もうすでに中に入ってしまった。追いかけたところだが、負傷した妖精達の面倒や荒らされた庭の手入れなどをしなければならなかったため、その場を離れられなかった。

一方、レイジ達は紅魔館の内部に侵入したアラガミを掃討するため、一旦バラバラになって各個撃破していくことになった。レイジはアラガミを倒しながら廊下を進む。時々どこからともなくナイフが飛んできたりしたが、気にせず奥へ進んだ。

咲夜「（あいつ・・・何者かしら・・・？ヴァンパイアハンターではなさそうだけど、注意しておいた方がいいわね）」

レイジは両開きのドアの前に辿り着き、ドアを開く。すると本がズラリと並んでいる。図書館のようだ。すると、誰かがすでにアラガミに襲われているのを発見した。

？「ひええええ〜！パチュリー様ああ！助けてください〜〜！」

パチュリー「わかってるわ小悪魔！日符「ロイヤルフレア」！」

一人はアラガミに追い掛け回され、もう一人はスペルカードで撃退を試みている。しかし攻撃が効くはずもなく、あっという間に追い詰められてしまう。

パチュリー「な、なぜ・・・攻撃が効かないの・・・！？」

小悪魔「うわ~~~~ん」

二人に危機が迫る。レイジは二人を囲むアラガミの群れに飛び込み、切り倒していく。突然現れたレイジを二人は啞然として見ている。そして図書館にいる全てのアラガミを倒し、神機をしまつて二人の無事を確認しようと振り向く。

パチュリー「あ、あなたは・・・」

パチュリーが喋りかけた時、

咲夜「そのあなた、止まりなさい！」

レイジ「！」

どこからともなく咲夜が現れ、一瞬の内にレイジの周囲にナイフを設置、飛ばしてきた。逃げ場がないため、神機の装甲を展開し、攻撃を防ぐ。強化パーツ「ガード強化3」のおかげで、どの角度からの攻撃も防げる。

咲夜「（全部防がれた！？）」

？「咲夜、少し早まり過ぎよ」

咲夜「すみません、お嬢様」

お嬢様という言葉に、この館の主なのだろうかとレイジは思考を巡らせる。すると部屋の奥からその主が現れた。だがレイジの予想とは違い、どう見ても小学生くらいの身長だ。咲夜も含めこちらを疑っている様子なので、神機はしまっておく。

？「・・・人間ね。あなた」

レイジは意図がよくわからなかったが、とりあえずうなづく。

？「あなたに少し訊きたいことがあるの。いいかしら？」

レイジ「・・・」

？「今朝、新聞で読んだのよ。地底での出来事のこと」

やはり、あれだけの騒ぎが起これば、新聞に書かれるのは当然だろう。

？「あなた、その時地底にいたのよね？」

レイジ「・・・？（コクッ）」

？「・・・話の意図が見えていないみたいだから簡単に言うわ。昨日起こった謎の怪物の地底襲撃。そして今回の紅魔館襲撃。どちらもその場所にあなたがいた・・・つまり」

レイジ「・・・」

？「私はあなたが今回の異変の原因だと睨んでいるわ」

レイジ「・・・!？」

完全に誤解されている。地底の時でも似たような疑いをかけられた。だが自分にアラガミを呼び寄せる力などない。自分は何もしていないと訴える。

？「証拠は？」

レイジ「・・・!」

一言でレイジは言い返せなくなってしまふ。無実の証拠などあの状況で確保できるわけがない。まず犯人扱いされるなんて思ってもいなかったから、証拠を持っていようと思えるわけがない。だが相手は証拠を見せなければ納得しない様子だ。だがレイジは頑なに自分は犯人ではないと訴え続ける。

？「証拠がないなら、私はあなたを捕らえなければならぬ。まずはその背中の剣を没収させてもらっわよ。抵抗したら・・・わかる

わね？」

紅魔館の主はレイジの神機を取り上げようと歩き出す。

咲夜「お嬢様、私が代わ」

？「いいわ、これくらい自分でやれる」

咲夜は主の身を案じて声をかけるが、構わない、と歩き続ける。咲夜は抵抗されないようにレイジの腕を掴んで拘束し、主は彼の背中に回り、神機の柄を掴む。すると、

「触るな！！！」

？「ッ！？」

レイジではない誰かの声が頭に響き、手に激痛が走る。すぐに手を放したため、侵喰はしていない。

咲夜「お嬢様！・・・あなた、何をしたの！」

？「ふ・・・抵抗したわね・・・。なら、あなたの身の安全は保障しないわ・・・！」

すると咲夜がナイフをレイジにめがけ投げつけてきた。レイジは容易にかわす。

？「咲夜、ちよつと武器を取ってくる。その間、お願いね」

咲夜「わかりました」

主は一旦その場を後にする。咲夜はこちらを睨みつけ、ナイフを両手に持つ。

咲夜「お嬢様を傷つける者は、何人たりとも許さない！覚悟！」

また戦わなければならないのか・・・内心げんなりするレイジ。どうやら幻想郷の住人は何か揉め事があつたらとりあえず弾幕勝負、というまるで何かのルールで決められたような行動をとる傾向にあるようだ。

咲夜はナイフで弾幕を展開する。もしかしたら今までで最も危険な弾幕かもしれない。気をつけつつも無駄に体力を使わないように最小限の動きで避けていく。弾幕よりも、レイジは咲夜の動きが気になっていた。咲夜は瞬間移動しながらナイフを投げ続けている。彼女は見た目だけなら人間だが、幻想郷の住人は何かと特別な能力を持っている。もしかしたらこの人も・・・レイジはそう思っていると、咲夜は懐中時計を取り出し、スペルカード名を宣言する。

咲夜「時よ止まれ、幻世「ザ・ワールド」！」

すると、咲夜以外の全ての動きが止まる。時間を止めていられる時間はそこまで長くないので、さつさとレイジの周囲に大量のナイフを設置する。

咲夜「さつきは防がれたけど、今度はどうかしら・・・？」

避ける隙間を埋めるようにナイフを設置した咲夜。これで勝負は決まったも同然と思ったのか、得意げにつぶやく。

咲夜「そして時は動き出す・・・」

止まった時を再び進めさせようと指を鳴らす。ナイフが一斉にレイジに襲い掛かる。

レイジ「！」

咲夜は完全に勝ったと思い込み、レイジに背を向けたまま笑みを浮かべている。するとパチュリーが咲夜に話しかける。

パチュリー「咲夜、舞い上がるのはきちんと確認してからにしなさ

い。後ろを見て」

咲夜「？」

パチュリーに言われるまま、振り返る。

咲夜「！？・・・馬鹿な、私の攻撃は完璧だったはず・・・！」

なんとレイジは両手にナイフを持ち、口にもナイフをくわえている。全て掴み切れてはいないがどうやらナイフを掴んで無理やり脱出するための隙間を作ったようだ。

パチュリー「忘れていない？スペルカードは争い事が起きた時に、無闇に死者を出さないように作られたのよ？だからスペルカードに完璧なものはないの」

咲夜「・・・すっかり忘れておりました・・・申し訳ありません」

レイジはナイフをバラバラとその辺に捨てる。どうやって説得しようか考えていると、主が戻ってきた。

？「あら、咲夜を相手にして無傷とはね。なかなかやるじゃない」

咲夜「お嬢様・・・」

？「下がりなさい咲夜。後は私がやるわ。他の皆も手は出さないで頂戴」

咲夜「・・・はい」

パチュリー「・・・」

咲夜は渋々と後方に下がる。今度は主と戦うことになりそうだ。

レミリア「冥土の土産に教えてあげるわ。私の名はレミリア・スカ
ーレット、この紅魔館の主よ。」

主の名はレミリアというらしい。レイジもとりあえず名乗ることにした。

レミリア「フ・・・決闘でもないのにわざわざ名乗るなんて、几帳面なのね。まあそれは置いてくとして」

レミリアは手に長い槍を持っている。咲夜が持っても長いと感じられるほどだ。見た目は子どもだが、背中の羽根、長い槍を軽々と持っていることから人間ではないだろう。

レミリア「さあ、覚悟はいいかしら」

レイジ「・・・」

レミリアは槍を構え、レイジを見据える。レイジは自然体のまま相手が動くのを待つ。程無くして、レミリアは走り出し、槍を振り始めた。振るスピードはかなり速いが、道場で薙刀も長年鍛錬していたレイジには当たらない。

レミリア「避けるのは得意なようね。ならこれはどう？神槍「グングニル」」

スperlカード名を宣言すると、レミリアの槍を持っていない方の手に光の槍が現れた。二刀流になりそのままレイジに攻撃をしかける。攻撃の感覚が短くなり、避けるのが難しくなる。

レミリア「どうしたの？ちょっとは抵抗してみなさい」

レミリアはレイジに反撃のチャンスを手つかせてきた。だがレイジは惑わされず攻撃が来るまでは決して動かないスタイルを徹底する。

レミリア「・・・ノリが悪い人間ね。せっかく反撃のチャンスを与えてあげたのに、後悔するわよ」

今度はレミリアはコウモリに化けてバラバラに散ってゆく。姿をくらまして一気に止めを刺そうとしているようだ。姿を消しているため、声が部屋中に反響する。

レミリア「あくまでも攻撃しないならもう終わりにするわね。安心しなさい、痛いのは少しの間だけ。すぐに眠らせてあげる・・・」

目では見つけれられないと思い、レイジは目を閉じ、わずかな音や気配を感じ取ろうと意識を集中させる。この索敵方法はレイジがまだ父を超えていなかった頃、父から教えてもらった技だ。父が言っていたことを思い出す。

——いいかレイジ、敵と戦うなら、周りの気配、わずかな音にも注意が必要だ。相手が見えなくても反撃の糸口はある。これはあくまでも俺の経験だが、敵はこちらを襲うならいつまでも隠れたまま動かないことはない。襲うなら、何かしらの動きをするはずだ。その時に隠れた気配に乱れが生じる。それを感じ取るんだ。・・・え、ちょっと解りづらいだって？わかった、俺が実践するから、レイジ、どこからでもいい、好きなタイミングでかかってこい——

レミリア「（ふふ・・・どこから攻めようかしら）」

——まずは目を閉じ、集中するんだ——

レミリア「あの辺がよさそうね」

レミリアは気配を消したまま、背後から音もなく近づいていく。

——敵はいつかこちらを仕留めようと動き出すだろう。たとえどんなヤツでも気配を隠しきることは出来ない。その時一瞬、空気に乱れができる——

レミリア「（所詮人間・・・この私に盾突いたことを後悔するかい）」

——その時まで、集中し続けるんだ。己の耳で、体で感じるんだ、敵の気配を——

レミリア「（あなたのは、どんな味がするのかしら・・・）」

レミリアはレイジの首筋に顔を近づける。

——んで、気配を感じたらすぐに——

レミリア「（いただきます・・・）」

——ぶん投げる!!

レミリアはレイジの血を吸おうと口を開け始めていた。レイジはその「気配」を察知し、即座に振り向きながらレミリアの腕を掴む。振り返った勢いを利用して背負い投げをし、地面に叩き付ける。

レミリア「ぶぎゃッ!」

一瞬の出来事にレミリアは反応できず、素っ頓狂な声を上げる。

咲夜「ああっお嬢様!」

レミリア「なんの、やったわね人間・・・うッ!」

思っていたよりもダメージが大きく、さらに体に痛みが長く残っており、レミリアは起き上がれない。

——痛いだろレイジ?不意を突かれると、ただの背負い投げでもいつもよりダメージが大きくなるんだ。上手く決まれば相手はすぐには動けなくなるだろう。これこそまさに——

一撃必殺、ってヤツだ。

レミリア「……くっ……！」

レミリアはやつとの思いで起き上がったが、未だダメージが響いているのか動くことがままならず、また姿勢が崩れ倒れ込む。

レミリア「……負けたわ、人間……」

ようやく降参したレミリア。主が降参すれば、部下も無闇に攻撃をしてくることはないだろう。レイジは一息つき、レミリアに手を差し伸べる。

レミリア「あ……悪いわね……。いたた……。あなた、強くやりすぎよ」

レイジに補佐されレミリアは立ち上がる。すると、美鈴が図書館に飛び込んできた。

美鈴「あ、やっと見つけました、さっきはありがとうございました！」

どうやらレイジに礼を言うためだけに紅魔館内を走り回っていたよ

うだ。とりあえずレイジも無事かどうか尋ねる。

美鈴「ええ、あなたがいなければ皆やられるところでした。あなたは命の恩人です！」

レイジは買い被りすぎだと謙遜する。そんな様子を見てレミリアは不思議に思う。

レミリア「え・・・こいつ、異変の原因じゃないの？」

美鈴「何を言ってるんですか！この人は何もしてません！もしこの人が犯人だったら私達はとくにやられてますよ！」

レミリア「・・・・・・・・・・」

咲夜「あ・・・・・・・・私を含め完全に勘違いだったようですね、お嬢様・
・・」

レミリア「・・・・・・・・う〜〜・・・・・・・・！」

レミリアは恥ずかしくなり、頭を抱えしゃがみ込んだ。それを見て咲夜は鼻血を噴出する。

咲夜「ぐはあッ」

美鈴「あっ！？咲夜さんしっかりしてください！」

パチュリー「咲夜、いつか貧血で倒れるわよ・・・」

突然のアクシデントにレイジと美鈴は困惑した。

M i s s i o n 10 破滅の運命（後書き）

作「なんだろ、紅魔組との絡みはすごい書きやすかったよ！」

弟「なあクソ兄貴、話の腰を折るようだが」

作「？」

弟「輝夜は？」

作「・・・・・・・・あ」

忘れてたワケじゃないんだからね！

Mission 11 シンパシー（前書き）

皆さん、おはこんばちは。w i n gです。お待ちせ致しました。それではどうぞ。

Mission 11 シンパシー

レイジと途中で別れたレンとアーティ。彼らも紅魔館内のアラガミを一扫し、玄關に集まっていた。

レン「お疲れ様です。こちらは特に大きな問題はありませんでした・
・・どうなさいましたか？」

アーティはなぜか苛立った表情をしている。

アーティ「あ？#・・・いや、なんでもないわ、こっちも異常なし」

レン「（あなたに異常はみられますけどね・・・）」

言ったらぶん殴られそうな気がするので心の中でつぶやく。

レン「あゝ・・・レイジさん、遅いですね」

アーティ「あいつなら四階で今レミリアってヤツと紅茶飲んでるわ」

レン「終わったら一旦集まろうってことになってたのに、完全に忘れてますね・・・」

アーティ「褒めても何も出ないわよ」

レン「あなたに言ったつもりじゃないんですけどね。褒めてすらい
ないんですけど」

アーティ「ノリなさいよ」

レン「何にノれっていうんですか・・・」

一方、サヤカ達は地底に向かう途中、紅魔館上空を飛んでいた。魔
理沙が下を見ると、いつもと違う光景が目に入った。

魔理沙「んお？なんか紅魔館の庭がえらいことになってんな」

サヤカ「あ、ホントですね・・・もしかしたらレイジさんがいる
かもしれません。これだけの数を全て倒せるのは私達以外で彼ぐら
いでしょうから」

霊夢「とりあえず行先変更ね、一旦紅魔館へ寄って住人の安全確認
よ」

魔理沙「おk！」

霊夢、魔理沙は地上に降下し、サヤカは途中で飛び降りる。そして
アラガミ達の死体を調べ始める。

魔理沙「サヤカ、何やってんだ？それからなにかわかるもんでもあ

んのか？」

サヤカ「……この斬り傷……間違いない、レイジさんはここにいます」

霊夢「なら、早く中に入りましょ。レイジってヤツにも話を聞いてみたいし」

三人は足早に屋敷に入っていった。

レン「ん、あれは……あ、サヤカさんじゃないですか」

アーティ「一体どこをほつつき歩いてたんだか……まあ無事ならいいけど」

霊夢「レミリアー！どこー？美少女巫女が遊びに来たわよー」

アーティ・魔理沙「自分で美少女とかないわー」

霊夢「うるさいわね、自分に自信を持つことは大事なの」

サヤカ「ここには誰もいないようですね……。奥に行ってみますか？」

サヤカ達三人は屋敷の奥へ、レン、アーティは真っ直ぐレイジのいる部屋に向かった。

レン「それにしても、またピタリとレイジさんの居場所を当てましたね。やっぱりアレですか？」

アーティ「てきいんときたのよ」

レン「あなたの勘はすごいですね・・・」

その頃、レイジはレミリアに連れられて、ティータイムを過ごしていた。

レミリア「本来は咲夜が淹れてくれるはずだったんだけど、あの状態だから。あなたを誤解したことへの謝罪の意味でも私が淹れてくれることにしたわ。どう？」

レイジは紅茶の知識はほとんどない。とりあえず味は良いので美味しいと言っておくことにした。

レミリア「今、なんて言おうか焦ったでしょ？」

レイジ「・・・（・・・）」

レミリア「ふふ、気にしないでいいのよ」

レミリアに茶化されながら紅茶を飲む。紅茶を飲み終えた頃に霊夢

達が部屋に入って来た。

霊夢「あゝいたいた。ちょっとレミリア、返事くらいしなさい……
って」

サヤカ「レイジさん！よかったあ無事だったんですね！」

サヤカはいきなり走ってきてレイジに抱き着く。飛び込みながらのため倒れそうになったがなんとか姿勢を維持し踏みとどまる。レイジは驚きながらもサヤカの無事を確認する。

サヤカ「あつごめんなさい！嬉しかったものでつい……／＼／＼あ、ケガはもう大丈夫です。……ほらね」

魔理沙「お前がレイジってーのか？私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ」

霊夢「私は博霊霊夢。神社の巫女をやってるわ。サヤカから大体話は聞いてるけど、地底にいたのはあんだし、後で教えてくれない？」

レイジは構わないとうなずく。

レミリア「席が空いてるから霊夢達も座りなさい。さてレイジ、まず私にあの怪物のことについて教えてくれないかしら」

レミリアはアラガミのことを何も知らない。まずはレミリアにアラガミとは何なのかを説明し、次に地底で起こった事を説明した。

レミリア「地底に突然現れた・・・ねえ」

魔理沙「どっから湧いてきてるんだ・・・？」

霊夢「よくわからないけど、確か地上から地底を一望できる場所が何か所かあったはずよ。恐らくそこから侵入したんでしょうね」

魔理沙「話を聞く限りじゃ大した対策もやってないようだしな・・・どうしたものか」

霊夢「私に対アラガミ用の結界でも張ってこようか？元々あそこを調べに行くつもりだったし」

そう言つて霊夢は立ち上がる。レイジは一人では危ないといっている。こうとする。

霊夢「大丈夫よ、永遠亭で・・・あゝあなたは知らないか。まあそういうところがあんだけど、そこに住んでる医者がね、私達でもアラガミに対抗できる薬品を作ってくれたのよ。それのおかげで私と魔理沙はスペルカードで十分戦えるわ」

どうやってその薬品を作ったか知らないが、アラガミに対抗出来る

手段があるなら問題ないだろう。広範囲を攻撃できるスペルカードなら尚更だ。

霊夢「あら、もう夜なのね。じゃあちよっくら行ってくるわ。今日はあつちで夜を過ごすとしようかな。あ、それと魔理沙はここに残ってなさい。レイジとサヤカがここにいる今、再びここがアラガミに襲われる可能性は高い。戦力は多い方がいいわ」

魔理沙「こういう時のお前の予想は半ば予言だからな・・・用心しとくぜ。お前も気をつけろよ」

霊夢は部屋を出る。レミリアは何かを考えている様子だった。

レミリア「・・・私も永遠亭に行った方がいいのかもね」

魔理沙「自分の身を守りたいならそうした方がいいぜ。あそくだ、永遠亭に行った時永琳から聞いたんだが、近々対アラガミ用のアイテムを兎達を使って幻想郷中に売りに行かせるそうだぜ。咲夜にでも買いに行かせたらどうだ？」

レミリア「いい仕事するわね、永琳。で、どんな形なのかは教えてくれたの？」

魔理沙「いや、あの時はまだ構想の段階だったから教えてくれなかったぜ。私としてはパワフルなのがいいな。爆弾とか」

サヤカ「人里で売るには危なくありませんか・・・？」

レミリア「・・・纏めると、今は早めにそのアイテムを手に入れるか、永遠亭へ行きスペルカードをアラガミにも効くようにしてもらうようにするしかないってワケね」

魔理沙「そういうこった」

レミリア「なら私は永遠亭に行くわ。誰かに頼らなければいけないというのはちよつと癪だけど、いざという時に何も出来ないのはもつと嫌だしね。なるべく早く戻ってくるわ」

レミリアも外に出るため部屋を後にし、残ったのは魔理沙、サヤカ、レイジ、そしていつの間にか部屋に入って来たレンとアーティだ。

サヤカ「これからどうします？交代で見張りでもしますか？」

魔理沙「用心するに越したことはないが、まずは腹ごしらえといこうぜ。見張りなら門番が自然とやってくれるさ。・・・さて、咲夜を探すとするかね」

レン「なら僕達で見張りをしましょう」

アーティ「そうね、腹減ってないし」

少女&神機使い食事中・・・

魔理沙「ふう、御馳走さん」

サヤカ「わざわざすみません。私達の分まで作っていただいて」

レイジ「・・・（ペコリ）」

咲夜「気にしなくていいのよ。それより、お嬢様を見なかった？さつきから見当たらないの」

魔理沙「ああ、あいつ永遠亭に行っただぜ」

咲夜「なッ！？私に黙ってなぜそんな遠い所へ・・・心配だわ」

魔理沙「大丈夫だつて。スペルカードをアラガミにも効くようにしてもらっただけだぜ」

咲夜「でも、もし道中であの怪物達に襲われたら・・・」

魔理沙「心配性だな、問題ないぜ」

咲夜「どうしてそう言い切れるの・・・」

魔理沙「今は夜だからだ。それにあいつ、コウモリになって姿をくらませられるしな」

咲夜「ああお嬢様、どうか御無事で・・・」

夜11時、魔理沙は一人門へと向かっていた。

魔理沙「じゃ私達はそろそろ寝るから、しっかり門番頼むぜ」

美鈴「ええ、最近何故か夜に眠くなりにくいので大丈夫です」

魔理沙「まあ昼にしっかりと寝てるしな」

美鈴「それは大声で言わないで・・・」

その頃サヤカとレイジは咲夜に寝床の案内をされていた。

咲夜「今回の襲撃で大半の部屋が荒らされちゃってね、快適に使える部屋がここくらいしかなかったのよ。大人数用の部屋だけどいい？」

サヤカ「構いませんよ。案内ありがとうございます」

礼を言い、中に入るとベッドが七つほどある広い部屋。伸び伸びとした空間、たくさんのベッドが何故か眠気を誘う。遅れて魔理沙もやってきた。

サヤカ「アラガミが襲って来たりとか何かあった時のために、服はそのままで寝ましょう」

魔理沙「なんでお前らがいたところを襲ったのか気になるが・・・まあ考えても仕方ない。さっさと寝ようぜ」

サヤカ「ええ、おやすみなさい」

魔理沙「おやすみだぜ」

レイジ「・・・」

夜12時。レイジはトイレに行こうと起き上がり、眠気がとれない時のゆつくりとした足取りで寝室を出る。だが肝心のトイレの場所がわからない。仕方ないので近くにいた妖精メイドに訊くことにした。

妖精メイド「二階から上のトイレは現在掃除中なので、一階に降りてすぐ左にあるトイレをお使いください」

礼を言い、一階のトイレで用を足す。手を洗った後寝室に戻ろうと階段へ向かうと、特徴的な羽根を持つ少女がレイジをじっと見つめていた。背丈はレミリアと同じくらいだろう。

？「ねえ、こっちへ来てくれない？」

レイジ「・・・？」

？「お願い」

何をしたいのかよくわからないが、レイジは少女に向かって歩き始める。

？「こつち」

現在位置は一階。少女は下へ続く階段を下りているため地下に続いているようだ。レイジは後について行くように階段を下りていく。段々周りが暗くなり、蠟燭だけが不気味に階段を照らしている。階段を下り終えると、今度は地下牢がある廊下を進んでいく。横を見れば牢屋、中には骸骨が見えることも。なぜこんな場所があるのか？不審に思い始めるレイジ。すると目的地に着いたのか、少女は足を止める。そこには誰かを閉じ込めるためにあるかのような大きく、堅く重そうな扉があった。

？「ここ、私の部屋・・・入って」

扉を開け、こちらを招き入れる。何故か期待の気持ちが浮かばない。恐る恐る入ってみると、これまでの道と同じように薄暗い。部屋には大きめのベッドが一つ、火が付いた蠟燭が一本、一部分が千切れたぬいぐるみがたくさんあった。ゆっくりとドアを閉める音が響いた後、少しの沈黙。少女は少しいつむいたまま動かない。レイジは何か用があるのか訊こうとする。

？「やっと来てくれた・・・」

レイジ「・・・？」

？「やっと来てくれた！私と遊べる人！」

レイジ「ッ！？」

少女は急に顔を上げ、歓喜とも狂気ともいえる笑顔でレイジの肩を掴み壁に押しつける。レイジは腕をどけようとするが、ビクともしない。

？「ねえねえ、あなたお姉さまに勝ったんでしょ！？妖精メイドが話してるのを聞いたの！」

レイジ「・・・」

フラン「私はフランドール！フランって呼んでいいよ！」

名乗ってきたのでとりあえずレイジも名乗っておく。警戒は解かないままフランの話を聞く。

フラン「ふうん・・・ねえレイジ」

レイジ「・・・」

フラン「あなたは、私と遊んでくれる人間？」

レイジ「・・・！」

レイジはゾツとした後咄嗟に突き飛ばし、距離をとる。フランは倒れたまま笑い声を上げ、浮き上がるようにして起き上がった。

フラン「あははははは・・・お姉さまを負かした人間を見られるなんて霊夢と魔理沙以来よ。・・・なら、私とも遊べるよねえ！」

フランはスペルカードを取り出し宣言する。

フラン「あははは、禁弾「過去を刻む時計」！」

宣言が終わると、十字型の弾をブンブンと投げてきた。レイジは弾の動きに合わせて潜り抜けるようにかわしたり、伏せたりして避けていく。人を呼びつけていきなり襲って来るなんて正気の沙汰じゃない、早くここから脱出しないと・・・。そう思ったレイジは避けながら扉へ向かう。しかしそれを感じかれてしまったのか、フランは弾を両手に持ち激しく回転させながら突進してきた。

フラン「なんとおおおおおおお！！！」

レイジは逃げられないと思い、神機で防ごうと背中に手を伸ばすが感触がない。寝室に置いて来てしまったのだ。

仕方なく避けることにした。ギリギリで避けたため、頬をかすめ、血が滴る。

フラン「ダメだよ、逃げちゃ・・・まだ全然遊び足りないよ」

フランは勢い余って地面に激突したが、何も起こらなかったかのようになり上がった。この相手を無力化するのはかなり厳しい。手元に神機がない以上、隙を見計らって脱出するしかないだろう。

フラン「次行くよ！禁忌「フォーオブアカインド」！」

今度はフランが四人に分身し、また十字の弾を飛ばしてきた。四人いるので密度も四倍。次第にレイジは追い詰められていく。こんな時に神機があったら・・・忘れっぽい自分をつくづく情けなく思うレイジ。すると不意に右手に重みを感じた。見てみると、なんと神機を持っている。しかも刀身が「鮫刃ノコギリ 真」に切り替わっている。

フランは驚き、喜んでいる。手品だと思っているようだ。

フラン「すごい！何もないところから武器が出てきたあ！・・・え、自分でもわからない？・・・まあいいや、続きをやる！」

フランと分身達は引き続き弾を飛ばしてくる。レイジは弾を次々と斬り、打ち消していく。

フラン「ヒュウ、弾を斬れるなんてすごいね。ならこれはどうだ！禁忌「レーヴァテイン」！」

次のスペルカードを宣言。すると四人の手に燃え盛るような赤いオーラを纏う剣が現れ、それを振り回して攻撃してきた。柄が少し大きいため両手剣のようだが、刃は異様なほど長い。その上剣を振った軌跡から弾が飛んでくるため、かなり危険だ。しかし四人ともレイジに接近しているため、彼は逆に考えチャンスだと思った。その矢先にフラン達が剣を振り下ろしてくる。これを見逃さず、回転しながら神機を振り、レーヴァテインを断ち切った。分身も何故か一緒に消えてしまった。フランは一瞬の出来事に驚愕している。

フラン「わ、私のレーヴァテインが・・・簡単に・・・!？」

神機の刀身の刃にはオラクル細胞が配列されている。それによる斬撃は斬るというより喰い裂くといった表現が正しいだろう。オラクル細胞はあらゆるものを喰らうことが出来るため、事実上斬れないものはあんまりないのである。

啞然としている隙にレイジは部屋を出ようと駆け出す。

フラン「あつ待って！」

フランの声に構わず走り続ける。

フラン「・・・どうして、そんなに私を避けようとするの・・・？」

突然落ち込んだ口調になり、レイジは足を止める。

フラン「私はただ、楽しく遊びただけなのに・・・皆私から遠ざかるうとする・・・。霊夢や魔理沙と遊んだ時だってそう・・・」
さっさと終わらせて帰ろう」って顔してたの・・・」

レイジ「・・・」

フラン「私の能力、ありとあらゆるものを破壊する程度の能力のせいで近寄りがたいと思われるのは仕方ないと思ってる・・・。でも私は壊すつもりなんてないの！」

レイジ「・・・」

フラン「私と遊んだ人は皆壊れてしまった・・・でも霊夢と魔理沙は壊れず、私を返り討ちにした。私はその時嬉しかった！やっ自分と対等に遊べる人に出会えたって・・・嬉しくて仕方なかった！・・・けど、あの二人は私を叩きのめしたらすっきりとした顔で帰って行った・・・」

フランは涙を浮かべ、レーヴァティンを握りしめる。

フラン「どうして！？どうして誰一人純粋な気持ちで私と遊んでくれないの！？495年間ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとと我慢してたんだよ！？一人で！！私を受け入れて楽しく遊んでくれる人をずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとと待ってた！！やっと出会えたと思ったたら避けられるなんて・・・ひどすぎるよ！もう一人はいやだ！！孤独はいやだ！！私は壊すつもりなんてない！！そう言っても誰も信じてくれない！！どうしてどうして！！ねえどうして！？」

レイジ」・・・」

フラン「私と遊んでツ！壊れないようにするから！・・・お願い・・・お願いだから・・・」

フラン「誰か私を信じてええええええええええええええええ！！！！！！」

「！！！！！！！！」

悲痛の叫びが部屋中に木霊する。レイジの心にもそれは深く響いていた。フランの叫びが、昔の記憶を呼び起こす。

レイジが家族を失った後、彼は施設で過ごしていたが、彼は常に孤独だった。理由は主に彼の目を不気味がつて遠ざけられたことからだ。

「お前なんで日本人のクセに目エ黒くないワケ？」

「アラガミに目エ交換されたって？おいおいお前アラガミ化ってヤツになんねエよな？そんな危なっかしい状態でなんでここにんだよ」

「お前と一緒にいたらアラガミが寄ってきそつだあっち行け」

あの時の自分とフランを照らし合わせる。

フラン「うわああああああ！」

悲しみと憤りを剣に乗せてこちらに走ってくる。壊さないと云っておきながら矛盾しているように見えるが、彼女は不器用ながらもただ純粹に遊びたいだけなのだ。レイジは決めた。もうこの子を「避けない」と。この子が満足するまで遊んであげようと。レイジは神機の装甲を展開し、攻撃を防ぐ。何度も連撃が来ようと、避けられる攻撃もすべて防いでいく。それはまるでフランの気持ちを受け止めているようだった。急に回避行動をしなくなったことが気になったのか、フランは一旦攻撃の手を止める。

フラン「ぐすん・・・急に避けなくなったけど、どうしたの・・・？」

レイジはもう遊ばないのかというような表情を見せる。それを見てフランは少し動揺する。

フラン「え・・・遊んで・・・くれるの・・・？」

レイジは微笑みと共にうなづく。フランはそれを見てどれほど嬉しかったのだろうか。喜びの涙を流しながら次のスペルカードを取り出す。

フラン「ありがとう・・・ありがとう！じゃあ次いくよ、禁忌「恋の迷路」！」

フランを中心に弾幕が張られる。しかし一か所だけぽっかりと何もないところがある。そこをくぐっていけそうだ。

フラン「レイジ！ここまで来れるなら来てごらん！もし来れたら・・・コインいっこ！」

唯でさえ弾幕を避けるのは大変なのにコインいっこ。レイジはクスツと笑いながら、弾幕の迷路へと突っ込んでいった。

時は少し遡り、レイジ達が寝ようとする頃、レンとアーティは紅魔館の四階で窓の外から見える景色を眺めつつアラガミが来ないか監視していた。

レン「曇ってきましたね。雨が降らないといいのですが」

アーティ「折り畳みでも持つて来ればよかったわね。・・・ねえ、突然だけど吸血鬼って何に弱かったかしら」

レン「弱いというより、苦手って程度なんですけどね。一般的に知られてるのはニンニクとか、日光、銀、十字架、流水・・・てここですね」

アーティ「流水ってのは聞いたことないわね。風呂とか入れないんじゃない？」

レン「さあ・・・どこまでが流水の範疇なのかはわかりませんが」

しばらく雑談をしているとアーティは何かを感じ取ったのか窓からバツと顔を逸らす。

レン「・・・どうかしましたか？」

アーティ「・・・ハア。レイジのヤツ、まアた厄介事に巻き込まれたわ」

レン「えっ！？どこですか!？」

アーティ「地下に行くわよ」

二人は急いで地下へと駆け下りた。

レン「うわぁ・・・気味が悪いですね」

アーティ「明らかに怪しすぎるでしょこ。まったく、アイツは知らない人についてっちゃいけないって教わらなかったのかしら」

レン「あ、あそこの中から音がしますよ」

フランの部屋の前に着き、耳を傾ける。激しい轟音が鳴り続けているのがわかる。

レン「中で一体何が・・・」

アーティ「弾幕勝負でも仕掛けられたんじゃないの」

レン「まずいですね、助けに行きましょう」

アーティ「そうしたいけど、この様子じゃ介入出来る余地はなさそうね。しばらく待ちましょ」

一時間後――

レン「音が聞こえなくなってから大分経ちますね」

アーティ「もう入っても大丈夫そうね。お邪魔しまっす！」

レン「扉は足で開けるものじゃありませんよ・・・」

中に入ると、部屋は荒れ、所々に陥没した跡がみられる。レイジを探して見渡すと、隅の方で壁にもたれて座っているのが見えた。傍にはレイジに寄り添うようにフランがレイジにもたれかかっていた。

レン「レイジさん！・・・よかった、眠っているだけのようです」

アーティ「フ・・・流石レイジね」

レン「あ、頬を切ってますね。念のため絆創膏を・・・」

レンはポケットに会った絆創膏をレイジの頬に貼る。

アーティ「大丈夫そうだし、四階に戻るわよ」

レン「ええ」

近くにあった毛布を寝ている二人にかけ、部屋を後にした。

M i s s i o n 11 シンパシー（後書き）

作「フランちゃんウフフ！」

弟「うふ、うふふ、うふふふふふふ」

作「バカ！それを言ったらヤツが・・・！」

魔理沙「私の物まねか？ずいぶんと上手いんだなあ・・・？」

弟「し、しまった・・・！」

魔理沙「消し飛べ！ファイナルスパーク！」

作・弟「ぎゃああああああああああああああああ！！！！」

ネタが切れてきてしまいました・・・

Mission 12 めざめるパワー（前書き）

皆さん、おはこんばんは。wingです。最近車校が忙しくて投稿が遅れがちです。改めましてこの小説を読んでくれる方々、ありがとうございます。

Mission 12 めざめるパワー

次の日の朝、サヤカは魔理沙よりも早く起床した。周囲を見渡し、今は朝であること、自分以外誰も起きていないことを確認する。

サヤカ「ふあゝあ……。 (まだ二人とも起きてないのかな……。あれ？レイジさんがいない……。?)」

レイジが寝ていたベッドを見ると、レイジの姿が見当たらない。トイレかなと思い、サヤカもトイレへ行こうと寝室を出る。すると出会い頭にパチュリーが現れた。かなり慌てている様子だ。

パチュリー「はあ……。はあ……。魔理沙、魔理沙はいる!？」

サヤカ「いますけど、まだ寝ていm……。わわっ」

パチュリーはサヤカを押し分け、魔理沙を起こそうと揺さぶる。

パチュリー「起きて、起きなさい! フランが、フランが!」

魔理沙「……。あー? フランがなんだよ……」

パチュリー「フランが最近また暴れやすい時期に入ったから地下に続く階段に結界を張って通れなくしてあったんだけど、今朝見たら

破れてたのよ！」

魔理沙「へーそれは大変だな．．．．．な、なんだってー！？」

魔理沙は驚愕しガバツと飛び起きる。

魔理沙「まずいな、なんだってこんな時に．．．ん、レイジは？」

サヤカ「さあ、私が起きた頃にはすでにいなk．．．」

三人「まさか！！！」

三人は一目散にフランの部屋へ向かった。

魔理沙「サヤカ、もしかしたら最悪の場面を見るかもしれない．．．
。覚悟しとけよ」

サヤカ「え、縁起でもないこと言わないでください！ってゆーかフ
ランっていう人はそんなに危険なんですか？」

パチュリー「ええ、あの子は少し精神が安定しない時があるから。
それに一番危ないのはあの子の能力、「ありとあらゆるものを破壊
する程度の能力」．．．。その気になれば、私達なんてあつという
間に木端微塵に出来るの。今はただ、彼とあの子の無事を願うしか
ないわね．．．」

サヤカ「そ、そんな人がいたんですか・・・昨日は会わなかったのに・・・」

パチュリー「最近また凶暴になってきたから落ち着くまで地下に閉じ込めてただけだね・・・」

魔理沙「だがどんなもので閉じ込めてもほぼ無意味だ。あいつにとは紙同然だからな」

サヤカ「レイジさん・・・」

フランの部屋に辿り着き、扉を開け中の様子を確認する。かなり荒れていたため、三人の脳裏に最悪の結末が見え隠れする。すると三人の予想とは違い、まるで兄妹のように寄り添って眠るレイジとフランの姿が目に入った。

魔理沙「ふう、無事だったか・・・。しかしあいつ・・・何モンだ？ ほぼ無傷だぜ・・・」

サヤカ「ああ、よかったあ」

パチュリー「あの様子だと、フランに相当懐かれたようね。もう少しだけこのままにしてあげましょう」

安堵の息を吐き、地上階へ出ようと部屋を後にする。すると、部屋を出るのを待っていたかのようにフランが目を開いた。

フラン「ふふっその通り、レイジは私のお気に入りに入り？また機会があったら遊ぶんだから・・・」

フランはレイジを見てつぶやく。まだレイジは眠ったままだ。

フラン「・・・。・・・ちよつとなら、・・・いいよね」

何かの衝動が湧きおこり、レイジの首筋に顔を近づけて噛みつく。

カプツ、チューチュー・・・

フラン「!？」

突如舌に痛みが。フランは驚き、ぺっぺと血を吐く。それに気づいたのか、レイジが目を覚ます。

レイジ「・・・?」

フラン「うえーっぺっぺっ！なにこの血、痛い！不味いとかそんなレベルじゃない！痛い！」

レイジ「???」

レイジは状況がわからず、?な顔をしている。

フラン「うえ・・・あなたの血、どうなってるの?あなた本当に人間?なんか噛みつかれるような痛みだったけど」

レイジは神機使いなので、血にはオラクル細胞が含まれる。体内のオラクル細胞が別の物質(フランの舌)に触れたため、捕喰しようとしたのだ。噛みつかれるような痛みは、恐らくそれが原因だろう。幸い侵喰はされていない。レイジは痛みの原因を説明し、次いでアラガミのことも説明した。

フラン「へー、でも私は多分永遠亭に行かなくてもいいと思うよ。だって私の能力は「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」だから、そいつらなんてきゅっとしてドカーン!」

フランが手を握ると、壁の一部が爆発した。

レイジ「・・・!」

フラン「そうだ、昨日さ、何もないところから武器出したよね?どうやったの?」

そういえばそうだとレイジは思った。あの時は考える余裕はなくなりあえず有効利用したワケだが、どうしてあんなったのか。ひとまず神機を手にしてみる。刀身は確かに「神斬りクレイモア 真」から「鯨刃ノコギリ 真」に切り替わっている。元の世界では、刀身を変える時はターミナルを使って装備変更の手続きをし、リツカが換装を行ってくれるのだ。だが幻想郷でそんなことは出来ない。どうしようかと考えながら、ダメ元で刀身が変わるよう念じてみた。自分でも何をやってるんだろうと溜息をつく。するとフランが喜んだ表情をしている。

フラン「わーすごい！なんか変わったー！」

刀身を見てみると、今度は「鬼斬りクレイモア 絶」に変わっていた。

フラン「今のどうやったの！？・・・え、ダメ元で念じてみたら出来た？すごい！レイジは多分「装備を自由に換装出来る程度の能力」があるんだね！」

フランは手品を見ているかのように大喜びしている。レイジはフランの言葉を聞いて、ある場面を思い出す。地霊殿で妖精に襲われた後のことだ。

・・・どこから強化パーツを取り出したのか？

本来は強化パーツもターミナルを利用して手続きしリツカにつけてもらう。地霊殿にいた時すでにこの能力が発現していたのだろうか。とりあえず悪い面はなさそうなので、今後は有効利用できそうだ。

フラン「ねね、話を戻すけど、さっき言ってたアラガミってのが来たらさ、そいつらと一緒に遊ば！」

フランの能力は一見すれば心強い戦力になるだろう。しかしそれがアラガミに効くかどうかはまだわからないし、幻想郷の住民を戦いに巻き込みたくはない。レイジはダメだと首を横に振った。

フラン「え〜いいじゃん」

レイジは頑なに首を横に振る。この地下なら比較的安全だろう。アラガミが襲って来たらここにいるようにフランに言い付ける。フランは不満そうな表情をする。

フラン「レイジ、私言つたよね？一人はいやだって……。私、レイジともっと遊びたいの、ねえいいでしょ？」

それでは理由にならないとフランの要求を拒否する。フランは頬を膨らませる。

フラン「うー、けちー」

すると突然、ドーンと音が鳴り、部屋が振動する。もしかしたらアラガミが来たかもしれない。レイジは地上階に出ようと部屋のドアを握る。フランは懲りもせずついて来ようとするのでここに残っているよう再度言い付ける。

フランは不満げな顔でレイジを見送った。・・・しかし、

フラン「・・・もう出てもいいかな。ウッフ、レイジと一緒に怪物退治・・・楽しそー」

フランは間を置いて地上へ向かった。

魔理沙達はレイジ達の様子を確認した後、地上階に上り朝食の準備をしていた。その途中で激しい音と振動が響く。只事ではないとすぐに理解した。

魔理沙「来やがったか・・・霊夢の予想的中率には脱帽だぜ」

サヤカ「今アラガミと戦えるのは二人だけ・・・。レイジさんを起こしに行きたいですが余裕がありませんね。早急に撃破しましょう」

一方、レンとアーティは寝ずに見張りをしたのが裏目に出たのか、朝になるころには二人とも眠ってしまっていた。レンは窓にもたれ

て座っており、アーティは立ったまま腕を組み壁にもたれて眠っていた。

レン「zzzz・・・」

アーティ「zzzz・・・」

ドーン！

レン「・・・ん（ガチャッ）わあああああ！」

アーティ「zzzz・・・」

揺れが起こったと直後にレンが目を覚ました。しかし振動によって窓が開いてしまい、レンは落ちそうになる。なんとか手で踏ん張り、現在は頭が下を向いている状態だ。鉄棒で例えるなら、足と手を鉄棒に引っ掛け、ブランとなっているような感じだ。

レン「あ、アーティさん！助けてくださいーい！」

アーティ「zzzz・・・」

起きなさそうなので、大きな声で呼ぶ。

レン「アーティさーん！た・す・け・てええええええ！」

アーティ「・・・ああ？#・・・誰よ朝っぱらからうるさいわね・・・
ぶっはwww」

レン「は、早く助けてください！」

アーティ「wwwダサッwwwダサすぎwww」

レン「お願いですから早くうつー！」

アーティ「え、このくらいの高さなら飛び降りれるでしょ。原作
OPでゾーマがやってたじゃない」

レン「あなたは何を言っているんだ」

アーティ「とにかく引き上げればいいんでしょ、よいしょ」

レン「ふう・・・助かりました、ありがとうございます」

アーティ「ん・・・何かしらあれ」

レン「アラガミ・・・！？あんなの見たことがないですよ・・・」

アーティ「・・・ざっと四体ね。早いとこ門番とサヤ力達を助けま
しょ」

魔理沙とサヤ力は屋敷の外に出て、激しく争う様子が伺える門に向

かった。美鈴はかなり苦戦している。

美鈴「あ、やっと来てくれましたか！気をつけてください、今までよりも強力です！」

サヤカ「ど、どの個体も見なかった・・・！完全なアンノウンです！」

魔理沙「なんてこった、サヤカも知らないアラガミたあ骨が折れそうだぜ。よしなんかテンション上がってきたあ！」

サヤカ「ハメを外さないでくださいよ！」

美鈴に加勢し、サヤカと魔理沙も攻撃を開始する。サヤカも見たとがなない四体のアンノウン。うち三体は右腕が銃砲になっており、左腕には鋭い爪を持つヤクシャ。残りの一体はヤクシャより一回り大きく、ヤクシャに鋭い爪がある腕をもう二本付け足したような風貌のアラガミ。ヤクシャのリーダー的存在のヤクシャ・ラージャだ。非常に統率力が高く、連携してサヤカ達を射撃して攻撃する。三対四なので、劣勢からのスタートとなった。遅れてレンとアーティが屋敷の外に出る。

レン「三対四ですね。僕達に加勢すれば少しは有利になるでしょう」
アーティ「門の周辺は木が多くて意外と狭いわね。私達は後方から援護した方がいいかも」

レンとアーティも銃形態でサヤカ達を援護する。これで五体四のはずなのだが、なかなか優勢に回ることが出来ない。少しずつ押され、門の中に入られてしまった。

サヤカ「まずいですね・・・こちらが押されてます」

魔理沙「弾幕を張っても肩についてるヤツで防がれちまうな・・・
スペルカードは元々殺傷力低いし」

ヤクシャとヤクシャ・ラージャの肩には、侍の鎧の一部がくっついたような部位、肩鎧がある。この部位で魔理沙の攻撃はほぼシャットアウトされてしまう。スペルカードは元々争い事なるべく穏便に解決するために作られたものなので殺傷力は決して高くなく、アラガミに通用するようになったとはいえ堅い部位にはほぼ効果はない。美鈴はスペルカードをアラガミに通用するようになっていないので完全に足手纏い状態。よって、サヤカ、レン、アーティしか攻撃が上手く通っていない。戦っているうちにヤクシャ・ラージャはレンとアーティの援護射撃に気付いたのか、ヤクシャ一体を向かわせた。

サヤカ「しまった！紅魔館が！」

魔理沙「くっそ、手が離せねえ！このままじゃ・・・！」

アーティ「やっとこっちに来たわね、私としては好都合だわ」

レン「紅魔館は何としても守らなければなりません。確実に仕留めましょう」

アーティは剣形態に変え、ヤクシャが接近するのに合わせて構える。すると二人の頭上から突如誰かが飛び出し、ヤクシャを真つ二つにする。よく見るとレイジの姿が。

アーティ「ちょっとレイジ！勝手にあたしの出番持つてくんじゃないわよ！」

レン「ジャンプしながらのチャージクラッシュですか、上手いですね」

アーティ「・・・チツ、真打登場となっちゃあたし達はまた後方支援ね」

サヤカ「あ、レイジさん！すみませんが手伝ってもらえませんか！」

レイジはすぐにサヤカ達の元に駆けつけ、援護する。レイジの加勢により、少しずつ押し返し始めた。その頃フランは玄関を出てレイジ達の様子を見ていた。

フラン「日傘持ってきてよかった　ウッフ、皆びっくりするかな？」

フランもさりげなく戦場に飛び込み、戦い始める。

魔理沙「おお、フランじゃないk・・・っておいしいiiiiii!?!?ここは危険だ!今すぐ離れろ!」

美鈴「妹様!お下がりください!」

フラン「やだ。私はレイジと一緒に遊ぶの!」

魔理沙「こんな時にレイジに弾幕勝負仕掛けんなよ!」

フラン「違うよ、レイジと一緒にこいつらと遊ぶの」

魔理沙「援護頼むぜ」

美鈴「切り替えはやッ!!」

レイジは溜息をつく。あれだけ言うておいたのに来るなんて・・・。困った表情をしているのに気が付いたのか、フランは日傘を持っていない腕をヤクシャに向けて伸ばした。

フラン「レイジ、私もこいつらと遊べるってこと、証明してあげるよ・・・きゅっとしてドカーン!」

フランが手を握ると、ヤクシャがドパーンと破裂した。

レイジ「・・・!?!」

フラン「それもういっちょ!ドカーン!」

残ったヤクシャも破裂し、粉々になってしまった。これではヤクシャ・ラージャ一体のみ。しかし全員一瞬の出来事に啞然としている。

フラン「どお?」

レイジ「・・・(。D)」

サヤカ「・・・(。D)」

美鈴「・・・(。D)」

レン「・・・(。D)」

アーティ「・・・(。D)」

魔理沙「・・・(´、`)」

ヤクシャ・ラージャ「・・・(。D)」

ヤクシャ・ラージャは状況が悪いと判断し、一目散に逃げ出した。

すると突然目の前で爆発が。

美鈴「今のも妹様ですか？」

フラン「いや違うよ？」

魔理沙「あ、あいつだ」

上を見ると、レミリアが日傘を持ってグングニルを持っている。さ
っきの爆発はグングニルが刺さった時のものだろう。

レミリア「紅魔館の敷居を跨いでいいのは、私が認めた者だけ・・・
。何も知らずに迷い込んだ愚かなアラガミ・・・あなたはここで永
遠に眠る運命よ」

魔理沙「わお厨二くせっ」

フラン「お姉さまとも一緒に遊べるね、レイジ！」

レイジ「・・・」

レミリア「フラン、ここは危ないから屋敷に戻ってなs」

フラン「お姉さままでそんなこと言っの？やだね！」

魔理沙「大丈夫だレミリア、実際こいつのおかげで大分片付いたよ
うなもんだからな」

レミリア「・・・はあ。勝手にしなさい」

レミリアも加勢し、まさにフルボツコ状態。卑怯に見えるが、生かしたら今後の障害になるだろう。あつという間にヤクシヤ・ラーヂヤを追い詰める。止めを刺そうとレイジは神機を捕喰形態にし、喰らおうとする。しかしまだ動く力が残っているのか、かわされてしまった。フランはレイジの神機を見てあることを思いつく。

フラン「（そういえばレイジの武器、自在に換装出来ていたから・・・もしかしたら！）レイジ、これ食べさせてみて！」

フランはスペルカードをレイジに向かって投げた。神機はまだ捕喰形態から剣形態に戻っていない時だったので、勝手に喰らってしまった。

レイジ「!？」

神機は剣形態に戻り、バーストする。すると刀身がフランの使っていた禁忌「レーヴァテイン」と同じものになっていた。長さとおさもバスターと同程度だ。

フラン「やったー！大成功ー！」

サヤカ「えっ!?!これは・・・」

魔理沙「フ란のレヴァ剣がレイジの武器になったぜ・・・」

レミリア「皆何をしてるの、早く止めを刺すわよ!」

レミリアは一人戦いながらこちらに向かって声を張り上げる。レイジは急いで向かい、剣を振り下ろす。またしてもかわされてしまったが、地面に剣が当たると大きく陥没し、爆発が起きた。かなりの威力を持っているようだ。

レミリアは驚いているがあまり気にしないことにし、敵の足をグングニルで斬り転ばせる。今度は外すまいとレイジはチャージクラッシュの構えをする。フ란は面白がってレイジの真似をする。

フ란「お姉さま、離れてて」

レミリア「紅魔館を壊さないでよ」

溜めが完了すると、レイジの刀身は異様なほど伸びていた。普通のチャージクラッシュでもリーチが長くなるのだが、それとは比にならないほどだ。二人で縦に振るとまたかわされるかもしれないので、フ란に横に振るよう伝える。

フ란「わかった!いくよー、せーのっ!」

フ란はレイジに当たらないよう少し飛んでから横に振る。レイジ

は真つ二つにせんとばかりに思い切り縦に振り下ろす。どちらの攻撃も命中し、大爆発を起こす。ヤクシャ・ラージャは跡形もなく消し飛んだ。

魔理沙「・・・パねエな」

美鈴「ああ・・・庭の手入れまだ終わってないのにさらに大変なことに・・・（泣）」

サヤカ「・・・（。D）」

レン「・・・（。D）」

アーティ「・・・（「ー」＝3）」

全てのアラガミを殲滅。フランは満足そうな顔をしている。神機をしまおうとすると、まだ刀身がレーヴァテインのままであることに気付く。

フラン「もしかして、もうレイジの武器の一つになったのかもね。そうだとしたら・・・「技を取り込む程度の能力」ってとこかな？」

試しに別の刀身に切り替えた後、もう一度レーヴァテインに変わるよう念じてみる。するとちゃんと念じた通りになった。フランの言葉の通りなら幻想郷内で喰らった全てのアラガミの攻撃が使えることになる。しかし何回か試してみた結果、今のところ取り込んだの

は禁忌「レーヴァテイン」だけのようだ。レイジはスペルカードを喰われて問題ないか訊くが、予備がたくさんあるらしくフランはそこの中一枚を見せた。とりあえず一安心する。そう思ったのも束の間、レミリアがレイジの背中をポンと叩く。

レミリア「レイジ、あれを見なさい」

レイジ「？」

レミリアが指さした方向を見ると、玄関のドアが見事に木端微塵になっていた。レイジはチャージクラッシュをした時、ヤクシャ・ラージャどころか玄関のドアまで吹っ飛ばしてしまったのだ。

レミリア「あの攻撃からして縦に振ったあなたのせいね。元通りにしなさい。それまでご飯抜きだから」

レイジ「・・・org」

皆の視線を浴びながら一人落ち込むレイジであった。

Mission 12 めざめるパワー（後書き）

弟「原作にもレヴァ剣あったな」

作「確か「レヴァテイン B」とか「レヴァテイン EB」だったな」

弟「紛らわしいな」

作「この小説内ではこの二つは出ません。今後この小説内でのレヴァテインはフランのスペカを指します。期待されていた方、ごペんなさい」

弟「こいつバスターしか使わねエからな……。」

紛らわしいでしょうが、ご了承ください。

Mission 13 カリスマ（前書き）

皆さん、おはこんばちは。winingです。今回は束の間の平和？な一日です。それではどうぞ。

Mission 13 カリスマ

アラガミを殲滅した後、レイジ以外のメンバーで朝食を取りに食堂に向かった。

レミリア「じゃ、しっかり直しておきなさい」

フラン「終わったらまた遊ばし」

魔理沙「悪いな、先に飯食ってるぜ」

美鈴「今日は朝食は何でしょうかね」

サヤカ「あの、私にも手伝えることがあったら言ってくださいね」

レイジは玄関の修理を任せ一人ぽつんと佇む。

レイジ「・・・（・・ω・・）」

アーティ「あたしの出番勝手に横取りするからバチが当たったのよ」

レン「あ、工具箱が置いてありますよ。これでは材料だけですな」

誰が置いてくれたのだろうか。玄関の近くに工具箱があった。

アーティ「中途半端な心遣いね」

レン「まあまあ、まずは倉庫を探しましょう。木材があるかもしれません」

妖精メイドに訊き、道のりを教えてもらう。周りを見るとメイド達はアラガミに荒らされた部屋を綺麗にすることで忙しそうだ。三人は倉庫に向かい材料になりそうなものを探す。

レン「まず木材から探さないといけませんね」

アーティ「お、これよさそう」

レン「意外にたくさんありますね、ありがたく使わせてもらいましたよ」

神機使い物色中・・・

アーティ「とりあえずこれくらいありや大丈夫でしょ。じゃあんたらはその木材、あたしはドアに付ける器具とか定規とか、道具系を持ってくるわ」

レン「うつ、中々重い・・・レイジさん意外に力強いんですね・・・表情が歪んでいない・・・」

レイジ「・・・」

アーティ「伊達にバスター使ってるワケじゃないのよレイジは。あんたも見習いなさい」

レン「・・・はい」

レイジ達は玄関まで重い材料を運び、一息つく。レイジはすぐに製作に入る。理由は他でもない、朝食と呼べる時間までには食べておきたいからだ。

レン「すごく慣れた手つきですね……。以前作ったことがあるんですか？」

レイジ「・・・（コク）」

アーティ「こいつ手先は器用だからね、それに昔ドアの修理の手伝いをしたことがあるそうよ」

レン「へえ、これなら早めに終わりそうですね」

30分経過、本来ならば朝食を終えているはずの時間。レイジは一人で骨組みを完成させ、残るは内側を埋める木材をはめ込むだけ。その頃には朝食を食べ終えたフランがドアの修理をじっと見ていた。サヤカも来ており、レイジの慣れた手つきに驚いている。

サヤカ「すごいです・・・まだ朝食を終えたばかりの時間でこれだけの大きさのものなのに、もうここまで進んでるなんて」

フラン「レイジー、まだ終わらないの？」

レイジ「・・・（コク）」

フラン「はーやーくー」

かがんで作業をするレイジの背中にフランは飛びつく。背中が重たくなるだけで腕の動きが制限されることはなかった。ドアが完成、後は蝶番などの器具を取り付け、玄関に取り付けるのみ。ドアを持ち、立てようと立ち上がる。フランは退屈なのか、羽根をぱたぱたと動かしていた。

フラン「まーだー？」

もうすぐ終わるので、確実に作業をこなすことに専念する。すると足に妙な感覚がした。歩こうとしてもその場から進まない。下を見ると、なんと足が床から少し浮いていた。恐らくフランが羽根を動かしているためだろう。レイジは微笑でやれやれと思いつつ、フランに降ろすように言う。

フラン「玄関は結構高さがあるから私があなたを抱えながら飛ぶよ。そうしながら作業した方が楽だと思うよ？」

確かにドアの大きさを改めて見ると結構な大きさだ。これでは蝶番を付ける時に手が届かなくなるが脚立でも持つて来れば大丈夫だと考えていた。しかしそれが近くにない。よってフランの提案に乗ることにした。すると脚立を使うよりもかなり楽で思ったより早くドアの取り付けが終わった。

アーティ「乙」

フラン「わー、なんか壊れる前より綺麗な気がするよ！」

サヤカ「いいコンビネーションでしたね、レイジさん！」

完成して喜んでいるレイジ達を影からこっそりレミリアが覗いていた。

レミリア「（・・・あいつの背負い投げの仕返しに玄関の修理押し付けたのに、なんでフランが楽しそうに手伝ってんのよ・・・！どおりで朝食の時いつもより明るい顔してたわけね・・・なんか妹を取られた気分だわ・・・）」

咲夜「お嬢様がコンプレックスをお持ちになるとは珍しいですn」

レミリア「違うわよ！断じてそんな気持ちなんかない！ってゆーかいつの間にいたの！？なんで考えてることが分かったの！？」

咲夜「顔に全て出ておりましたわ」

レミリア「うゝ・・・」

咲夜「では彼の分の朝食の用意をしますので、失礼致します」

そう言うとき咲夜は一瞬で姿を消した。

レイジは存分に朝食を楽しみ、息抜きに紅魔館内を探検しようと思
い、図書館へ行ってみることにした。道中、フランにばったり会う。

フラン「あ、レイジを探してたんだよ？ねえねえ、かくれんぼしよ
う！」

たまには何も考えず遊ぶのもいいだろう。レイジはうなずき、フラ
ンの誘いに乗る。

フラン「じゃあレイジが隠れて！私鬼やるから！30秒数えるから
その間に隠れてよ！」

レミリア「・・・・・・・・」

紅魔館内でかくれんぼだと、探す側としてはかなり大変になりそう
だ。レイジはひとまず図書館に向かい複雑に並ぶ本棚に隠れること

にした。

パチュリー「……あまり暴れ回らないでよ」

魔理沙「あいつはそんなことしねーだろ」

パチュリー「彼からは」、ね」

魔理沙「……どういう意味だ？」

パチュリー「……すぐに解るわ」

まるでこちらのやっていることを理解しているかのように本を読みながら注意を呼びかけるパチュリー。確かにここの本棚は異様に高さがある。倒したらドミノ倒しになって大参事になりそうだ。そういうワケで足音を立てずに動こうと考えた。図書館の中では静かにしているべきだし、こうすればフランにも気付かれにくくなるだろう。しばらくそのまま本棚で身を隠しつつフランが近づいていないか耳を澄ませる。意外にも中々やって来る気配がない。少し暇になってきて、近くにあった本を読んでみることにした。しかし内容が難しく興味も湧かなかったためすぐ棚に戻ってしまった。中々見つからないなと思いながら振り返ると、なんとフランが背を向けて本を読んでいる姿が。

レイジ「……!?!」

レイジの後ろでずっと本を読んでいたようだ。レイジは一瞬驚くが、まだこちらに気付いていないようなのでこっそりとその場を離れる。図書館は広く隠れる所が多いので少し離れれば大丈夫だろう。しかし行く先々でフランの姿が。どうやら禁忌「フォー・オブ・アカインド」を使っているようだ。しかしそうだとしてもおかしい。レイジが行こうとする場所にフランがいるのだ。もしかしたら・・・

既に見つかって、遊ばれている・・・！？

気付いた時にはもう遅かった。四人のフランはすでにレイジを囲んでおり、不敵な笑みを浮かべてこちらを向く。

フラン「ここ、広いから隠れやすいと思ってたでしょ・・・？でも残念。大体の人はここに隠れるからね。早く見つけられてよかったよ」

本棚に隠れた頃から既にバレていたらしい。囲まれているため、引き付けてすり抜けるように脱出するしかないだろう。フラン達はじりじりと近寄り、一斉にレイジを捕らえようと飛び込む。レイジはフランの下をくぐり抜け全力で走る。

フラン「まってー！」

図書館を抜け、階段を利用したり曲がり角を利用するなどなるべく見通しの良い場所を避けて通る。フランも人数の差を利用し回り込んでレイジを追い詰めようとする。静寂なかくれんぼから一転して

白熱した鬼ごっこ。それを見ていた皆も温かい目で見守る。一人を除いて。

廊下

サヤカ「あ、楽しそう・・・私も混ぜろっかな」

図書館

パチュリー「ゲホゲホ、喘息が・・・こあ、吸入器頂戴」

小悪魔「どうぞ」

魔理沙「隙があつたらどっちかに訊いて混ぜてもらおうかな」

紅魔館の門

美鈴「あ、妹様じゃないでうわっ!？」

フラン「ねえ、レイジ見なかった？」

美鈴「鬼ごっこですか？私は見ていませんよ」

フラン「ありがと、じゃ!」

美鈴「・・・これでいいんですか？」

レイジ「・・・Σb(・ω・)」

洗濯室

咲夜「あら、妹様。どうなさいましたか？」

フラン「洗濯中にごめんね、レイジどこか知らない？」

咲夜「いえ、私は見ておりませんが」

フラン「わかった、ありがとう！」

咲夜「・・・あんなに明るい顔をされた妹様は初めて見るわね・・・
まあ、いいことに変わりないけど」

エントランス

アーティ「さつきから何してんのかね、あいつそこらじゅう駆け回
って。家の中で暴れ回っちゃいけないって教わらなかったのかしら」

レン「いいじゃないですか。二人とも楽しそうですし、許してあげ
ましょうよ」

アーティ「・・・まあ、こういう時間也需要よね」

レン「見ているだけでも、平和な気持ちになれますね・・・ん」

アーティは暗い表情をしている。気になって声をかけようとする、
アーティは小声でつぶやく。

アーティ「・・・追い掛け回されるのは・・・嫌ね」

レン「・・・？」

アーティ「・・・何でもない」

レン「???」

するとレミリアがレン達の近くで誰かを待っているように立っているのが見えた。

レミリア「・・・」

レン「ん・・・?どうしたんでしょうか」

アーティ「あ?・・・レミリアのヤツ、なんか難しい顔してるわね」

一方レイジはフランをなんとか振り切り、息を整えながら歩いていた。曲がり角を曲がり、レン達がいた場所に着く。

レミリア「・・・!」

レイジは前後を確認しながらレミリアの横を通り過ぎようとする
突然、レミリアがレイジの手を掴んだ。

レミリア「待って」

レイジ「？」

レミリア「来なさい」

レイジ「????」

アーティ「・・・なんか変な予感がするわ」

レン「後を追ってみますか？」

無理矢理レミリアに手を引かれ、階段を上り三階の広い部屋に連れられる。中は何だか厳かな雰囲気放つ部屋だ。部屋の中に階段があり、その先に玉座らしき椅子がある。絵に描いたような「主の間」という感じだ。レミリアは椅子に座る。レイジは息を整えようと深呼吸をし、フランが来ないかドアを注視。レイジはレミリアが安全地帯へ連れてってくれたと思っている。しかしレミリアが意図していたのはそれではない。後から遅れてレンとアーティが部屋に入ってきた。

レミリア「フランの遊び相手をしてくれたようね。お疲れ様。あなた、夜になるまでやってたのよ？気付いてた？」

レイジは窓の外を見る。確かに夜になっていた。今日は満月のようだ。

レミリア「さて、突然だけど、もうフランとのかくれんぼはもうおしまい。今度は私と遊んでもらうわよ」

レイジ「・・・？」

レミリア「何故かって？あの子にあまり親しくなり過ぎるとあなた、
・・・いつか突然壊れるかもしれないからよ」

レイジは意味が理解出来なかった。確かに初めて会った時のフランは少し気が触れているところがあり壊される危険があった。しかし今は自分を気に入り、普通に遊ぼうとしている。壊すつもりなど微塵もないはずだ。仲がいい者ならば特に。

レミリア「あの子の能力、もう見たでしょ？あなたには実感がないかもしれないけど、あの子は壊すつもりがなくても間違つて壊してしまう時があるの。つまり能力を完全に制御出来ない。もし壊れたのが大切な人であるほど・・・。あの子は、心を痛めると思うわ」

レイジ「・・・」

レミリア「そんなことにならないように、私はずっとあの子を地下

に閉じ込めていた。自分でも最低なことだと思ってるわ……。でも大事な人を失う悲しみであの子の心が壊れないようにするには、こうするしかなかったのよ」

レイジ「……」

レミリア「なんとかしなければと思っていた……。地下に閉じ込めるままにはいかない。あのままでは遅かれ早かれ、別の苦しみでフランの心は壊れてしまうよね……。そこにあなたが現れ、フランを解放してくれた。……。あの子は嬉しかっただろうし、私としても嬉しかったわ。壊れずに傍にいてくれて……。薄暗い地下から与えられる苦痛からあの子を救ってくれて……。礼を言うわ」

レイジ「……」

レミリア「あなたはフランにとって、光のような存在でしょうね。……。でもあの子のためにも、あなたのためにも、これ以上絆を深められては困るワケ。あなたを失った時の悲しみが大きくなってしまいうから。あの子にはこれ以上、大切な人を失う悲しみを味わわせたくないの」

レイジ「……？」

レミリア「親しければ親しいほど失った時の悲しみは大きくなる。ならばいつそ親しくしない方が、あなたは壊れないしあの子も傷つけないわ」

レイジ「……」

レミリア「さて、話題を変えて私との遊びについてだけど……」

私は屈辱を忘れない女。あの時は昼だったから背負い投げ一回だけで降参してしまったけど、だからと言って失態を晒したままでは私のプライドが許さないの」

レイジ「・・・」

アーティ「・・・何も今じゃなくなつてねえ」

レミリア「レイジ、あなたに決闘を申し込むわ。私のカリスマを取り戻す意味でもね」

アーティ「おまえは何を言っているんだ」

レイジは渋々レミリアの申し出に乗ることにした。断る余地がなさそうだからだ。しかし申し出ののタイミング的に、単にフランと遊んでいるのを羨ましがっているようにも見えた。

レミリア「勘違いしないでよね。別にあなたとフランが遊んでるのを見て羨ましいと思ったワケじゃないんだから！」

アーティ「本音が出たわね」

レン「本音が出ましたね」

レイジ「・・・」

姉妹揃って不器用なところがあるようだ。レミリアがスペルカード

を手にしたその時、

フラン「レイジ、ここかつ!？」

レミリア「フラン!？」

フランが突然ドアを開け、中に入ってきた。レミリアとしては最悪のタイミングといえる。

フラン「ウッフ、もう逃がさないよレイジ・・・あれ、お姉さま？」

レミリア「何？今私はレイジと遊んでるんだけど。邪魔しないでくれる？」

レイジ「・・・」

フラン「あゝ！横取りなんてずるゝい！レイジもレイジで勝手に誘いに乗っちゃダメだよ!！」

レミリア「フラン、今は決闘中なの。邪魔しないで」

アーティ「まだ始まってすらいないじゃない」

フラン「やだね！レイジは私のお気に入りなの！お姉さまなんて渡さないもんね!！」

フランはレイジの腕に抱きつき、ベーツと舌を出す。レミリアは段々冷静さを失っていく。

レミリア「・・・うゝ・・・！ちょっと！レイジはあなたと出会う前から私のお気に入りだったのよ！そっちこそ横取りしないで！」

レミリアとフランの間で口論が始まった。しかしどう見ても子どものケンカにしか見えない。

レン「すごく・・・可愛いです・・・」

アーティ「姉の方もなんだかってお子ちゃまね。カリスマもへったくれもないわ」

レミリアとフランは腕で押し合いをしている。レイジはやれやれと微笑を浮かべながら溜息をする。二人を呼び止め、彼は一つ提案を持ちかけた。

レミリア・フラン「・・・え？」

その提案はなんと、レミリアと決闘をしながらフランとの鬼ごっこも同時にやる、というものだった。吸血鬼姉妹二人は目が点になっている。

フラン「え・・・、お姉さまと決闘しながら私と鬼ごっこ？」

レイジ「・・・（コク）」

レミリアはレイジの言った意味を理解すると、高笑いをし出した。
カリスマというもののためだろうか。

レミリア「あっはははははは・・・！何それ？最早決闘じゃないじゃない！あははははは・・・！気に入ったわ。流石は私のお気に入り人間ね」

フラン「うー、レイジは私のお気に入りなの！でも・・・面白そうだね」

レン「二人を同時につて・・・大丈夫なんですか！？レイジさん！」

レミリアは空中に浮かび上がり、フランはレイジに今にも飛び掛かろうとしている。

レミリア「忘れていない？夜は私達吸血鬼の時間よ。この時点であなただの勝つ確率は低くなっている・・・」

フラン「そ。それでも」「私達は手加減なんてしないよ？」「」

ふと横を見ると、三人のフランの分身が部屋に入って来ており、口を揃えていた。

レミリア「あなたにとって限りなく無謀といえる提案にわざわざ乗ってあげたのよ？精々楽しませて頂戴」

フラン「ウフフ、私達に勝ったら、コインいっこ！」

レイジ「・・・」

レミリア「・・・今日はいい十五夜ね。本気で遊ぶわよ」

レミリア

フラン

「こんなにも月が紅いから」

レミリア

「楽しい夜になりそうね」

フラン

レイジ「・・・」

レイジはスツと身構えながらつぶやく。

レイジ「・・・こんなに月が紅いのに、永い夜になりそうだ」

Mission 13 カリスマ（後書き）

作「やってしまった・・・」

弟「何を」

作「意図していないところで喋らせちゃった・・・」

弟「・・・ハア。どーすんだよ。原作だと悲鳴と逃げるなしか喋らないほどの無口っぷりなのに、このままじゃキャラ崩壊だぞ」

作「・・・でもまあ無意識だ」言うと思ったよ」

作「（・・・ω・・・）」

Mission 14 ゴールデンエイジ（前書き）

皆さん、おはこんばんは。wingです。いつもより遅くなっていますが、もうちょっと早くできればいいのですが・
・。では、本編どうぞ。

Mission 14 ゴールデンエイジ

フラン「じゃ、一番乗りイ！」

フラン達は一齐にレイジを捕まえようと飛び出した。押し倒す勢いで捕まえたいのか、必ず飛び込んで来る。フランはあまり戦略的に考えてはいないようだ。ただ遊ぶことを楽しんでいる。

フラン「お姉さまに勝ったら、私も負けを認めてあげる。でもそう簡単にいくかな？」

レミリア「さて、そろそろ私も動くわね。実質5対1だけど容赦はしない」

レイジはいつでも来いと言わんばかりにレミリアに視線を向ける。

レミリア「ふ・・・じゃあ始める前に一つ言っておくわね」

レミリアは大きく深呼吸をする。その後レイジに向かって声を張り上げた。

レミリア「ぎゃおー！たーべちやうぞー！」

レイジ「……」

フラン「……」

レン「……」

アーティ「……」

ギャグのつもりだったのか、驚かすつもりだったのかわからないが、明らかに緊張感が緩んでしまう一言だった。あまりの白けっぷりにレミリアは困惑した。

レミリア「……ちょっと！少しは驚きなさい！驚けないなら反応しなさい！」

レイジ「……」

アーティ「……ここ冷房効きすぎじゃない？」

レン「同感ですが、ここに冷房はないみたいですよ……」

フラン「……お姉さま、もうそれやめよ？誰もウケる奴なんていないよ」

レミリア「……。うゝ……！」

思いっきりスベリ、レミリアは顔を赤くする。

レミリア「レイジ！特にあなたよ！リアクションを期待してたのに、逆に恥をかかせるなんて！」

早速冷静さを失ってしまったレミリア。

フラン「お姉さま、そんなことで怒っちゃダメでしょ。仮にもこの主なんだから」

レミリア「・・・そうね。ありがと、少し落ち着いたわ」

レミリアは一旦深呼吸した後、フランの飛びつきを避け続けるレイジに向きなおす。

レミリア「いきなり取り乱して悪かったわね。仕切り直しよ」

弾幕を展開し、レイジを攻撃する。前後左右どこからも気をつけなければならぬ状況だ。しかし弾幕は上手く利用すればフランの動きに制限がかかる。フランは弾幕が少し邪魔そうだ。

フラン「お姉さま、その弾幕邪魔！」

レミリア「文句ならレイジに言いなさい」

フラン「うっ……弾幕が邪魔で上手く追いかけれない……」

レイジは弾幕を上手く利用し、フランの動きに制限をかけ続ける。
レミリアに対しては、こちらに近接戦を仕掛けるまで回避に徹する。

レミリア「あの時もそうだったけど、あなた本当に危ない避け方してるのね。カッコつけてるつもりかしら？」

レイジは首を横に振る。フランはレミリアの弾幕にイライラしている。

フラン「お姉さま、これ以上邪魔するならドカンするよ!」

レミリア「仕方ないでしょ、弾幕だもの」

フラン「あーもう、邪魔だなあ……ドカーン!」

フランは自分とレイジの周辺を飛んでいる弾を打ち消し始めた。残りの分身達でレイジを捕らえようと迫る。レイジはフランの分身達の突進を避け、必要な時は投げ飛ばし、捕まるまいと奮闘する。

レミリア「……弾幕を消されちゃ、近接戦しかないじゃない。まあいいけど」

フランの突進に紛れ込むようにレミリアもレイジに向かっていく。

レミリア「いくわよ」

グングニルを振り回しレイジを攻撃し始めた。レイジはひたすら回避を続ける。

フラン「そこッ！」

背後から抱き着こうとフランが飛び掛かる。レミリアはレイジの真正面にいるため彼はチャンスと思った。二人を引き付けてから一気にしゃがみ回避する。フランは反応しきれずにレミリアの頭に抱きついた。

フラン「捕まえっ・・・あれ？」

レミリア「フラン、何やってるの！私よ！」

フラン「ああ、ごめんごめん（ドンッ）わあ!？」

レミリア「ぶっー！」

レミリアにしがみついたままのフランの背中を押し、二人とも転ばせる。レミリアが下になっていたため、僅かだがダメージを与えた。

フラン「くっ……二人（？）掛かりなのにすごいね、レイジは」

レミリア「……やってくれるわね」

二人は起き上がり、再度レイジに向かって走り出す。いつの間にか立場が逆転しているような気がするが、あまり気にしないことにする。

レミリア「これはどうかしら……？紅符「不夜城レッド」！」

宣言が終わるとレミリアの周囲から赤いオーラが溢れ出した。両腕を広げると十字方向にオーラが伸びていった。

レミリア「^{グングニル}槍がダメなら……」

オーラを纏いレイジに体当たりする。上下左右への範囲が広いため斜め下をすり抜けるようにして避ける。

レミリア「このスペカは体当たりのためだけではないのよ」

そういつとレミリアは腕を前に突き出した。するとオーラも真正面へ伸びていく。

フラン「へえ、そういう使い方もあったんだ」

まだ攻撃が続くとは思わず、レイジは慌てて回避する。腕をかすめ、熱っぽさを感じた。

レミリア「フン、まだよ」

もう一方の腕を薙ぎ払うように動かす。体当たりをかわした後のすれ違いでお互いの距離が少し離れていたため、オーラが迫るスピードはかなり速い。避けようと体を動かす前に攻撃を食らってしまった。

レイジ「ッ・・・！」

レミリア「ようやく一撃……。手こずらせてくれるじゃない」

レミリアが転んで受けたダメージとレイジにオーラが当たったダメージ、量だけならレイジの方が不利だといえる。しかしレイジにとってはまだ余裕の域。これぐらいの痛みなどアラガミとの戦いで慣れているのだ。

フラン「ふう・・・ちょっと疲れてきた・・・」

レミリア「朝からぶっ通しで遊んだものね、無理もないわ。昼食の時間になって呼びに行っても聞く耳持たなかったじゃない。「二人とも」」

レイジ「・・・（´・ω・｀）」

そう言うのと再び体当たり攻撃を仕掛け、避けられたらオーラを鞭のように振るい攻撃する。反撃をしたいところだが周囲を覆うオーラのせいで逆にダメージを受けるかもしれない。迂闊に手が出せない。今出来ることは何か、周囲を見渡す。自分を捕らえようとフランと分身達が群がっている。しか一人だけ息が切れている。先程の会話から本物のフランだろう。これを見てレイジは一つアイディアを思いつく。その後レイジは後ろへほとんど下がり始めた。

レミリア「どんなに距離をとっても意味はない・・・食らいなさい」

レミリアは両腕を交差するように動かし左右からオーラで攻撃をする。レイジはこれを狙っていた。フランの分身は未だ元気に追いかけてきている。フラン本人は疲労で少し距離がある。レイジとフランの分身はレミリアの攻撃範囲内だ。フラン達は気付いていないのか、レイジにしか目が行っていない。

フラン（分身）「壁に追い詰めた、今度こそお！」

分身達は一斉に飛び込む。今だと思い、レイジはスライディングで真下をすり抜ける。分身達は壁にぶつかり痛みがり出す。そこにレミリアの攻撃が。

フラン（分身）「いたた・・・ふぎっ！（ピチューン）」

フラン（分身）「うゝん・・・ぎゃっ！（ピチューン）」

フラン（分身）「・・・あれ、レイジ（ピチューン）」

フラン「ああっ！？分身があ！」

レミリア「なっ！？まさかレイジ、狙ってたわね！？」

味方を攻撃してしまい焦るレミリア。レイジは姿勢を立て直す。

フラン「うー・・・#私を攻撃したらドカンするよ！」

レミリア「気をつけるわ・・・」

レミリアは現在使用しているスペル、紅符「不夜城レッド」を止め、再び神槍「グングニル」に変えることにした。フランは疲労しているため、動きが鈍くなっていた。レイジも朝から動きっぱなしだったため疲労が現れ始める。だがレミリアはまだピンピンしておりグ

ングニルを投げて攻撃してくる。

30分後

レミリア「ふう・・・けっこう長引いてるわね」

フラン「ハー・・・ハー・・・」

レミリア「・・・少し休みなさい。無理をしたら体を壊すわよ」

フラン「う・・・まだ・・・レイジ・・・と・・・遊・・・ぶ（バ
タッ）」

疲労が限界に達し、フランは倒れ込んでしまう。レイジは慌てて駆けつけ様子を見る。

フラン「あはは・・・ごめん・・・もう・・・動けない・・・みたい・・・」

壁にもたれかけさせフランを休ませる。

レミリア「・・・これで1対1・・・か」

レイジ「・・・」

気付けばレミリアはレイジの目の前でグングニルを突き付けていた。

レミリア「・・・驚いた？フランを巻き込むワケにはいかなかったから中々好きに動けなかったの。手加減しないと云っておきながら、実は100%の力を出せていなかった・・・悪かったわね」

レイジ「・・・！」

レミリア「お詫びといっではアレだけど、今度こそ本当に本気の私を見せてあげる」

レイジ「・・・」

レミリア「・・・形から入った方がいいかしらね。ちょっと着替えてくるわ、その間に疲れをとっておきなさい」

形から入る主義なのだろうか、レミリアは服を着替えに一旦部屋の外に出た。レイジはポケットから「レーション」を取り出し飲み込む。これで疲労は回復した。フランにもレーションを渡す。

フラン「なにこれ・・・？え、これ一つで疲れを吹き飛ばすだって？眉唾だなあ・・・（ゴクン）・・・おお・・・なんか元気出てきた！ありがとう！」

レイジ「・・・（ニコ）」

フラン「あれ、お姉さまは？・・・ふーん、着替えに行っただね？
やっぱりお姉さま本気じゃなかったんだね。多分私がいたからかな
あ」

どうしてわかったのか訊いてみる。すると、

フラン「多分お姉さまはカリスマ全盛期の時に着てた服を着てくる
はずだよ。あの頃はカッコよかったなあ・・・今は可愛くなっちゃ
ったけど」

アーティ「全盛期とかあったのね・・・」

レン「その時の服を着てくるとなると、当時の力で攻めて来るかも
しれません。気をつけてください、レイジさん」

程無くしてレミリアが戻ってきた。

レミリア「待たせたわね」

声に反応しレイジはレミリアの方へ向く。今まではピンクがかった
色が主の服だったが、全体的に黒い服装となっておりスカートでは
なくズボン、コートのような上着を着ている。ナイトキャップのよ
うな帽子は被っていない。

レミリア「ふふ、咲夜ったら私がこれに着替えてるところを見て目が点になってたわ。あの顔は傑作ね」

レイジ「・・・」

レミリア「じゃ、場所を移動しましょうか」

レイジ「!？」

いつの間にか目の前にレミリアの姿が。そしてレイジの手を握り、窓を開け紅魔館の屋上へ上って行く。屋上は意外に足場は悪くない。十分に動き回れる。

レミリア「今日は本当にいい夜ね」

レイジ「・・・」

二人は向き合い対峙する。先程までとは違い明らかに当時のものと思われる威厳と風格がレミリアから感じられた。

レミリア「これを着ていた頃の私を皆は「カリスマ全盛期」と言うけれど、カリスマなんてそんなもの出そうと思えばいつでも出せるのよ。ただ本気じゃなかっただけ。それに幻想郷ではそこまで固執する必要もない」

なら、今までのちょっと間の抜けた行動は演技なのだろうか。それについて訊いてみる。

レミリア「いいえ、素よ？私は私、今も昔も変わらないわ。・・・さて、お喋りはここまですて始めてみましょうか。レイジ、その剣を抜きなさい」

神機はどんな相手も切り裂いてしまう。レミリアを、アラガミ以外の生き物を傷つけるわけにはいかない。レイジは神機を抜くのを躊躇っていた。

レミリア「躊躇う発要はないわ。心臓や脳を完全に吹き飛ばされなければ再生出来るから」

レイジ「・・・」

レミリア「抜きなさい。私はそれを使うあなたと遊びたいの」

レイジは未だに神機を手にするのを渋っている。そこにフランが下の階から上ってきた。

フラン「やつほ。応援に来たよ」

レミリア「・・・フラン。もう大丈夫なの？」

フラン「うん。レイジが元気になるものくれたから」

レミリア「そう、よかった」

レイジ「・・・」

レイジは渋々背中に手を伸ばすがまだ抜かないでいる。レンとアーティは庭園に降りてそこから三人を見上げる。

アーティ「あいつ何を躊躇ってんだか・・・地底の時は対人戦で普通に神機使ってたクセに。ホント、ワケのわからないヤツよ」

レン「・・・え、そうだったんですか？僕は見た覚えがないんですけど」

アーティ「・・・」

レン「????」

レミリア「じゃあ、始めましょ。神槍「グングニル」」

レイジ「・・・」

レイジは手は背中の中を握ったまま、若干姿勢を低くする。心の

整理がついたのだろうかとレミリアは様子を見る。

レミリア「・・・いくわよ」

レミリアは一瞬でレイジの目の前に接近し攻撃を仕掛ける。レイジは神機を抜き装甲で防御する。スペルカードがアラガミにも効くようになっていているからか、レミリアの力が上がっているからか、衝撃が大きい。

レミリア「・・・フン」

レイジ「・・・！」

レミリアがぐつと前のめりになるとレイジはどんどん押し返されていった。必死に踏ん張ろうとするも止まらない。遂には走り出されて壁に押さえつけられる。

レイジ「ッ・・・！」

必至に押し返そうと腕に力を籠めるがビクともしない。その時一瞬押さえつけられる力が緩んだ。チャンスだと思った時には弾かれるように後ろに押され壁にぶつかった。

レミリア「力で人間に劣るとでも？くすくすくす・・・」

確かに、力に差があるのは明らかだ。そのかわり知恵で人間はアラガミと戦えるまでに至れた。力でダメなら技で勝負。体勢を戻すと、今度はマシンガンのような速さで突きを連発してきた。避けながら反撃の機会を伺う。目が慣れた頃、ふと足に違和感を覚える。すると屋根の端に追い詰められていることに気付いた。このままでは落ちてしまう。

レミリア「このままだと落ちるわよ？」

わかっていえると言うかのように絶え間なく動くグングニルを掴み、突きの勢いに乗せて屋根から伸びる時計台へ放り投げる。レミリアは吹き飛びながら体勢を戻し、足でぶつかる衝撃を吸収する。

レミリア「今度は遠距離からいくわよ。はあッ！」

グングニルに力を籠めたかと思うと、一気に巨大化、それを振り回して遠くから攻撃してくる。その上レミリアは空中を飛んでおりこちらの反撃手段が少なくなっている。銃撃も考えたが殺傷力があるため使うわけにはいかない。とりあえず神機を捕喰形態に変え、こちらに迫るグングニルを喰らい折る。

レミリア「！？私のグングニルが・・・！？」

レミリアは再びグングニルを出し、こちらを攻撃。バースト状態になったレイジは機敏な動きで楽々とかわす。しかしこれでは攻撃を打ち消しただけで反撃にはならない。そこにフランが助言をする。

フラン「レイジ！レーヴァティンだよ！お姉さまのグングニル槍には私のレーヴァティン剣！
これ大事！」

とりあえずレーヴァティンを使えと言いたいのだろう。破壊力が異様に高いのであまり使いたくなかったが、他に方法も思いつかない。レイジは刀身をレーヴァティンに変える。

レミリア「へえ・・・フランのレーヴァティンを使えるとは中々面白い武器ね。これは楽しめそうだわ」

レミリアは大型グングニルを再び振り始める。レイジも負けじとレーヴァティンを振る。刃が交わると爆発が起き、レミリアの攻撃が弾かれる。

レミリア「くっ・・・！」

今度は突きで攻撃してきた。レイジはジャンプでかわし、グングニルの上に乗る。それを踏み台にしてさらにジャンプしチャージクラ

ツシユの構えをとる。

レミリア「させるか！」

グングニルを投げ、攻撃させまいとする。溜めが完了しリーチが大幅に伸びたレーヴァティンを振り下ろし、グングニルを縦に真つ二つにする。レミリアに迫る途中、レイジは剣の向きを変え面の部分でレミリアを攻撃。当たると爆発が起き、レミリアは屋根に叩き付けられた。陥没しているため、かなりのダメージを与えただろう。

レミリア「ッかはっ！……今のは効いたわ……グングニルを斬られるなんてね……」

笑みを浮かべながら起き上がり、再度グングニルを手にする。先程から何故グングニルしか使わないのか気になり、訊いてみる。

レミリア「確かに他にスペルカードはあるけど、あなたとは、これでやりたいのよ」

そう言うのと再び接近戦を仕掛けてきた。グングニル・ヴァティン 槍と剣が激しく交わり、火花が散り、小さな爆発が起こる。接戦が続く、さらに30分が経とうとしていた。互いに息が切れてきている。

レミリア「ふ．．．やるじゃない。霊夢達相手でもここまでの力は出さなかったわ。本気の私について来れるなんて、大したものね」

レイジ「．．．」

レミリア「次の攻撃に残る力を全て籠めるわ」

レミリアは上空に飛び上がり、グングニルに力を溜める。するとどんどん槍が紅くなっていく。レイジはいつでも攻撃が来てもいいようにチャージクラッシュの構えで待ち構える。レーヴァテインが攻撃が来るのを心待ちにしているかのように燃え盛る。

レミリア「光栄に思いなさい。この私の全力全開の攻撃を受けられるのだから」

溜めが完了しレイジを見据え、渾身の一撃を放つ。

レミリア「この槍を．．．止められるものなら、止めてみるおおおおお！．．．」

圧倒的なスピード、パワー、威圧感と共にグングニルが迫ってくる。思わず装甲を展開いてしまいそうなほどだ。しかし逃げるわけにはいかない。全力には全力で返す。レイジはいつも以上に燃え盛るレーヴァテインを思い切り横に薙ぎ払うように振る。槍と剣がぶつかった衝撃で大きく爆発が起き、レイジは吹き飛び倒れ込む。レミリ

アの方を見ると、なんと彼女の胴体にグングニルが突き刺さっていた。どうやら跳ね返したらしい。

レミリア「がッ．．．！う．．．あッ．．．！」

グングニルが刺さったまま吹き飛び、時計台に釘付けにされる。ガクツと体の力が抜けるとグングニルは消え、まっさかさまに落下。レイジは急いで駆け付け、レミリアを受け止める。刺さったところに傷はないようだ。ケガをしていないことにホッとする。

レミリア「う．．．まさか跳ね返される．．．とはね．．．負けたわ」

レイジ「．．．」

レミリア「．．．ねえ」

レイジ「？」

レミリア「この体勢．．．ちょっと．．．」

レイジ「．．．！」

夢中だったため、お姫様抱っこしていることにようやく気付いたレイジ。二人とも恥ずかしくなり、目を背け顔を赤くする。フランはけらけらと笑いながらその様子を見ていた。

フラン「二人とも、似合ってるよ!」

レミリア「茶化すのはよしなさい・・・／＼／」

レイジ「・・・／＼／」

レイジは一度下ろし、神機をしまってからレミリアを背中におぶった。

レミリア「・・・なんだか、昔を思い出すわね」

レイジ「?」

レミリア「何でも・・・ないわ・・・」

レミリアはゆっくりと目を閉じ、体から力が抜けていった。疲労とダメージが大きかったために気絶したのだろう。レイジも少なからず疲弊しているため、ゆっくりと屋内へと戻っていった。

アーティ「剣で跳ね返すたアやるじゃない、レイジのヤツ」

レン「じゃ、僕達も戻りましょうか」

アーティ「そうね、今日はガッツリ寝るとしようかな」

レン「・・・！」

アーティ「・・・どうしたの」

レン「気のせいかな・・・」

アーティ「？」

Mission 14 ゴールデンエイジ（後書き）

作「全盛期・・・か」

弟「おぜうの全盛期・・・あんま想像つかんな」

作「俺はとりあえずカリスマに溢れカッコよかったと解釈する」

弟「その頃のおぜうを見てみたいな」

作「ならばフランちゃんも・・・ウフフ」

弟「・・・変な想像してんじゃねェだろうな」

Mission 15 ゴールデンタイム（前書き）

皆さん、おはこんばちは、wingです。もう9月なんですね・・・
時が過ぎるのは早いものです。では本編でござ。

Mission 15 ゴールデンタイム

レイジとスカーレット姉妹が遊んで(?)いる頃――

サヤカ「(もう夜かぁ・・・とはいっても何もやることないし、図書館にでも行ってみようかな)」

レイジとフランに自分も混ぜてもらおうとするも中々タイミングが掴めない上にフランは夢中で、レイジは必死になっているため、完全に存在を認識されていなかった。

サヤカ「(結局鬼ごっこに入れてもらえなかったけど、あの時のレイジさんの必死な顔・・・ww)」

サヤカ「(そういえばここでも・・・戦ってばかりだなあ・・・元々ここは平和な場所のはずなのに)」

溜息を吐き、段々平和という言葉の意味を間違って解釈しているような気がする。

サヤカ「(ああダメだダメだ・・・ネガティブになっちゃいけない・・・)」

沈んだ気分になっても何も解決しないと思い、とりあえず今後の行動について考えることにした。まずは今までの状況を整理する。

- ・アラガミの攻撃で気を失う時までは贖罪の街にいた

- ・目が覚めたら幻想郷という異世界に迷い込んでおり永遠亭の病室で寝ていた。近くにレイジはいなかった

- ・新聞でレイジは地底にいたことを確認、そこでアラガミ襲撃が起きていた

- ・程無くして永遠亭もアラガミに襲われるが、撃破

- ・竹林を抜け博霊神社へ。霊夢、魔理沙と出会い、行動を共にする。霊夢、魔理沙のスペルカード強化

- ・地底を調べに行こうとしたが紅魔館の庭がえらいことになっていたので様子を見に進路変更

- ・紅魔館内でレイジと合流。情報整理。その後霊夢は地底を調査しに外出、レミリアはスペルカードの強化のために永遠亭へ

- ・次の日の朝、未確認アラガミが紅魔館を再び襲う。途中でレミリアが帰還、フランとレイジの活躍により撃破。しかしレイジが玄関も破壊したためレミリアが彼に修理をさせる

- ・玄関修復後、レイジとフランが昼食を忘れて遊びまくる

- ・夜になってから急に二人の姿が見当たらなくなり、静寂が訪れる。

休憩か？

最後辺りははどうでもいい内容かもしれないが、一応これまでの行動から何か掴めないか記憶を辿り探していたのだ。その内、ある言葉が浮かんだ。ヤクシャ・ラージャの襲撃前夜で魔理沙が言っていたことについてだ。

——— なんてお前らがいたところを襲ったのか気になるが———

サヤカ「・・・」

サヤカは思考を巡らせながら図書館へ。魔理沙を探して今後の行動の方針を相談しようと考えた。そう思った矢先に、魔理沙がこちらに話しかけてきた。

魔理沙「おうサヤカ、探したぜ。ちょっといいか？」

サヤカ「私もあなたを探してたところでした。なんででしょう」

魔理沙「いやなに、これからお前らはどうするつもりなのか訊いておこうかと思ってさ。レイジに訊こうと思ってたけど遊んでばかりだから、さっきから」

サヤカ「まあ・・・そうですね。私もあなたにそれについて相談しようと思ってたところで」

魔理沙「そーなのかー」

サヤカ「とりあえず幻想郷に迷い込んでからの行動を振り返ってみ
たんですが、手掛かりとなるようなものはまだ・・・」

魔理沙「・・・なあ、唐突なこと言うけど、お前元の世界に帰りたい
って思わないのか？なんかお前から全然焦りを感じねえんだけ
ど」

サヤカ「えっ・・・！？」

唐突な言葉に言葉を失う。魔理沙は不思議そうな目をしている。

魔理沙「意外なりアクションだな。早く帰りたいって言うと思って
たのに」

サヤカ「えっあっいや、早く帰りたい気持ちはあるですよ！？元
の世界の皆はきっと心配してるだろうし！でも今はここにいるアラ
ガミをどうしようかってことで頭が一杯になっちゃって、えっと、
あの・・・」

魔理沙「とりあえず落ち着け」

サヤカ「は、はい」

魔理沙「幻想郷をそんなに心配してくれてるなんて、お母さんうれ
しいぜ・・・（泣）」

サヤカ「冗談言ってる場合じゃないでしょ・・・」

魔理沙「そうだぜ。そこで今後の方針の相談といこうじゃないか」

サヤカ「あ、はい」

魔理沙「昨晚寝る前に私が言ってたこと、覚えてるか？」

サヤカ「ええ」

魔理沙「ずっと気になってたんだ・・・。だが一つわかったことがある」

サヤカ「な、何ですか？」

魔理沙は新聞を読むパチュリーから新聞を借り、サヤカに見せる。

魔理沙「これを見て気になることはないか？」

サヤカ「・・・今朝のアンノウン襲撃の記事以外には特に・・・」

魔理沙「だが逆に、これ以外で大した事件はない」

サヤカ「・・・」

魔理沙「お前も薄々気付いていたかもしれないが、これらの意味することは「お前とレイジがいた場所以外では何も起きていない」ということだ。サヤカ、幻想郷に来る前から、何か変わったことはな

いか？」

サヤカ「えっと、最近アラガミ達が戦略的に動くようになってきたってことぐらいしか・・・でも永遠亭で襲われた時は動きが戦略的ではなかったんですけど」

魔理沙は頭を傾けて考え込んだ表情をする。サヤカも一緒に考え込む。しばらくした後、先にサヤカが口を開く。

サヤカ「ええと・・・とりあえず私とレイジさんを狙っている・・・てことですよね」

魔理沙「それはもうわかってんだ。しかしわからねーんだよね・・・問題は何故そんなことをするかなんだよ。お前なんか恨まれるようなことしたか？」

サヤカ「アラガミはほぼ獣のような存在ですからそこまで知能が高いとは思えません・・・でも急に戦略的な動きになったということは、もしかしたら指揮を執れるほどのアラガミがいる可能性があります」

魔理沙「なるほど・・・指揮を執れるなら知能も高い・・・ならそいつをやっつけちまえばいいな！」

サヤカ「でもどこにいるのかわからないし、仮にそいつを倒しても全て決着がつくわけじゃないんです」

魔理沙「・・・？」

サヤカ「言い忘れていたのですが、例えばアラガミを倒しても、死体は霧散して倒された場所とは別の所で新たな個体を作り出すんです」

これには意外と思い、驚愕する魔理沙。

魔理沙「な．．．なんだって！？何故早く言わなかったんだよ！」

サヤカ「すみません、昨日の昼に言うべきでしたね．．．忘れてました」

魔理沙「じゃあ．．．アラガミを倒しても、結局はその場凌ぎにしかないのかよ！？．．．あっそうだ、他に倒す方法があるんじゃないのか？」

サヤカ「アラガミの体は全てオラクル細胞で構成されています．．．霧散した細胞をなんとか出来ればいいんですが、それすらも排除する方法は私達の世界でもありません」

魔理沙「．．．どうすりゃいいんだ．．．？」

サヤカ「．．．（アラガミを根絶する．．．か）」

元の世界では神機でアラガミを討伐することが一種のビジネスとなっていてしまっている。アラガミを討伐し報酬をもらう、そんな日々の繰り返しにいつの間にか満足してしまっている。魔理沙とこうして話し合うまではここまでアラガミの処理について深く考えたことは

なかった。

大人達は地球上からオラクル細胞は排除出来ないと言っているが、神機というアラガミでもある武器を作れるのなら、霧散したアラガミの処理方法だってなんとかなるのではないのだろうか・・・？サヤカはふと仮にアラガミが地球上からいなくなった時を考えてみる。

地球はどうなるか？地球の自然はアラガミが現れる前の三割ぐらいしか残っていない。皮肉なことに、植物を捕食したアラガミの光合成によって地球の大気は保たれているのだ。もしそのアラガミがいなくなれば、地球上の生命は死滅してしまう・・・！

・・・神機使いはどうなる？アラガミがいなくなれば存在する意味がない。神機使いの中には家族を養うために戦う者もいる。職を失い、路頭に迷うことになるだろう。その上フェンリル側としても、定期的に行われる静脈注射のための偏食因子の製造も出来なくなる。偏食因子の供給がなくなれば神機使いは――

――皆、アラガミ化する・・・！

サヤカ「・・・！」

サヤカは今、アラガミが排除不能な理由がわかったような気がした。排除出来ても出来なくても、いずれアラガミが地球上に残り、それ以外は誰もいなくなる。いつの間にかアラガミに依存しなければ生きていけない社会の中にいる。これは、運命なのだろうか・・・？冷や汗が頬を滴り、恐怖で頭を抱える。

魔理沙「お、おいどうした？嫌なことでも思い出したのか？」

サヤカ「え、いや、なんでもありません」

魔理沙「そうか・・・つつてもどうしたものか・・・その霧散した後の対処法がわからねえ」

うーんと再び考え込むと、パチュリーが新聞を読むのを止め、こちらに話しかける。

パチュリー「どうやら困っているようね」

魔理沙「パチュリー？」

パチュリー「話は聞かせてもらったわ。アラガミは倒すと霧散して別の場所で新たな個体を作り出すんでしょ？そうさせない方法があるわ」

サヤカ「本当ですか？」

パチュリー「ええ。簡単なことよ、あなたの武器の剣、弾にちょっと細工をしておけば霧散後のアラガミを消滅させられるのよ」

サヤカ「出来るんですか？」

パチュリー「出来るけど、私だけじゃちょっと無理なの。そこで魔理沙の友人の河童の所に行つて来てほしいのよ」

魔理沙「にとりのとこか、わかったぜ。．．．ん、レイジはどうすんだ？」

パチュリー「あなたが出かけている間、彼には幻想郷を見回ってもらうわ。今のところ二人がいた場所しか襲つてないらしいけど、もしかしたら人里とかを襲うかもしれないしね．．．ああそうそう、彼は主に剣で戦うみたいだから私の方でなんとかするわ。」

サヤカ「え．．．刀身だけならあなたでもなんとかするということですか？」

パチュリー「ええ、さっきまであなたの武器を勝手ながら調べさせ

てもらったのだけど、いけそうよ。でも今朝の襲撃の時のあなたの弾、見た感じ河童に任せた方がいいと思ってね」

パチュリーは傍にあった机の引き出しから小さな瓶を取り出しサヤカに渡した。

サヤカ「これは・・・？」

パチュリー「幻想郷からアラガミを排除するための切り札よ」

魔理沙「これをにとりんとくに持ってきてきやいいんだな」

パチュリー「その通り。でも今日はもう遅いわ、明日になったら行ってくるよ」

サヤカ「わかりました。じゃあレイジさんにも知らせないと・・・」

魔理沙「つつてもあいつ、今どこにいんだろな？そっぴえば物音が殆どしないぜ」

パチュリー「ちよつと待つてて」

パチュリーは机に置いてある水晶玉を持ち、注視する。しばらくした後、居場所がわかつたようだ。

パチュリー「・・・ハア。彼つたらレミィとも遊んでたみたいね」

魔理沙「多分羨ましがってレミリアのヤツが無理矢理引っ張って来たんじゃないのか？w」

パチュリー「……レミィ……そんなにレイジに負けたのが悔しかったのかしら」

サヤカ・魔理沙「？」

パチュリー「……何でもないわ」

サヤカ「えと、……じゃあレイジさんの居場所を——」

一方、レイジはフランにレミリアの部屋へ案内してもらい、部屋のベッドに寝かせようとする。

レミリア「……必要ないわ」

フラン「あ、目が覚めた？」

レミリア「あなた達には気絶したかのように見えただろうけど、意識はあったわ。ただ体に力が入らなかったのよ」

フラン「強がり言っちゃってえ」

レミリア「本当よ。……レイジ」

レイジ「？」

レミリア「とりあえず下ろして頂戴」

レミリアは背中から下りた後、近くの椅子に座る。

レミリア「あなたはこれからどうするの？ずっとここにいても私は全然構わないけど、あなたとしてはそうもいかないでしょ？」

確かにその通りだ。元の世界に戻らなければならないし、アラガミもなんとかしなければならぬ。とはいってもどこへ向かえばいいのかわからない。腕を組み、レイジは考え込む。するとレミリアは何かに反応しピクリとする。

レミリア「・・・これはちょっとまずいかもね」

レイジ「？」

レミリア「レイジ、白玉楼へ行きなさい。そこからあなたにとって重要な運命を感じるわ」

レイジ「????」

フラン「お姉さまの能力は「運命を操る程度の能力」なの。だから運命を読むことだって出来るよ」

運命を操る・・・よく考えてみると強力すぎる気がしてならない。なら今こうしているのも運命を操ってこうなっているのだろうか。まさかとは思ったが訊いてみることにした。

レミリア「私は普段能力は使わないから安心しなさい、今のこの状況も私の操った運命じゃないから」

無用な心配だったようだ。次の目標は白玉楼。しかし今は夜。今日はここで休んで次の日に行くことにする。

レミリア「さ、夜も更けて来たし晩ご飯といきます」

サヤカ「レイジさん」

レミリアが喋っている途中でサヤカと魔理沙が入って来た。

サヤカ「レイジさん、突然ですが今後の行動について話したいことがあります」

レミリア「それならこちらにも決まったところよ。彼には明日白玉楼に行ってもらうわ」

サヤカ「そうだったんですか。でも一応こちらの考えを言っておきますね。私と魔理沙さんで妖怪の山という所に行き、その間レイジさんは幻想郷を見回ってアラガミの襲撃があつたら鎮圧する、とい

う方針でした」

レイジは幻想郷中を見回る、ということに少し無理があるのではないかと思いそれについて指摘する。

サヤカ「大丈夫です。幻想郷はそこまで広いつてワケじゃないみたいですよ。といっても狭いワケでもないんですが……。そこで魔理沙さんの提案で、空を飛べるということでフランちゃんと一緒に行動してもらうことになりました」

レミリア「……え？」

魔理沙「それとアラガミどもが騒ぎ出したら、その位置を知らせるリーダーとなる結晶をパチュリーからくれたぜ」

フラン「わーいレイジと一緒にだー！」

フランはまたレイジといわれることに大喜び。魔理沙はレイジにリーダーとなる結晶を渡す。レミリアは少し気難しい顔をしている。

レミリア「……………」

フラン「……なあに、不満？」

レミリア「……………」

魔理沙「いいじゃんか、今回は保護者付きだぜ？」

レミリア「……」

未だ不満な顔をしているので、レイジもレミリアを説得する。するとレイジには甘いのか、渋々承諾する。

レミリア「……わかったわ」

フラン「やったー！（＞＜）」

レミリア「……ただし、フランにもしものことがあったら、本気で殺すわよ。遊ぶじゃなくてね」

レイジ「（コク）」

レミリア「……さ、晩ご飯にしましょ」

レミリアは立ち上がり、ドアに向かって歩き出す。レイジ達もついて行くように歩き出した。食堂に向かう途中にサヤカは明日の行動の説明をする。

サヤカ「私達は明日妖怪の山で魔理沙さんの友人である河童の方の所に行ってきます。目的は、霧散後のアラガミを消滅させるために神機を強化してもらうことです。」

ならば何故別々に行動するのか。強化のためだけなら自分もついて行けばいいはずだとレイジは考える。レイジの表情を見てサヤカは付け足すように説明をする。

サヤカ「ちよつと言い方が変でしたかね……。レイジさんはよく刀身のみで戦いますよね？刀身部分だけならパチユリーさんでもなんとか出来るみたいなんですが、私はよく銃撃をするので……。バレットの強化は河童の方に頼らないといけないみたいなんですよ」

そう言われてみると、確かにとうなずける。レイジはこれまでも、幻想郷に入ってからバレットは使っていない。別に彼は銃撃を嫌っているわけではない。アラガミとの戦いの中では銃撃の必要がある状況も出てくるし、銃撃の方が倒しやすいアラガミもいる。しかし道場の出身ゆえ、彼にとっては剣で戦う方が楽なのだ。もう一つ理由があり、一時期ターミナルの調子が悪い時があり、その時に彼はそれを知らずにバレットエディットをしてしまい、本来ならオラクルチップの容量上作ることも撃つことも出来ないはずの組み合わせで作ってしまったため、強力過ぎるものが多い。連発したら下手をすると銃身が持たないくらいの弾もある。ターミナルの不調を知ってからレイジは極力使わないようにしているのだ。

サヤカ「レイジさんの分のバレットも持って行くつもりですので、明日になったら渡してくださいね」

レイジ「……（コク）」

魔理沙「レミリア、食堂はそっちじゃないぜ？」

レミリア「ちよつと着替えにね」

魔理沙「そういえばいつもの服装じゃねえな。なんだそれ？」

レミリア「・・・思い出の品・・・よ」

魔理沙「?・・・なんでそんなモンを？」

レミリア「あなたには教えてあげないわ」

魔理沙「???」

〈更衣室〉

レミリア「・・・勢いでこんなの着るべきじゃなかったかしらね。
結局負けちゃったし」

服を眺めながら溜息を吐く。

レミリア「ごめんなさい・・・・・・・・お父s」

レミリアが独り言をいっていると部屋の外からノック音が鳴り、ドアの方を向く。

レミリア「誰？」

咲夜「咲夜です。夕飯が出来ましたので呼びに参りました」

レミリア「・・・よく私がここにいとわかつたわね」

咲夜「普段お嬢様がお召しにならない服でしたので、夕飯の頃には着替えるためにここにいらっしゃるかと思ひまして」

レミリア「・・・そう。そんなにおかしかった？」

咲夜「いえ、私は初めて見るので・・・驚いたまです。失礼ながら、あれは何なのか教えていただけますか？」

レミリア「・・・思い出の品・・・ってところね」

咲夜「思い出・・・ですか」

レミリア「待たせたわね、行きましょ」

咲夜「はい」

普段着る服に着替え終わり、食堂へ向かおうと更衣室から出た。

少女&神機使い団らん中・・・

夜の12時。皆眠気がし始めるころに就寝の準備をしていた。レイジとサヤカが寝る場所は昨日咲夜が案内してくれた寝室だ。昨日と同じく魔理沙との三人で寝ることになった。

サヤカ「いいな〜レイジさん、一瞬で着替えられるなんて羨ましいです」

魔理沙「フラン曰く「装備を自由に換装出来る程度の能力」だったか？服装も変えられるのか・・・」

サヤカ「私、隊員服なので上を一枚脱ぐくらいしか・・・」

着替える時にレイジはふと思った。刀身を変えられるのならもしかしたら・・・そう思い、寝間着姿の自分の姿を思い描くと本当に念じた通りの姿になっていた。こんな時に自分の能力が役に立つなんて思ってもおらず、少し優越感を感じるレイジ。思わず笑顔がこぼれてしまう。

サヤカ「じゃ、おやすみなさ〜い」

魔理沙「おやすみだぜ」

レイジ「・・・」

午前3時、レイジはベッドの中で目を覚ました。時計を見るとまだ夜であることを確認する。周りを見るとやはり全員眠っている。しかし、腹が妙に締め付けられるような感覚がする。見てみると、後ろから抱き着くようにワンピース姿のフランが眠っている。

レイジ「・・・!!?」

レイジは驚き、ガバツと起き上がる。急に起き上がったためか、フランも目を覚ます。

フラン「・・・んー？」

眠そうにフランは目を擦る。寝ようとする時には確かいなかったはずなのに・・・

フラン「・・・えへへ、びっくりした？皆が寝るのを見計らってこっそり来ちゃった」

レイジ「・・・」

そう言っているとフランはそのまま寝る体勢に入った。吸血鬼は確か夜に起きているものではないだろうか。レイジは気になり、そのことについて訊いてみる。

フラン「普段は夜に起きてるよ。異変が起きたら人間と同じ感じで暮らしてる。異変の時はよくお客さんがここに来るからね。・・・さ、明日は早いから早く寝よ！」

レイジ「!？」

無理矢理体を引っ張られ、ベッドに引きずり込まれる。しかもがっしりと捕まっており、身動きすらままならない。言っても離れそうにないので、仕方なくこのまま寝ることにした。フランはすっかりレイジにご執心のようなのである。

Mission 15 ゴールデンタイム（後書き）

弟「アラガミがいなくなった後の地球・・・か」

作「・・・どうあがいても絶望な気がすんだが」

弟「支部長はこのことも考えて行動を起こしたのかな・・・」

作「もうそれは悪魔の証明ってヤツだろうよ・・・」

アラガミが仮に地球上からいなくなったとしたら・・・人類はどうなるのでしょうか。

M i s s i o n 16 蒼穹の半月（前書き）

皆さん、おはこんばちは、wingです。自動車運転免許試験に向けて勉強していたため更新がかなり遅れてしまいました・・・申し訳ありません。待たせた拳句クオリティは上がっておりません。ごめんなさい・・・。

ユニーク2500超えました！ありがとうございます！ありがとうございます！
ございます！

それでは本編どうぞ！

Mission 16 蒼穹の半月

朝を迎え、太陽が上り始めた。しかしカーテンを引いてあるため部屋の中は暗いままだ。今日もサヤカが先に起き、カーテンを開けようとした時ふと昨日の朝のことを思い出す。そういえばあの時はレイジはすでにいなかった。まさかと思いレイジの方を向く。今日は普通に寝ているようだ。しかし何か様子がおかしい。レイジの表情は歪んでおり、苦しそうだ。悪夢でも見ているのかとレイジの寝るベッドに近づく。

サヤカ「（ん、これは・・・）」

ベッドのシートから見覚えのある羽根がはみ出ている。もしかと思いいシートをめくると、フランがレイジの腰に抱きつきながら眠っていた。レイジが苦しそうな表情なのは多分結構な力で抱きついているからだろう。

サヤカ「（寝る前は確かいなかったよね・・・まいいや、起こそう）レイジさん、朝ですよー」

反射運動を起こすかのように、レイジの目はカッと開かれる。首を絞めた手を放した後ように、息が荒い。

サヤカ「だ・・・大丈夫ですか？うなされてたみたいですけど」

レイジは悪い気分を吹き飛ばそうと顔を洗いに立ち上がる。するとレイジの腰に重みが。フランは未だレイジにしがみついている。

フラン「zzz・・・（-ω-）」

レイジ「・・・」

サヤカ「ありやりや・・・レイジさん、ちょっとそのままできてく
ださい。フランちゃん、起きてくださーい」

フラン「・・・うん・・・あ、おはよ」

サヤカ「寝ながらレイジさんにしがみつくななんて器用ですね」

フラン「うん、レイジは私のお気に入りだから」

サヤカ「答えになってないような気が・・・」

フランも顔を洗うということで、腰にしがみつかれた状態で洗面台
へ向かう。吸血鬼が水で顔を洗うことにサヤカは少し複雑な気持ち
になったが、レイジは気にしている様子はない。

サヤカ「あ・・・あの」

フラン「なーに？」

サヤカ「吸血鬼って流水が苦手と聞いたことがあるんですけど・・・
違うんですね」

フラン「そーでもないよ。雨、川の水、海水とかはダメだけど顔洗
ったりシャワー浴びる程度なら平気なほう」

サヤカ「そうなんですか・・・ごめんなさい、変なこと訊いちゃっ
て」

フラン「いいよ」

フランが顔を洗い終わり、レイジ達も顔を洗う。水の冷たさで眠気
が飛んでいき、さっぱりとした気分になる。魔理沙がまだ起きてい
ないのでサヤカが起こしに向かった。

サヤカ「魔理沙さーん朝ですよー」

魔理沙「ん・・・おー・・・朝か・・・」

フラン「魔理沙ー！寝坊は許さぬぞー！」

魔理沙「おドウツ!!?」

ゆっくりと起き上がる魔理沙に思い切り飛び込むフラン。しかも腹
に直撃。これはいい目覚め（笑）になりそうだ。

魔理沙「ツッー・・・これはいい(?) 眠気覚ましだぜ・・・」

フラン「でしょー?」

魔理沙「・・・てかなんでお前がここにいんだよ」

フラン「一人で寝るのつまなくて」

魔理沙「ふーん」

腹を押さえながら洗面台へ向かう魔理沙。レイジ達は魔理沙より一足早く着替え始める。レイジは昨晚やった瞬間着替えをした。

サヤカ「いいですねホントに・・・」

フラン「わーすごーい」

全員の着替えを済ませた後魔理沙に連れられて食堂へ向かう。しかしフランだけはまだ普段の服装になっておらずサヤカが気付き訊いてみると地下に置いてきたらしく、途中で別れ着替えてから食堂に向かうとのことだった。

フラン「じゃまた後でねー」

魔理沙「おー・・・あ、そっぴや朝のトイレ行ってなかった

な、先行っててくれ」

サヤカ「あ、はい」

魔理沙もトイレのため一旦別れ、レイジとサヤカだけになる。

サヤカ「・・・」

レイジ「・・・？」

ふとサヤカの方を見ると何か考え事をしている様子だった。いつもより明るさがなかったため気になるレイジ。しかしこれからのことを考えているのだろうとあまり気にしないことにした。誰しも考え事をすることはあるものだ。

食堂に着くともうすでにレイジとサヤカを除いた面々が席に座っていた。途中で別れたはずのフランと魔理沙もそこにいた。

魔理沙「おう、意外に歩くのおせーんだなお前ら」

フラン「先食べてるよー」

レイジ「・・・？」

フラン、魔理沙と別れてそう時間は経っていなかったはず。こちらもいつも通りに歩いてたはずだ。席に座りながら何故そんなに早か

ったのか訊いてみる。

フラン「ご飯

だよ

早く食べたかったから

魔理沙 飯

だぜ」

実に解りやすい回答だった。

サヤカ「だからってそんなに急ぐ必要もないんじゃない？」

魔理沙「おまえは何を言っているんだ、善は急げというだろ？」

サヤカ「急がば回れともいうじゃないですか」

フラン「諺ってややこしいね」

魔理沙「だな。反対のことを言っているのが結構ある気がするぜ」

という感じで、何故か諺で話題が絶えない朝食となった。

（朝食後、寝室）

サヤカ「よし、準備おk」

魔理沙「私も準備おkだ」

そろそろ出発するか、と意気込む二人にレイジが呼び止める。

サヤカ「？なんですか・・・ああ、いけない忘れるとこでした！」

レイジは昨日サヤカ達が妖怪の山へ向かう時にバレットを持って行くということでサヤカに自分のバレットを渡そうとしていた。少し多めなので、何か袋に入れるなどして運びたいところだが、生憎サヤカはそれをもっていなかった。とりあえずレイジのバレットを受け取るサヤカ。しかし両手でも少し持ちきれない。

サヤカ「あ、こぼれちゃった・・・やっぱり袋が何かに入れた方がいいかなあ」

魔理沙「お、あつたぜ」

サヤカ「最高にいいタイミングですね」

魔理沙「私の荷物を漁ってたら丁度いいのが見つかった、ほら」

魔理沙は持っていた荷物から小さめの袋を見せた。

サヤカ「・・・？なんか小さくありません？」

魔理沙「だけどな、見た目以上にたくさん量が入るんだぜ。私の行きつけの道具店で見つけたんだ」

とは言われてもいまいちすぐには納得出来ない。こんなものに入り切るのだろうか。疑いながらもバレットを入れていく。すると――

サヤカ「おお・・・全部入ったのに詰め込んだ感じがしませんね」

魔理沙「スゲーだろ？これは私も重宝してるんだぜ」

かさばった感じもしないので、恐らく魔法でも掛かっているものなのだろう。どういう仕組みなのか気になったが便利なのでそこまで気にしないことにした。

サヤカ「じゃ、行きましようか」

魔理沙「おう」

レイジ「（コク）」

寝室を出、紅魔館の玄関へ向かう。これからの旅に緊張と期待の気持ち湧いてくる。

サヤカ「なんだかこういう気分になるのは久しぶりな気がします」

魔理沙「私はもう飽きるくらい味わったんだがな」

フラン「じゃ、行ってくるね!」

レミリア「気をつけてね。レイジ、頼むわよ」

咲夜「行つてらっしゃいませ、妹様。日傘をお忘れなく」

美鈴「気をつけてくださいねー!」

パチュリー「魔理沙、帰ってきたら昨日勝手に「借りて」った本、返してもらわよ」

魔理沙「げ、もう気付いてたのか・・・死んだら返すぜ」

パチュリー「・・・気をつけてね」

この時のパチュリー、顔が少し赤くなっているように見えた。門を出て森を歩いて行き、湖を過ぎるところまでは一緒に行くことになっている。それまで色々と話しながら歩いていた。

魔理沙「ああそうだ、昨日渡したあの結晶、持ってるか？」

レイジ「(コク)」

うなずきながらレイジはズボンに付いているポーチから取り出す。

魔理沙「言い忘れてたことがあった。それについてなんだが、アラガミとの距離で光る色が変わるんだ。青く光ったら遠くに、黄色く光ったらちよつと離れたところに、赤く光ったら近くに、といった感じで光るぜ。しかも方角まで教えてくれる優れモンだ、パチュリーからの借りモンだから失くさないでくれよ」

・・・よく考えてみるとユーバーセンスと似ている。ユーバーセンスと上手く使えば戦いになった時に有利に立ち回れるのではない、結晶をまじまじと見つめる。結晶は今は光っておらず透明に透き通っていた。

サヤカ「改めて見ても、この幻想郷の自然は綺麗ですね・・・私達の世界ではここまで豊かな自然はないに等しいから羨ましく思えます」

フラン「私も外に出たことは殆どないから初めて見るものが多いよ」

レイジ達がいた地球にはアラガミに自然を破壊しつくされ、このように豊かな自然を見ることは殆どない。フランの場合は自らの能力の強力さ故に地下に長い間いたため彼女もまたこの豊かな自然を知らない。三人揃って感嘆の声が漏れる。

魔理沙「お前らの環境がどうだったか知らねーが、あんまり見惚れ

て本来の目的忘れんなよな」

サヤカ「そ、それはもちろんわかってますよ、ええ！」

レイジ「・・・」

レイジとフランはうそだといったそうなめでサヤカをみている！

サヤカ「・・・（・・・；）」

魔理沙「・・・そろそろ湖を抜ける頃か。でも変だな、いつもはあの氷精がいて結構冷えるのに今日は珍しく見かけないな」

サヤカ「氷精・・・ですか？」

魔理沙「ああ、そいつは普段この湖の近くにおいて周りの空気が冷えるんだが、今はその肌寒さもない・・・どこ行っただらな」

レイジは魔理沙の言葉を聞き以前この湖の近くを通った時のことを思い出す。確かにあの時は局所的に気温が低かった。しかし外出くらはするだらう。考え過ぎではないかと話しかける。

魔理沙「・・・まあそうだな、^{あいつ}？のことだしフラツとどっかに遊びにでも行っただらな（笑）」

サヤカ「????」

あまり緊張感のない雰囲気のまま湖を過ぎていった。

魔理沙「じゃ、こつから別行動だな。気をつけろよ」

フラン「大丈夫だよ、そっちもね」

サヤカ「また後で会いましょう！」

お互いに手を振りながら別れていく。それぞれのやるべきことをやるために――

〈サヤカ side〉

早いこと終わらせようということで、空を飛んで妖怪の山へと向かうことになった。サヤカは魔理沙の後ろに捕まる。

妖怪の山。文字通り妖怪で溢れかえっている山だ。とはいってもそこには天狗と呼ばれる妖怪の中でも強力な種族が多く住んでいるらしい。天狗を中心に様々な妖怪が住んでいる、といった感じのようだ。また妖怪の山は一つだけではなく付近の二つ三つほどの山もひっくるめて妖怪の山と呼ばれている。

魔理沙「で、その山の妖怪の中でリーダー的ポジションなのが天狗

なのさ」

サヤカ「天狗かぁ・・・そんなにすごいんですか？」

魔理沙「まあ、機動力なら全妖怪中トップといってもいいだろうな。私の知ってる天狗にまさにそういうヤツがいるし」

サヤカ「はあ」

魔理沙「ほーら見えてきたぞ、あそこだ」

魔理沙が前方に向けて指を指す。指された方を見るといくつかの山が地平線上に現れていた。どうやらあれが妖怪の山らしい。しかし普通の山にしか見えない。どこにでもありそうな感じだ。

サヤカ「・・・いまいち妖怪の——って感じがしませんね」

魔理沙「当たり前だ、山つてのはあんなモンだ」

サヤカ「ですよねー」

魔理沙「じゃ、飛ばすぜツ！」

サヤカ「え、うわツ!？」

魔理沙が前屈みになるとギューンとサヤカの体に強力な慣性とGがかかった。必至に捕まってなければ振り落とされそうなくらいだ。こ

んなスピードで体が後ろに倒れない魔理沙にサヤカはすごいと思った。

サヤカ「ちょ．．．かなりヤバいです．．．！」

魔理沙「なーにもう少しで着く。それまでの辛抱だ」

サヤカ「くうっ．．．」

まだ見た感じかなりの距離があるのに大丈夫なのかと思いつつ魔理沙にしがみつく。あとどれくらい我慢すればいいのか．．．そう思った頃に急ブレーキがかかった。慣性により今度は魔理沙にぶつかる勢いで体が引っ張られる。

サヤカ「わわっ！．．．今度は何ですか？」

魔理沙「．．．着いたぜ．．．だが、まずいな」

サヤカ「．．．？」

前を見ると、辺り一面に山の景色が見える。本当に着いたようだ。しかし所々からたくさんの人影が見える。地上ではなく空中に。

サヤカ「．．．人？」

魔理沙「・・・どうやらよ」

？「その二人、動くな！」

魔理沙「お前一人でにとりんどこへ行かなきゃならねーようだぜ」

サヤカ「！？」

魔理沙は急に高度を落とし、サヤカに降りるよう促す。地図とバレットの入った袋を渡され、簡単な説明をされる。その間にも何人かがすでに襲い掛かっており、魔理沙が弾幕で退けながらサヤカに話続ける。

魔理沙「あいつらは天狗だ。狙いはお前。んでそれは地図だ。・・・
てめえら説明の邪魔すんな」

天狗「ぐあっ！」

サヤカ「え！？あ、えっ」

魔理沙「行け！早く！」

サヤカ「でも、なんでこんなく」

魔理沙「早く行け！」

サヤカ「・・・ッ」

魔理沙は自ら囿となり天狗たちの相手をしている。何故自分を狙っているのかわからないが、このまま傍にいたら捕まってしまうかもしれない。仕方なく魔理沙の無事を祈りながら走り出した。

魔理沙「・・・行っただか」

魔理沙は襲い掛かる天狗を蹴散らしながらサヤカが見えなくなったのを確認する。すると天狗たちの中で白狼天狗と呼ばれる内の一人が魔理沙に声を掛けた。

？「魔理沙さん、なんで彼女をこんな所に連れて来たんです？」

魔理沙「言ってもどーせあいつのこと追い払うつもりなんだろう？もみもみ」

桜「桜です！変なあだ名つけないでください！」

桜という天狗は低く唸り魔理沙を威嚇する。

魔理沙「おお、こわいこわい」

桜「・・・ッ！この・・・！」

？「はいはいそこまでそこまで。落ち着いて落ち着いて」

魔理沙「・・・文か」

怒りに身を任せそうになった椛を制止させて現れたのは烏天狗の文。魔理沙は丁度いいと思い、文にこの襲撃の理由を訊くことにした。

文「どーもー！清く正しいsy」

魔理沙「そのセリフ飽きたよ。で、なんでいきなり襲ってきたんだ？もつと穏便にいつてもよかっただろうに」

文「・・・最後まで喋らせてくださいよお。まそれはいいとして、理由は至極簡単。彼女にこの妖怪の山に入られたくないんです」

魔理沙「・・・やっぱりか」

文「あやや、もう予想はついていたと？」

魔理沙「まあな。ここに来る時に薄々こうなるんじゃないかとは思ってたぜ。だがまさかこうも大人数で出迎えてくれるとはな」

文「まあこれは不本意ですがね。いやーしかし私もここに住む者としても新聞を作る者としてもびっくりです。存在するだけでアラガミが寄ってくるなんて恐ろしい話ですよ」

魔理沙「・・・でも、こうまでする必要はないんじゃないか」

文「そういうワケにもいかないんですよ。魔理沙さん、あなたがい

るからねえ」

魔理沙「・・・あ？どういう意味だ？」

文「もし彼女だけでここに来ていたら、ここまで手荒にするつもりはありませんでした。「事情があつて立ち入り禁止」って忠告する程度にしようと思ってたんですよ」

魔理沙「なんで私が悪いみたいな感じになつてんだよ」

文「あやや、あなたは忠告する者をブツ飛ばして入りかねませんか
ら」

魔理沙「ああ、把握」

文「さて、お喋りばかりもアレですし本題といきましょうかね」

魔理沙「・・・」

文「最後の警告です。彼女を連れてお引き取り願えませんか？」

魔理沙「やなこつた」

文「あやや・・・即答することアないじゃないですか」

魔理沙「アラガミから幻想郷を守るためなんだ、お前らこそこんなことは止めるよ」

文「生憎そうはいかないんです。悲しいことに」

魔理沙「だったらどうする？やるかア？ん？」

文「不本意ですがそうさせてもらいましょう」

魔理沙は八掛炉を持ち、辺り一面に弾を撃ち始めた。天狗たちは容易にそれをかわす。

文「そんな当てずっぽうじゃ当たりませんよ」

魔理沙「当てる気などそんなにないさ！」

柊「・・・？どういっつもりですか」

文「囿ですよ」

柊「・・・はっ」

魔理沙「なんだ、今頃気付いたのか。お前は頭も犬ツコロなのか？」

柊「なっ・・・何をふざけたことを！」

文「落ち着いて。今のは注意を引こうとするためのただの挑発ですから」

柊「ツ・・・はい」

文「じゃあ、そのあなた達五人で彼女を取り押さえてきてください。なるべくケガさせないように」

白狼天狗「はっ」

魔理沙「くっ、させるか！」

文「おっと、あなたの相手は私達ですよ」

魔理沙「邪魔すんなあああ！」

魔理沙と文率いる天狗達との戦いが始まり、その喧騒がサヤカの耳にも聞こえていた。しかし振り向いている場合ではない。一心不乱ににとりの居場所に向かって走った。

M i s s i o n 16 蒼穹の半月（後書き）

作「ゴッドイーター2・・・だと・・・」

弟「ああ、ファミ通の記事であつたぞ」

作「こいつは買ったツツツツツ!!」

弟「ツかましいな、ここんとこお前静かだからもう大丈夫かなつと思つてたのによ」

作「ブーストハンマーとチャージスピアか・・・どんな技が使えるのか」

弟「作品発表からそう日にち経つてねーから何とも言えんな」

作「今んとこバスターのままでいいや」

弟「・・・ツたくバスター厨が・・・」

Mission 17 ゴッドキラー（前書き）

皆さん、おはこんばちは。wingです。今回は二人ほどキャラ崩壊注意回です。キャラがよくわかんない・・・口調とか色々・・・。
どうかご了承承願います。

Mission 17 ゴッドキラー

レイジside

サヤカ達と別れた後、レイジ達は白玉楼へと足を運ばせ・・・た
いところだが、肝心の白玉楼への行き方を訊くのを忘れてしまった。
どうしようかと足を止め考える。辺りを見渡しても木ばかりで、目
ぼしいものは見つからなかった。

フラン「どうしたの？白玉楼はあっちだよ」

フランは現在の進行方向に向けて指を指した。以前行ったことがあるのだろうか。もしそうならどんなところなのか教えてほしいものだ。

フラン「どんなところかって？私も知らないよ」

レイジ「・・・？」

フラン「魔理沙が地図くれたの。ほら」

いつの間にかフランの手に地図が。いつの間に渡された・・・？・・・
・まあとにかく地図があるのなら心強い。
・・・と思つて見てみると、明らかに大雑把な地図だ。大まかな場

所しか書かれていない。しかし最低限の情報は書かれているのでツッコみたくてもツッコめない。とりあえずこれで道に迷わなくて済む。安堵の息を吐いた直後、レイジの背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

アーティ「あんたの忘れっぽさにはホント呆れるわね」

レイジ「・・・!？」

振り返るとそこにはレンとアーティの姿が。いつn（ry 行きの時は確かいなかったような・・・急に神妙な表情をするレイジにフランが声を掛ける。

フラン「どしたの？」

レイジ「・・・」

アーティ「いつの間にか言いたそうな顔ね。出発する時からずっといたわよ」

・・・深く考えるのはやめることにした。今はまず白玉楼へ向かうことに集中する。もちろん結晶が光っているかどうか目を配りながら。

レン「白玉楼・・・真珠でもあるんでしょうか」

アーティ「・・・ないとは思っけど、幻想郷ならあり得ない話じゃないかもね。ねえ・・・もし山のように真珠があつたらどうする？」

レン「どうするって言われても・・・。勝手に持つてこうとは思いませんね。見たらすごく理性を揺さぶられそうですけど・・・。まあ、どんな場所かは行ってみなければわかりませんね」

アーティ「そうね、レミリアの言う「重要な運命」ってのも、行ってみないとわかんないし」

レイジ「・・・」

重要な運命――。自身に関連することといえはまずアラガミが思いつく。重要というのだから相当な事件でも起こるのだろうか。あるいは自分が知っている誰かがいる可能性がある。現に突然幻想入りというのを自分がしてしまったのだから、他の誰かが前触れもなく幻想郷に迷い込む、なんてこともあり得ることだ。この先にあるものが何だったにせよ、運命を操れ、読めるレミリアが「重要」というのだから気を引き締めていく必要がある。

そう思った矢先に結晶が突如光り出した。色は青、遠くの方にいるようだ。光った結晶から一筋の青い光線が前方に向かって伸びていく。この先でアラガミが騒ぎを起こしていることを示す光。レイジ達はすぐに走り出した。

アーティ「早速来たか、まったく懲りないヤツらね」

フラン「来た来た 今度はどんなのと遊べるのかな」

レン「騒ぎが起きているところかもしれませんが白玉楼かもしれません。レイジさん、ユーバーセンスを使ってみてください」

レイジはうなずき、ユーバーセンスを発動させる。左目の色が変わり、脳内で現在位置と周辺の地形を示す地図が表示される。今回は結晶から伸びる光線も脳内地図に表示されていた。しかし光線の行く先を見ると、なんと途中で途切れてしまっている。しかも途切れた地点付近にアラガミが一匹もない。いったいどういうことなのか・・・？とりあえず光線が途切れている場所まで向かう。森の外れ、少し開けた場所に出た。木のない空間が円形状に広がっている。その中心の所で光線は途切れていた。途切れている場所の半径2〜3メートルくらいの空間に歪みが出来ており、それを透かして木々が歪んだように見える。

レン「何でしょう・・・あれ・・・」

アーティ「森の中にこんながあるとはね・・・でも光線はあそこで途切れている・・・ということとは」

フラン「あそこの中にいるんだね！よーし！」

フランはそう言うと言つ先に歪みの中に飛び込んでいく。歪みに触れた瞬間、フランの姿は一瞬にして消えてしまった。

レン「消えた・・・！？」

アーティ「てゆうよりはどっかに飛ばされたって感じね。光線があそこを示していることからみて、飛び込めってことじゃない？もしかしたら白玉楼へ行けるかもしれないし」

するとアーティも歪みに向かって走り出した。フランと同様、歪みに触れた瞬間にアーティの姿が消えてしまう。

レン「また消えた……。どうやらどこかに瞬間移動出来るようですね。僕らも行きましょう、こうしている間にもアラガミは襲撃を続けています」

レンも歪みへと走り、消えていく。レイジも後を追うように走り出す。この先は一体どこなのか、どうしてアラガミがこの先にいるのか、色々と気になることがあるが、考えている時間はない。一刻も早く襲撃を止めなければならない。少し複雑な感情を抱きながら、レイジは歪みの中へ消えていった。

（アラガミ襲撃１０分前、冥界）

白玉楼へ続く階段で、白玉楼の庭師、魂魄妖夢は毎日の日課として掃き掃除をしていた。普段は白玉楼には妖夢と主の西行寺幽々子の

二人だけで暮らしているのだが、この日は客人がいた。

妖夢「あの・・・掃除を手伝ってくれるのはありがたいんですけど、こんな所で油を売ってていいんですか？永琳さんを探さないといけないのでしょうか？」

？「まあそうだけど、あの方には恩があるの。連行して来いと言われてるけど、私達にその気はないなあ」

妖夢「そんな理由で仕事ほっぽらかしていいんですか・・・」

？「まあ月の皆は地上に降りたがらないし簡単にはバレないよ」

現在妖夢が話している相手は月からの使者、綿月依姫。姉の豊姫と共に永琳連行の指示を受け地上へ降りたのだが、彼女達には連行する気はないらしい。かつて永琳に師事しており今でも尊敬しているため恩を仇で返すようなことはしたくないそうだ。よって最近は任務を任されて地上へ降りる度にこうしてさりげなくサボっているのである。

依姫「それにしても、ここの階段はすごく長いわね。これをあなた一人でやってるの？大変じゃない？」

妖夢「ええ、確かに時間は掛かりますけど、慣れますから」

依姫「慣れとは恐ろしいものね・・・」

く白玉楼く

幽々子「あ”く．．．暇ね．．．」

豊姫「そう？確かにやることはないけど」

居間にて、こたつに入りながらだら〜と突っ伏している幽々子。向かいには桃を食べながら外の景色を眺める豊姫。現在暇を持て余しているところである。

幽々子「．．．な〜んか面白いこと起きないかしら」

豊姫「願って起こるようなものじゃないでしょうに」

幽々子「．．．あそくだ、今日はなんでこんなところに？ここには特にこれといったものはないけど？」

豊姫「月から仕事に来たのですけどね．．．やる気が起こりません」

幽々子「あ〜わかるそれ。「やらなきゃいけないことがあるけどめんどいからやりたくない」ってヤツでしょ？私もあるある」

豊姫「うゝん、あなたの想像してるのとはちょっと意味が違つかも」

幽々子「えゝじゃあどついう意味？」

豊姫「教えなゝい」

幽々子「いいじゃなゝい」

豊姫「教えてほしゝ？」

幽々子「ほしゝ」

豊姫「あなた、胃の容量に自信は？」

幽々子「え？・・・あるけど、どうしたのいきなり？」

豊姫「いやね、ちょっと桃の大食い勝負でもやろうかと思ひまして暇だし」

幽々子「ふ・・・後悔するわよ」

豊姫「まあ勝てなかったとしても、いい勝負は出来ると思います。少々お待ちを」

そう言つと豊姫は目を閉じ、指を鳴らそつと手を動かす。

豊姫「んゝゝゝ・・・」

かなり多くの量を呼び出そうとしているからか、表情が少し歪み、手は力んでプルプルと震える。

幽々子「大丈夫？無理しなくていいのよ？」

豊姫「大丈夫、もうちょい・・・えい！」

バキッ！！

力み過ぎたせいか指を鳴らした瞬間妙に生々しい音が響いた。豊姫は手を押さえて苦しんでいる。

豊姫「もッ・・・桃は・・・？」

幽々子「部屋中にいつぱい出てきたから多分上手くいったんだろうけど、指大丈夫！？」

豊姫「まだ・・・まだ終わらんよ！（指的な意味で）」

幽々子「そう・・・じゃ、始めましょうか」

こうして、突然大食い勝負は始まった。大食いなので、急がなくてもいいのが楽である・・・はず。

豊姫「早食いは自信ないんだけど、これならそれなりにいける方なの」

幽々子「私はどっちでもおkだけだね。ま、早食いじゃないから時間気にせずのんびり食べれるのがいいわね」

部屋中に溢れる桃に二人は半分体が埋まった状態で食事(?)を続ける。

その頃、白玉楼へ続く階段では――

妖夢「もうそろそろ終わりますね」

依姫「じゃ、さっさと終わらせて休憩といこうか。喉乾いてきちゃった」

階段の掃き掃除が終わる直前までの段階になり、終わりが見えてきたことで安堵の息を吐く依姫。早く終わらせようとペースを上げて掃除していく。すると視界に見慣れないものが。階段を団体で上っ

てくるところを見て気になった依姫は妖夢に尋ねた。

依姫「ねえ、あれって、幽霊か何か？」

妖夢「え、・・・んゝ何でしょう、私もわかりません」

階段を上ってくる「それら」は、次第に二人のいる場所に近づいてくる。そして目前のところまで来た時、噛みつきこうと襲い掛かってきた。

妖夢「なっ！？」

咄嗟に真横に避け、階段のない場所に着地する。二人とも驚きの色を隠せない。

依姫「襲ってきた！？」

二人は次の攻撃が来るかもしれないと戦闘態勢に入る。どこからかはわからないが凶暴な妖怪でも侵入してきたのかと推測する。

妖夢「いきなり襲ってくるなんて・・・幻想郷の妖怪はここまで凶暴じゃないのに！」

依姫「いや・・・少しだけど、神の気を感じる」

妖夢「えっ！？か、神！？」

依姫「でも、どれも見たことがない・・・。一体何なんだろう・・・」

妖夢と依姫は刀を握り、襲ってきた怪物に警戒する。しかし怪物は二人を無視して階段を上り続ける。

依姫「・・・？私達には用がないのか・・・？」

妖夢「はっ、このままでは幽々子様達が危ない！」

依姫「とりあえず食い止めましょう！・・・なんなのかしら、一体彼らは・・・」

く冥界入口く

歪みの中へ入ったレイジ達。辺りは薄暗く、夜の道といった印象。本当にどこかに飛ばされたようだ。ユーバーセンスはまだ発動中な

ので、どこに向かえばいいかはすぐにわかる。その上結晶が道のりを教えてくれるので、レイジ以外も道に困ることはない。光線が示す先には、異様に長い階段が見える。アラガミの大半は階段に集中しているようだ。

フラン「よし、さっさとやっちゃお！レイジ！」

レン「先頭にいるアラガミ達の侵攻が止まっています。誰かが足止めをしているかもしれません」

アーティ「ならとつとやつつけてやんなきゃね！」

妖夢「くっ……攻撃がまるで効いていない！」

依姫「これは厄介な相手ね……」

妖夢「どうします！？このままでは私達の身も危ないです！」

依姫「ツ……仕方がない、私がここで食い止めるから、あなたはお姉様達に安全な所に避難するように伝えて！」

妖夢「そ、そんな！無茶ですよ！」

依姫「わかってる！でもこのままだと皆やられるわ！」

妖夢「・・・ッ、わかりましゅ」

妖夢が仕方なく依姫を置いて幽々子達の元へ向かおうとすると、階段の下の方から誰かの声が聞こえてきた。こんなところに誰が？と思って見てみると、楽しそうにアラガミをきゅっとしてドカーンするフランが楽しさで笑い声を上げている。そしてフランが取りこぼしたアラガミを斬り倒すレイジの姿があった。

フラン「あははははは！楽しいね〜！」

アーティ「まったく、ガキつてのはよくわかんないわ」

レン「ん、あそこにいるのは足止めをしていた人達でしょうか？無事みたいですな」

アーティ「余所見してる場合かつての！まだこんなにいるのに！」

レン「どうやらあそこから先にアラガミはいないようです」

アーティ「あつそ！」

妖夢「・・・え・・・彼らは・・・？」

依姫「あの怪物達をいとも容易く・・・はッ」

妖夢はポカンとしている。ふと依姫はレイジへ視線を向けると、彼の持つ神機にとある気を感じた。

依姫「（・・・！？この気は・・・！）」

咄嗟に依姫は刀を強く握りしめる。硬い表情をする彼女に妖夢が声を掛けた。

妖夢「どうしました？」

依姫「彼のあの武器・・・ただの剣じゃない」

妖夢「・・・え？」

依姫「まさか・・・。信じたくはないけれど・・・」

妖夢「???」

フラン「よっし、おーしまいと！」

レン「今回は結構骨が折れましたね」

アーティ「足場が悪くって仕方なかったわ」

レイジ「・・・」

階段での戦いだったため、足場の悪さから少し討伐に手間取ってしまった。息を整えながらお互いの無事を確認する。どうやら全員無事なようだ。よかったと安心してしていると、

依姫「そのあなた、ちょっといい？」

依姫はレイジに声を掛ける。レイジも無事かどうか尋ねた。

依姫「ええ、おかげでケガはなかったわ。ありがとう。突然だけど、あなたに一つ訊きたいことがあるの」

レイジ「？」

するといきなり依姫は刀を突き付けてきた。レイジはワケがわからず困惑する。妖夢もこの行動には意外だったようで、焦り始めている。

依姫「あなたは「神殺し」？」

レイジ「・・・!？」

アーティ「ハア？何言ってるのこいつ」

妖夢「依姫さん、神殺し……て何ですか……？」

依姫「文字通りの意味よ。神を殺せるくらいの力を持つ者……。先程の怪物達から少しだけど、神の気を感じた。私は彼らが何なのかは知らないけれど、神の一種であることは確か。神は普通は倒せない。倒してはならない。それを易々と倒し、禁忌を犯すあなたは、神殺しの可能性がある」

アーティ「おまえは何を言っているんだ」

神殺し……。神機使いは神を「喰らう」者であって神殺しではない。アラガミはその荒ぶる様から八百万の神に喩えて「アラガミ」と名付けられたが、厳密に言えばただのモンスター。決して神の一種ではない。……そのはずなのに、依姫の言う限りではそんなアラガミ達に「神の気」というものがあるらしい。本来神ではない存在が神になれることなどあり得るのだろうか。とにかく自分は依姫の言う「神」を殺す存在ではないと訴えた。

依姫「ならその武器は何なの？神を軽々葬れる剣など、そこらへんにあるものではない。あなたが神殺しである可能性は十分にある！」

妖夢「依姫さん！彼らは私達を助けてくれたんですよ！？なのにいきなりワケのわからないことを言っ」

依姫「妖夢、一口に神といっても全ての神が優しいわけではないの。いきなり襲ってきたとはいえ、警戒して様子を見るだけだったらに攻撃してこなかったでしょ？それに神殺しは地上でも月でも居ては

ならない存在。・・・あなたは神を殺すことがどういうことかわかっているの？」

妖夢の言葉を遮るように口を挟み、その後レイジに向かい神を殺すことを咎める。

アーティ「わかんないわね。神は救いの手を伸ばしてくれなかったし、あたしらには崇拜する神などいないから」

レイジ「・・・」

アラガミは神ではない。ただの怪物だ。名前がそうであって決して神ではない。そして自分は神の名を騙る怪物をこの世から消すために戦っている。レイジは誤解を解こうと真剣な表情で依姫に訴えた。

依姫「・・・」

アーティ「いい加減イライラしてくるわね。話を聞かないヤツはこれだからもう・・・」

レン「押さえてください……。怒ってはいけません」

依姫は突き付けている刀を下ろし、一步後ろへ下がった。ようやく理解してくれたかと張りつめた空気が緩む。しかし・・・

依姫「ふッ！」

レイジ「!？」

なんと突然レイジに斬りかかってきた。レイジは驚きつつもそれかわす。

妖夢「よ、依姫さん!？」

依姫「・・・今はほぼ全力で振った。不意を突いたのにそれを容易く避けてみせたあなたを見て確信に変わったわ。あなたは間違はなく神殺し！」

アーティ「なんでそーなる」

依姫「妖夢、ここでは確か揉め事が起こったらスペルカードルールでケリを付けるのね？」

妖夢「そうですけど、いけまs」

依姫「我が名は綿月依姫！神霊の依り憑く月の姫なり！神を屠りし大罪人よ、神に代わり、我が刃にて裁きを下す！」

刀を構え、こちらを見据える依姫。その背後から気のせいだろうか、数え切れないほどの神のような姿をしたオーラが彼女を包んでいた。その姿は神々しいともいえる雰囲気放っている。

フラン「おー・・・」

アーティ「・・・もうイライラを通り越して呆れるわ」

レン「残念ですが、もう話は聞いてくれそうにないですね・・・」

レイジ「・・・」

豊姫「・・・!」

幽々子「ん？どうしたの？」

豊姫「あの子、変なことしてないかしら・・・」

幽々子「よっひゃんおほほ？あいうっやあい？もぐもぐ（訳：よっちゃんのこと？大丈夫じゃない？）」

豊姫「あの子、ちょっと突っ走り過ぎちゃうことがあるから・・・ていうか口に含んだまま喋ってはいけませんよ」

幽々子「いいやんウエふに〜（訳：いいじゃん別に〜）」

Mission 17 ゴッドキラー（後書き）

弟「俺のよっちゃんがこんなに猪突猛進なわけがない」

作「儚月抄コミック持ってねーもん！wikiとかで性格は大体わかるけど口調が全然わからねえ！」

弟「月は謎が多いなまったく。・・・で、次は無双でもするつもりか？」

作「さあ・・・」

Mission 18 プロテクトウェポン（前書き）

皆さん、おはこんばちは、wingです。アクセス数の報告に誤りがあつたためこの前書きは訂正致しました。2011/10/31の段階ではユニークが2600超え、pvが1万7000超えとなっております。

Mission 18 プロテクトウェポン

くサヤカsideく

サヤカは一人山の中を奔走。魔理沙が足止めをしてくれているが、たった一人では何人か取りこぼしてしまうだろう。地図を渡してもらっても見ている内に発見されてしまうかもしれないので、魔理沙がサヤカを逃がす直前に言っていたことを頼りに山の中を進んでいた。

—— まっすぐ走れ！そしたら川が見える！上流へむくうわっと！
—— たく最後まで喋らせるよな！このツ！チツ・・・早く行け！——

サヤカ「魔理沙さん・・・」

魔理沙は無事だろうか。走っている間、心の中で常に魔理沙の無事を祈っていた。時々弱気になってはそんな自分に大丈夫だと言いつけたり、もう頭が一杯といっても過言ではなかった。そうしている内に突然視界が開けた。目の前には川。山で一騒ぎ起きているというのに、まるで気にも留めていないかのように静かだ。ただマイ

ペースに水は下流へ流れ続ける。サヤカは今まで綺麗な川を今まで見たことがなかったので一瞬見とれてしまった。そのおかげで魔理沙の無事を願うあまり混乱した思考が正常に戻る。

サヤカ「（確か上流へ行けって言ってたよね・・・よし）」

川の流れを確認し、上流へ向かう。川の付近は見渡しが良いため、木々に紛れながら行くことにした。

サヤカ「（ん、あれは・・・）」

上流へ向かい始めてまだ間もない時に大きな岩が一つ、サヤカの手を阻むかのようにそびえていた。とはいっても少し木が茂っている所を通って迂回すれば難なく通れる。それに岩の裏側は木や草が一層多く茂っており、隠れることも出来そうだ。先程から殆ど走りっぱなしだったので、体が休息を求め勝手に動いていた。岩陰で一息つき、まだ見ていなかった魔理沙からの地図を読むことにした。

サヤカ「（うわ、すごい大雑把・・・これ見るくらいならさっきの説明の方がまだわかりやすいよ・・・）」

思っていたよりも遥かに低レベルの地図におもわず溜息を漏らす。

その時。

「どう？見つかった？」

「いんや、まだ。ここらへんにいるはずなんだけどなあ」

サヤカ「・・・！」

誰かの声が近くで聞こえた。会話からして自分を探しているのだろう。サヤカは見つからないよう注意しながら岩陰から様子を見る。

「さっきここを通ったのかな、匂いがまだ濃い」

「じゃさつさと探そ。まったく、めんどくさいなあ」

サヤカ「（匂い・・・？会話を聞く限り嗅覚が鋭いのかも）」

自分を探していると思われる天狗は二人。白狼天狗で、獣の耳がある。あの容姿で獣耳ということは、人間より感覚が鋭いのかもしれない。会話から聞き取れた限りでは嗅覚が優れていること。しかし視覚や聴覚も鋭い可能性もある。サヤカは天狗の動きに注意しながらその場を離れようと姿勢を低くして動き出す。音が極力鳴らないよう草木を掻き分けて進み森の中へ入っていく。どうにか距離を離し、天狗達も辺りをキョロキョロしているだけで気付いていない様子。一安心して歩みを進めようとした。すると突然、

パキパキッ

サヤカ・天狗「！」

足から何かを折ったような音が聞こえてみると、木の枝を踏んでいた。しかも川の水が流れる音以外は何もなかった。天狗達に音を聞かれてしまった。

天狗「誰だ？」

サヤカ「（や、やばッ！！）」

天狗達は音のした方向、サヤカのいる場所へ近づいてくる。サヤカは急いでその場から離脱した。慌てて動いてしまったためバレたかと思い振り返ってみたが、こちらを補足した様子は見られなかった。サヤカは慌てて飛び出した勢いのまま走り、川を視界に入れながら上流へ。天狗達が完全に見えなくなったところで足を止めた。

サヤカ「ふう・・・（なんとか撒いたかな・・・川の水もより綺麗になってきてるし、そろそろ着くかも）」

そう思っている頃には、目の前に変わったものが見えていた。山の中に紛れるようにして工房のような場所がある。もしかしたらここに魔理沙の言っていた河童、にとりがいるのだろうか。周囲に追っ

手がないことを確認し、工房へ向かって歩き出した。工房の中にも天狗がいる可能性は否めないの、身を隠せそうな場所に隠れながら見える範囲の隅々まで目を通しておく。一通り様子を見て大丈夫だと判断し奥へ進んでいった。

見渡す限り機械で一杯だ。それに開放的な作りになっている、というよりむしろ家の断面を見ているかのようだ。不思議な構造をしているとはいえ、ここに住む者は相当の技術力を持っているのだろう。恐らくにとりという河童が住んでいる可能性が高い。一体どんな人（？）なんだろうと思いつながら工房を歩き回る。すると台所のような場所に辿り着いた。そこで冷蔵庫の中を漁る少女が一人。まだこちらには気付いていない。

？「ふ」

サヤカ「（あの人・・・にとりって人なのかな・・・？）」

少女は冷蔵庫から胡瓜を取り出し、心待ちにしていたのか急に踊り出した。

？「まんまん満足 一本満足（ボリッ）」

サヤカ「・・・！？」

？「まんまん満足 一本満足（ボリッ）」

サヤカ「・・・（。D。）」

？「とってもヘルシーで私、満足・・・なーんてね、ははははは」

サヤカ「・・・」

少女はようやくこちらに気付き、「こちらも驚くほど驚いた。

？「ひゅいッ！?!？」

サヤカ「・・・（。D）」

？「・・・み、見た・・・？」

サヤカ「・・・（コク）」

？「・・・（。D）」

サヤカ「・・・（。D）」

？「みいいいたあああなああああ！！！」

顔を真っ赤にしてこちらに飛び掛かってきた。表情が恐ろしいもの（にちより）へとなっているが、見られたことへの恥ずかしさで顔が赤くなっているからか怖さは殆ど感じられない。突然飛び掛かってサヤカを押し倒し、ぽかぽかと殴っているが、サヤカは冷静さを保っていた。

サヤカ「あ、あの、あなた」

？「このこの！人ん家に勝手に入ってくんじゃなあああい！／＼／」

サヤカ「あのっ、ちょっといいです」

？「うるさいうるさい！覗きなんて万死に値する！／＼／」

サヤカ「あなたはッ！！」

？「ッ！？」

話を聞いてくれそうになかったので、サヤカは叫ぶようにして呼ぶと、少女はビクッと動きが止まる。

サヤカ「・・・にとりさんですね？」

にとり「え・・・？なんで私の名を？」

サヤカ「魔理沙さんが教えてくれました。あと、あなたに用がありました」

にとり「なんだ、魔理沙の友達だったんだね。盟友の友は盟友さ！」

意外にあっさりと受け入れてくれた。にとりに案内され、リビング（でもやっぱり開放的で外から中が丸見え）と思われる部屋に来た。そこでサヤカはにとりにここを訪ねた理由を話した。もちろん、アラガミに関してのこと。

にとり「へえ・・・私は基本ここにいるからそんなことが起きているとは知らなかったよ」

サヤカ「え、新聞とか読んでないんですか？」

にとり「いや、私は読んでないよ。機械を弄る方が面白いからさ」

サヤカ「・・・ここにある機械は全てあなたが？」

にとり「ああそうだよ。これくらいは軽い軽い・・・おっとそうだが君の武器を強化するんだったね。・・・あ」

サヤカ「・・・？」

にとり「そういえば・・・魔理沙はどうしたんだい？」

サヤカ「あ・・・」

すっかり忘れていた。ここに来た理由を話した時に何故気付かなかったのか。アラガミについて解り易く説明しようとするあまり魔理沙のことを話しそびれていた。サヤカが言い辛そうに口を開こうとすると、

文「魔理沙さんならここですよ」

サヤカ「!？」

突然外から声が聞こえ振り向くと、文が立っていた。他にも柵やサヤカが見た白狼天狗などおよそ7人くらいが文の後ろにいた。それだけではない。柵の隣に、縄で縛られた魔理沙がいるのだ。ちなみに魔理沙を拘束している縄は柵の腰に巻きつけてある。サヤカは驚愕し、魔理沙の無事を確かめようと名を叫ぶ。

サヤカ「魔理沙さん！」

魔理沙「わりい・・・しくじっちゃった・・・」

文「慣れないことを無理にするからですよ」

魔理沙「・・・るせエな」

魔理沙はあからさまに反抗的な態度を見せる。文は気にせず笑顔でサヤカに話しかけた。

文「初めましてサヤカさん。私は幻想の伝統ブン屋、射命丸文と申します。以後お見知り置きを。あそれと「文々。新聞」はお読みですか？アレ、私が書いてるんです。驚きました？」

普通のサヤカなら素直に感嘆の声を漏らしていただろう。しかし今はそんなことはどうでもいい。魔理沙を助けなければ。

サヤカ「・・・魔理沙さんを放してやつてくれませんか」

文「あやや、無視ですか・・・もちろん解放しますよ。あなたが山から出てつてくれればねえ」

サヤカ「どうして出てかなきゃいけないんですか」

文「それはあなたの存在が私達に害をもたらすからです」

サヤカ「・・・？」

にとり「どういうことだい？文。見た感じ危ないとは思えないけど」

文「にとりさん、危ないのは彼女の存在そのものじゃありません。彼女がいることでアラガミが寄ってくるんですよ。間接的にってことなんです。アラガミはサヤカさんともう一人、レイジさんという人でなければ倒すのがそれはもう面倒なことでした」

サヤカ「・・・！」

文の言い回しが耳に障り、サヤカはイラつきを覚える。

にとり「今サヤカから話を聞いてたけど、そのアラガミってのを幻

想郷から排除するため武器を強化するために私を訪ねてきたみたいだよ？」

文「あやゝそーだったんですか。ならばあなたが山から出張していけばよかつたじゃないですか」

魔理沙「サヤカへの嫌味のもりか？あいつはそこまで外向的でないことを知ってるくせに」

文「あなたは黙っててください。一応捕虜なんですから」

魔理沙「・・・チツ」

サヤカ「私は用が済むまでは下りるつもりはありませんよ」

文「あやや、困りましたねえ。こちらとしては穩便に済ませたいのですが」

サヤカ「魔理沙さんを縛っておいてよくそんなことが言えますね」

文「全くです。自分でも矛盾してるとは思ってるんですよ」

サヤカ「・・・ならなぜこんなことを？」

文「あなたをここから追い出すためです」

サヤカ「・・・私は追い出されるつもりもないです」

文「うゝん困りました。・・・ならば仕方ありませんねえ。こうなったら力づく」

にとり「そこまでだ！」

サヤカ「!？」

埒が明かないと思ったのか、大きめのリュックを背負ったにとりがサヤカの前に出て立ち塞がった。サヤカはもちろん、文も目を丸くしている。

にとり「サヤカは依頼主だ！文、お前達がサヤカを追い出そうとするのなら、私はお前達をムツトバス！」

文「にとりさん・・・そこで嘸まないでくださいよ」

にとり「う、うるさいな！とにかく、そっちが力づくで来るのなら、こっちだって黙っちゃいないよ！」

にとりがやる気になってしまったため空気にこのまま戦闘に入るかと思われた。サヤカは戦闘態勢に入っているにとりを制止し、にとりの前に出て文に話始める。

サヤカ「射命丸さんでしゅ」

文「文で結構ですよ」

サヤカ「・・・文さん。あなたがあの新聞を作っているのなら、ア

ラガミがどれくらい危険な存在なのかわかるはずです。でも、これは多分あなたも知らないことだと思います。アラガミは私達の武器でも完全に葬ることは出来ません。死んだアラガミの体は霧散し、別の場所で新たな個体を作り出すんです」

それを聞いた天狗達（文以外）はざわつき始める。文は天狗達を「静かに」と軽く注意し、サヤカへ向きなおす。

文「あやゝそれは大変ですねえ。今日はネタに困らなくて済みそうです」

サヤカ「・・・別に好きにしてくれて構いません。でもこれだけは言わせてください」

文は飄々としていて掴み所がわからない。上手く説得できるかわからないが、サヤカは思ったことを素直に吐き出す。

サヤカ「私達はゴツドイター。神の名を騙る怪物を喰らい世界を守る存在です。私は奴らをこの世から排除するためにとりさんを頼ってここに来ました。文さんの言いたいことはわかります。私だって同じことをするでしょう」

文「・・・」

サヤカ「ここは私達のいた世界とは違うけれど、私達の世界にない素敵なものがたくさんある。私はそれらを守りたい。こんな素晴ら

しい世界で、皆が苦しむ姿は見たくありません。私はこの世界を守るため、新たな力を得るためにここに来ました。・・・どうか魔理沙さんを放し、退いてはくれませんか」

文「・・・嫌だと言ったら？」

サヤカ「その時はあなた達を倒してでも、この世界を救う努力をするつもりです・・・！」

にとり「サヤカ・・・」

サヤカは神機を持つ手を強く握りしめる。文以外の天狗達はサヤカの言葉を宣戦布告と見なし身構える。

魔理沙「バカ、そんなことをしたらこの山中の天狗を敵に回すことになるぞ・・・！」

魔理沙はサヤカに制止を呼びかけた。しかしサヤカは少しも動揺せず文の目を見続ける。すると文は突然笑顔で返してきた。

文「わかりました。いいですよ」

以外にもあっさりと認めてくれたので、面食らったような顔をするサヤカ。サヤカだけでなく文以外の全員が驚いたような顔をしている。

サヤカ「・・・え」

文「それだけの固い意志を持っているのなら問題無さそうですね」

椀「え・・・いいんですか!？」

文「いいんです、私達はアラガミ対策は一応考えてあるでしょ？」

椀「た、確かにそうですけど、驚異はなるべく少ない方g」

文「椀、あんまりしつこいと嫌われますよオ？」

椀「で、でもお・・・」

文「さゝ皆撤収」。大天狗様へは私から報告しときますんで、各々持ち場に戻りましょう」

サヤカ「・・・よくわかんないけど、わかってくれた・・・のかな」

にとり「みたいだね。私も安心したよ」

魔理沙「あんのカラスう・・・縄解いてから帰れよ・・・畜生、やっぱ自力じゃ無理だ、サヤカ、にとり、手伝ってくれ」

サヤカ「あ、はい」

にとり「やれやれだね・・・」

文達は帰っていったが、魔理沙はそのまま放置されていた。とりあえず縄を解いてやり、服に着いた汚れも払った。その時には太陽が真上に上ってきていたので昼食を取ることにした。しかし・・・

サヤカ「胡瓜ばかり・・・」

魔理沙「ああ、河童だから仕方ないとはいえ、いい加減飽きるぜ・・・」

にとり「どうしたの二人とも？食欲ないのかい？」

サヤカ「何か他にないんですか・・・」

魔理沙「胡瓜以外でな・・・」

にとり「うーん、他には胡瓜味のビールとか、胡瓜味の初恋ジュースとか、胡」

サヤカ「胡瓜しかないじゃないですか・・・」

魔理沙「初恋ジュースって何だよ・・・」

結局文の行動の意図がわからなかったが、その日の昼食は忘れられない思い出になったそうな（笑）

Mission 18 プロテクトウェポン（後書き）

作「そろそろ涼しくなってきたな」

弟「学校ウツダ・・・（´A、´）」

作「同感」

弟「リアルに幻想入りしたらって思ったことねーか」

作「同感。チートな能力持っていたらこうしてるとか最近登校時間によく妄想してる」

弟「・・・」

作「・・・」

弟「・・・現実見よつか・・・そろそろ」

作「ウツダ・・・（´A、´）」

Mission 19 ゴーストファイター（前書き）

皆さん、おはこんばちは。wingです。今回はゴッドイーターバーストに出てきたセリフが後半からもりもり出てきます。ネタバレ注意です。相変わらず綿月姉妹のキャラ崩壊の可能性ありなのでこちらも注意です。

原作ゼリフ入れたら1万5000文字近くなってしまいました・・・
。どうしてこうなった

Mission 19 ゴーストファイター

レイジside

白玉楼にてレイジは依姫に突然濡れ衣を着せられ、勝負を仕掛けられてしまった。レンの言った通り聞く耳を持つとせずつ説得を試みようとしても

依姫「問答無用！」

の一言でバツサリだ。その上場所が階段と足場が悪く、足元をきちんと確認しなければすぐ体勢が崩れ、攻撃を受けてしまう。依姫は足元を見る様子がみられないのにも関わらず転ぶことはおるか躓きさえしない。もしかしたらレイジを倒すことで躍起になっているのかもれないが、依姫は落ち着いた表情をしているのでそれはないだろう。とはいえ、先程から依姫が攻撃、レイジが避けという状況が続き、膠着状態となっている。なんとかしなければならぬが、いい方法が思いつかない。

アーティ「あいつつたらもう・・・傷つけないようにとか変なところに氣イ使うもんだから押される一方じゃない。正当防衛として反撃してもいいだろうに、ホントワケのわからないヤツよ」

レン「いえ、神機は人に対しては非常に危険なものです。レイジさんの気持ちはわかります」

フラン「うー、ワンパターンでつまんない・・・私も混ざろつと」

変わらない状況に飽きてきたフランはふわふわと依姫の背後側へと飛んでいく。レイジからは避けながらその姿が見えたが、依姫の激しい猛攻により注意を向けられない。依姫の後ろに来たフランは意外な行動に出た。

フラン「わっ！！」

依姫「わあああっ！！？」

あまりにも場違いな行動に全員びっくり。依姫の驚きっぷりにもまたびっくり。依姫は驚きで息を荒くしながら今度はフランに刀を向ける。

依姫「忘れていた・・・。あなたも彼らを倒していた一人だったわね・・・あなたは何者？」

レイジはフランを傷つけさせまいとフランの前に出て立ち塞がる。しかしフランが「私にも出番ちょうだい！前回私空気になりかけたんだから！」とレイジを押し退け前に出た。

フラン「私はフランドール！フランドール・スカーレット！レミリ

アお姉さまの妹で吸血鬼だよ！」

腰に手を当て、高々と声を張り上げて自己紹介する。

依姫「（レミリア・・・吸血鬼・・・まさか彼女に妹がいたとは・・・。しかも彼らを簡単に葬っているところを見ると彼女よりも注意が必要ね）あなたは何故、ここにいのの？」

フラン「決まってるじゃん、幻想郷中にいるあいつらをムッコロスためだよ！」

依姫「殺す・・・ですって・・・？」

わなわなと怒りを露わにする依姫。誤解をさらにエスカレートさせてしまったようだ。

依姫「・・・やはりあなたも、神へ仇なす存在なのね」

フラン「違うよ、吸血鬼だよ」

依姫「そんな吸血鬼、修正してやる！」

また話を聞かずに斬りかかってきた。レイジが再び前に出て攻撃を止めようとすると、妖夢が突然飛び出してきて楼観剣で受け止めた。

依姫「妖夢・・・！？」

妖夢「依姫さん！いい加減にしてください！彼らの行動を見てまだ気付かないんですか！まだ一度もあなたを攻撃しようとしていないでしょ！」

依姫「演技である可能性は否めないわ。そこをどいて」

妖夢「嫌です！」

鰐迫り合いの状態から妖夢は刀に力を籠め依姫を押し退ける。

依姫「そう・・・ならば仕方ない」

そう言いながら依姫は刀を地面に突き刺した。すると妖夢の周りに何本もの刃が地面から現れて取り囲んだ。

妖夢「えっ！？これは・・・」

依姫「動かないでね。動いたら祇園様の怒りに触れるわ・・・終わったらすぐに解放してあげるから」

妖夢「くっ・・・」

アーティ「あいつ、味方を躊躇なく・・・！」

フラン「よくわかんないけど、味方を動けなくするっていけないと思うなあ」

拘束されることで感じる苦痛を、フランは嫌というほど理解している。外のことをあまり知らなくても、これだけはよくわかるのだ。

依姫「まさかこんな所で急用ができるとはね・・・」

依姫は刀をもう一本抜き、また地面に突き刺した。無数の刃がレイジとフランを囲む。動いたら危険なことが起きるらしいが、大体想像はつく。刃がこちらを襲ってくるなりするのだろう。レイジは自分と刃の位置を確認する。この時点で首を動かしていたため「動く」ことになってしまっているが、刃に動きはみられない。恐らく抵抗をするといけないのだろう。とりあえずフランに下手に動かないよう伝えておく。

依姫「抵抗を止めなさい。これからあなた達を月へ連行し、然るべき罰を受けてもらいます」

フラン「ねーねー、月ってさ、空よりずーっと高いうちゅーってとこにあるってお姉さまから聞いたの。うちゅーには空気がないってことも聞いたんだけど、私達が行ったら死んじゃうんじゃない？」

依姫「月面付近には空気があるから死ぬことはないけれど、月で重罪を言い渡されることは確かね。下手をすると向こうで死ぬことに

なるかもしれない」

フラン「んゝ・・・しけいつてヤツ？死ぬのはやだなあ」

依姫「私もあまり誰かが死ぬのを見るのは好きじゃないけどね・・・

」

妖夢「なんで・・・彼らは私達を助けてくれたのに・・・！」

アーティ「れいじゝ、もういい加減ブツ飛ばしてもいいと思うんだけどお？とりあえずその周りに生えてるヤツぶった斬っちゃいなさいよ」

アーティは完全に呆れ果てた口調でレイジに決着を付けるよう話しかけてきた。言われなくてもやるつもりでいる。横薙ぎにして一気に切り崩さないと「祇園様の怒り」とやらの触れるため、フランに伏せるよう言うておく。

フラン「うー」

返事をした後しゃがみガードをするフラン。その愛らしさに一瞬口が緩むがすぐに気を取り直し、神機に手を伸ばした後周囲を薙ぎ払うようにして一気に振り抜く。地面から生えていた刃は皆バラバラになった。

依姫「なっ・・・刃の檻を破った・・・！？」

フラン「よっし、反撃開始ー！禁忌「レーヴァテイン」！」

フランの手に長い剣が現れ、大きく振り回し始めた。剣が階段に当たると深く抉れて軽い爆発が起きる。

依姫「なかなかの威力ね・・・でも」

依姫は軽々と避け、フランの眼前に迫り剣を振り下ろす。

依姫「技は未熟！」

フラン「うッ・・・！」

フランはなんとか依姫の攻撃を受け止められたが、無理な体勢で受け止めてしまったため次第に押され弾き飛ばされてしまった。レイジは吹き飛ばすフランを受け止める。

フラン「あ・・・ありがとう、レイジ」

レイジ「・・・」

フラン「うー、もう本気出しちゃうー！禁忌「フォーオブアカインド」！」

今度は4人に分身して攻撃を始めた。しかしこれも容易にかわされている。

依姫「頭数だけ増やしても私の敵ではない！」

フラン（分身）「ふぎゃっ！（ピチューン）」

フラン（分身）「ぶっ！！（ピチューン）」

フラン（分身）「えっうs（ピチューン）」

フラン「あれ・・・」

レイジ「・・・！？」

レン「分身とはいえ、ここまであっさりとやられるなんて・・・」

アーティ「5秒も経ってないんじゃない？」

あまりの速さに呆然とするフラン。レイジ達は驚いている。依姫は依然として落ち着いた様子である。

依姫「無駄な抵抗は止めなさい」

フラン「む、無駄かどうかわかるもんかい！」

依姫「無駄じゃない抵抗も止めなさい」

フラン「うゝ・・・なら、とっておき見せちゃうもんね！レイジ、離れてて！」

レイジ「・・・？」

一体何をするのか気になったが、レイジはとりあえずうなずき、距離を置く。

フラン「夢幻——幻月——！」

フランが両腕を前に突き出すと、圧倒的な量の弾が高速で発射された。あまりに速いため、レイジもこれは自分では避けきれないと思った。まるで暴風域のただ中にいるかのように激しく乱れ飛ぶ。

依姫「なるほど、これは中々避けるのが難しそう」

依姫はそう呟きながら刀を構える。彼女の体が段々淡い光で包まれる。

依姫「あめのつゆめのみこと 天宇受売命」

スペルカード名にしては珍しい名前だ。「みこと」の時点で神か何かの名前にしか聞こえない上攻撃する気配がみられない。何をするのか全く読めない中、フランの弾幕が迫ってくる。依姫は回避行動に移るが、その避け方が非常に特異なものだった。

フラン「あれ・・・？」

レイジ「・・・！？」

妖夢「これは・・・」

レン「踊っている・・・！？」

アーティ「・・・（避け専用のスペカ・・・？でもそれだけではないはず・・・）」

避けているはずなのに、踊っているようにしか見えない。刀を使った演舞を見ているかのようなようだ。その美しい動きに思わず魅了されそうになる。

依姫「この舞はただ避けるためのものではない」

フラン「うゝ、当たれ当たれ！」

フランは弾幕を当てようと必死になるが、依姫は華麗な動きで避けていく。この状況がしばし続いた後、状況は悪化する。

ドンッ！

突然依姫は刀を地面に突き立てる。すると地面から再び無数の刃が現れ、フランの体を拘束した。身動きが取れなくなり、弾幕も消えてしまう。

フラン「うっ！！」

レイジ「！」

刃を断とうと神機を振ろうとするが、今度はフランが身動きが取れないような配列になっており、断とうとすればフランをも傷つけてしまう。しかもフランがもがけばもがくほど刃がより強く縛り付けてしまうため、すぐに助けられない。素手で外そうとしてみるがやはりビクともしない。

依姫「フランドール・・・と言ったわね。そろそろ終わりにしまし
よう。大丈夫、殺しはしないから・・・」あまてらすおかみ「天照大神」

依姫は刀から手を放し、目を閉じて小さな声で詠唱を始めると、段々彼女の体を包む光が強くなる。天照という言葉聞きレンが急に

走り出し、レイジに向かって声を張り上げた。アーティも遅れて走り出す。

レン「レイジさん！装甲を展開してフランさんを守ってください！早く！」

アーティ「ちょレンツ！急にどうしたの！？・・・ああそゆこと、把握」

突然のことだったのでレイジはレンの言っていることに一瞬頭が追いつかなかったが、すぐに理解した。恐らく日光を放つかもしれないから三人で日陰を作ろうということなのだろう。日光を放つとすれば吸血鬼にとって危険な技だ。レンの心中ではまず自分が神機の装甲を展開し、フランから見て前に立つ。アーティはフランの眼前で装甲を展開、レイジはレンの右隣で防御体勢に入って陣を組む。この構想をレイジとアーティに伝えようと口を開いた時、

レン「えっ！？」

アーティ「レイジ！？」

フラン「うゝ、動けないゝ！」

なんとレイジは装甲を展開しながら依姫に向かってダッシュしているのだ。

思いもよらない行動に二人は驚愕する。

依姫「~~~~・・・・（ドガッ！）はぐッ！！？」

なんと装甲を構えながら詠唱中の依姫に体当たり。そのまま押し倒す体勢になる。レイジは装甲をたたみ刀身を依姫の首筋に宛がう。

依姫「くっ・・・しまった・・・！」

レイジ「・・・」

アーティ「なる、あたし達が防御体勢を取ると先読みして詠唱に集中してるところを狙ったのね。体勢がちょっとアレだけど」

レン「結果的に「装甲を展開してフランさんを守り」ましたね・・・」

フラン「うー・・・レイジ・・・」

妖夢「さっきから私空気すぎる・・・」

依姫は無念と思いながらに目を閉じる。抵抗しないことから死を覚悟しているのだろう。しかしレイジは殺すようなことはしない。

依姫「・・・何故止めを刺さないの？」

レイジ「・・・」

レイジは神機を持っていない方の腕でフランのいる方向へ指を指す。
その後妖夢の方にも指を指した。

依姫「・・・？解放しろと・・・？」

レイジ「（コク）」

レイジが立ち上がった直後、遠くから誰かの声が聞こえてきた。

豊姫「あなた達！何をしているの！？」

依姫「お、お姉様・・・」

レイジ「・・・？」

レン「レイジさん、ひとまず彼女に状況を説明しておきましょう。
また怪しまれるかもしれませんし」

アーティ「こいつより物分かりがいいと安心だけど」

レイジ「（コク）」

〈数分前、白玉楼、居間〉

豊姫「幽々子さん」

幽々子「んー？あーい？（訳：んー？なーに？）」

豊姫「先程から妙な気配がするので大食い勝負一時停止してもよろしいですか？」

すると幽々子はピタツと固まった。

豊姫「あ、すみませんそっちじゃないです。少し外の様子を見に行きたいので一時中断をs」

幽々子「よっひゃんうウェひょ？むっしやむっしや（訳：よっちゃんでしょ？）」

豊姫「ええ、神霊を降ろしているかもしれないので・・・」

幽々子「よっひゃんそんあこほれきうお？すをいわえ〜。ああほれはほもかく、いつへらっひゃい。もぐもぐ（訳：よっちゃんそんなこと出来るの？すごいわね〜。まあそれはともかく、いつてらっしやい）」

豊姫「すぐ戻ってきますね」

「現在、白玉楼へ続く階段」

レイジは豊姫にこれまでの状況を説明した。途中で

豊姫「さっきのあの体勢を見て思ったんだけど、私の妹に何をするつもりだったのか教えてくださる？」

笑顔なのにドス黒いオーラを背後から放ちながら訊いて来たりとまたまた誤解されそうになったが、しっかりと説明したので納得してくれた。依姫も誤解していたことをようやく理解し、レイジに謝罪した。

豊姫「ごめんなさい、この子は一度こうだと決めたら中々考えを改めないところがあるの。決して悪気があったわけじゃないので、どうかお許してください」

畏まってペコリと頭を下げ謝罪する豊姫。そこまでする必要はないと頭を上げるように言う。

豊姫「ありがとう……。依姫、二人を」

依姫「あ、はい」

依姫が地面に突き刺してそのままだった二本の刀を抜き、フランと妖夢を解放する。

フラン「うゝ……。おおっ！ やつと抜けれた！」

妖夢「ふう……。」

依姫「二人とも……。ごめんなさい」

妖夢「いえ、いいんです。自分が間違ってたことに気付けたなら」

フラン「次は負けないんだからね！」

なんとか一件落着。しかし豊姫は依姫のやったことに憤りを隠せな
いでいた。先程レイジに向けた「笑顔だけど怒ってる」表情を依姫
に向ける。それを見た瞬間、依姫の顔は真っ青になっていった。

豊姫「依姫。私あなたに地上で神降ろししちゃいけないって言った
でしょう？ 第二次月面戦争が起きる少し前、博霊の巫女さんが神降
ろしの練習してたことを月の皆はあなたがやってると思ひ込んでた
の、忘れていない？ 危うく反逆罪になるとこだったのよ？」

依姫「あ……。はい」

豊姫「あの時はあの巫女さんが偶々月に来たから誤解を解くことが出来たけど、今回はそうもいかないのよ？あなた後先のこと考えてた？」

依姫「あ．．．う．．．」

豊姫「．．．表、出ましょうか」

妖夢「ここ、表ですよ．．．」

豊姫「あ．．．ゲフン、じゃあ、ちよつと屋上へ行きましょう．．．
久々に．．．キレちゃったわ」

妖夢「ここから白玉楼までちよつと距離あるんですけど．．．」

豊姫「．．．。じゃあ白玉楼に着いたら二人きりで「お話し」しましょうか．．．」

豊姫は満面の笑みを浮かべる。対照的に段々涙目になる依姫。

依姫「ひいひい．．．！」

アーティ「まあ自業自得ね．．．ってなんでこいつこんなに怖がつてんの？」

レン「あまり考えるのは止めておきましょう．．．」

フラン「ねーねーよっちゃん、なんでそんなに怖がってるの？お説教くらい私は泣かないで聞けるよ？」

依姫「そのことについてはノーコメで・・・（よっちゃんって・・・）」

豊姫「どうしたの？」

依姫「ひぎいつ！？nnnnn何でもありません!!」

（白玉楼、居間・縁側）

幽々子「おふぁえり」。あら、おひゃふはん？むぐむぐ（訳：おかえり）。あら、お客さん？）

豊姫「ええ、依姫が盛大に持て成してくれていました」

依姫「う・・・」

妖夢「幽々子様、口に食べ物を含みながら喋っちゃいます・・・ってゆーかこんな数の桃がどこから!？」

幽々子「ああ、ほよてゃんわもっへきへくれはをよ、もぐもぐ（訳：ああ、豊ちゃんが持ってきてくれたのよ）」

妖夢「いったいどうやってこんな量を・・・」

アーティ「・・・あいつ何言ってるかさっぱりだわ」

レン「僕もです。それでも通じるってすごいですね・・・」

フラン「??.?」

幽々子「よっひほよてゃん、おおんいひょうぶおトウドウきやうわよ！もごもご」よっし豊ちゃん、大食い勝負の続きやるわよ！」

豊姫「すみませんが、今からこの子に話さなくてはならないことがあるので、それが終わった後でよろしいかしら？」

幽々子「（ゴックン）むゝ、早くしてよね。私食欲抑えるの苦手なのよ」

豊姫「それでは失礼」

豊姫と依姫がその場を後にする。

幽々子「で、そちらはレミリアの妹さんだったわね。えゝっ」

フラン「フランドール！」

幽々子「そうそうそうだったわね。で、あなたは初めましてかしら」

レイジ「（コク）」

幽々子「とりあえず上がってきなさい。桃でも食べながら二人が戻ってくるのを待ちましょう」

妖夢「（さりげなく食欲抑えるの諦めた・・・）」

フラン「はい」

レイジ「（コク）」

レン「お邪魔します」

アーティ「邪魔するなら帰」

レン「そこでボケはいりませんよ」

アーティ「・・・い、言ってみたただけよ、そんなスッパリいくことないじゃない」

幽々子に誘われるがまま白玉楼でお邪魔することになったレイジ達。小腹も空いてきたところだったので、居間を埋め尽くさんばかりの桃を何個か頂くことにした。

アーティ「ん、なかなかいい」

レン「僕は桃を生で食べるのは初めてですね。今までこんなに美味しいものを食べたことはないような気がします」

フラン「んぐんぐ、おいしー」

幽々子「こらこら、食べ物をお口に含んだまま喋らないの。お行儀が悪いわよ」

妖夢「どの口が言うんですか」

幽々子「いいこと教えたげる。桃はね、7月中旬から9月上旬くらいまでのものが美味しいらしいの」

フラン「へー」

妖夢「無視ですか・・・」

幽々子「それと、美味しい桃の選び方はね、傷がないのはもちろん、色が綺麗なもの、左右対称で形がいいもの・・・」

いつの間にか幽々子が桃講座を始め、そのまま数十分間集中して聞いている。

幽々子「——とまあ、こんな感じね。何か質問ある人」

シーン

幽々子「じゃあ、これでおしまいとしましょうか。あなた達はこれからどうするの?」

レイジはポケットから結晶を取り出す。騒ぎが終わった直後だから結晶に反応はない。特に行かなければならない場所もないので、しばらくは厄介になることを伝える。

幽々子「そう。こんな所でよければ、ゆっくりしていつてね。あそうだ、丁度形のいい桃をいくつか見つけたから分けてあげる」

フラン「ありがとうー」

レイジ「(コク)」

フラン「・・・あ、なんかトイレ行きたくなっちゃった」

幽々子「トイレならそこを右に進んで、縁側沿いに歩いて行けば着くわよ」

フラン「わかった・・・うつ、なんか暗い・・・。レイジについて来て」

アーティ「じゃあたしもついてこうかな、暇だし」

居間にある時計を見てもまだ昼近くだ。どうして暗いのかわからないが他にやることもないのでついて行くことにした。

妖夢「今日はいつになく食べ物関連で力説しましたね」

幽々子「まあね。本当はフランちゃんのためにやったようなものよ」

妖夢「え？何故ですか？」

幽々子「あの子、何百年も地下に幽閉されて生きてきたワケでしょう？あのままで大丈夫なのかなーって思ってたね」

妖夢「・・・はあ」

幽々子「ここに来ているということは、自由になれたのかもね。でもレミリアがそう簡単に解放するとは思えないから、きっと彼のおかげでしょうね」

妖夢「彼は・・・外来人・・・？ていう人なんでしょうか」

幽々子「でしょうね。彼はきつとお家事情を知らないまま紅魔館に迷い込んで、フランちゃんと出会い、あの子が自由になるきっかけを作った。フランちゃんも彼と出会って外に興味を持ち、レミリアをなんとか説得、外に出れるようになった・・・ってところかしら」

妖夢「へえ・・・よくそこまで読めますね」

幽々子「確信はないんだけどね。まあどういう経緯があったにせよ、フランちゃんはやくこの世に生まれることが出来たってことね。・・・ああ社会的な意味でよ？あの子にはいろんなことを知って、経験してほしいわ」

妖夢「あの、何故そこまで・・・？」

幽々子「ふふ、まだ小っちゃい頃のあなたを思い出してね。あの頃もああしてあなたに色々教えてたっけねえ・・・」

妖夢「ええ、食べ物の話ばかりでしたけど」

幽々子「食べ物ナメちゃいけないわよ、料理のノウハウも私が教えたんだから（ドヤッ）」

妖夢「まあ確かに、素材の選び方とかも幽々子様の教えのおかげですし、料理が上手になった時も・・・」

幽々子「ふふふ、あの子が将来レミリアに負けなくらいに賢くなったらどうなるかしらwwやばwレミリアの慌てる姿が浮かんできたww」

妖夢「そっちが本音ですね、わかります」

縁側を歩きながら外を見ていると、白い魂のようなものがいくつも飛び回っているのが見えた。先程の桃講座で幽々子がさりげなくここが冥界であることを教えてくれたので、大体想像はつく。白玉楼には真珠などなく代わりに幽霊が沢山いるようだ。トイレに着き、レイジとアーティはトイレの傍で壁にもたれながら外の景色を眺める。いくつもの靈魂が踊るように空を飛び回っている。それらを見ている内に、レイジは段々切ない気分になってきた。

レイジ「・・・」

死んだ家族を思い出す。父、母、カナ、三人の魂はここにいるのだろうか。あんなにも無残な死に方をしたのだ、さぞや無念だったに違いない。レイジの目頭が少し熱くなる。

アーティ「・・・家族のことでも思い出したの？」

レイジ「・・・」

アーティ「・・・あー・・・、気にしちゃったなら、ごめん。・・・それにしても、幽霊こゝろって見えないモンだと思ってたわ。幻想郷では違うのね」

レイジ「・・・」

アーティ「こんなにはつきり見える幽霊なんて、あたしは全然怖く思えない。見えないからどこにいるのかわからなくて、恐怖を生み出すのに」

レイジにとっても、幽霊と聞いても怖いとは思わない。会ってみたと思ったことはないし霊感もないので見たこともない。アラガミの方がよっぽど恐ろしく思えてくる。しかし、今だけは・・・

会ってみたい。幽霊に。いなくなった家族の姿をした幽霊を。

レイジ「――」

アーティ「ん、何か言った？」

レイジは何も言っていないと首を振る。だが彼の表情で言いたいことがわかったような気がした。

アーティ「（・・・・・・・・）」

しばらく二人とも黙ったまま景色を眺め続ける。まさに幻想的な風景だった。しかしそれはレイジに過去を思い出させ、憂鬱な気分にしてしまう。実はアーティはこのような辛気臭い雰囲気の中にいるのが苦手だったりする。

アーティ「・・・フラン、遅いわね」

レイジ「・・・」

アーティ「腹でも壊したかしらね」

レイジ「・・・」

アーティ「・・・」

レイジ「・・・」

アーティ「・・・ああもうやだこの空気！辛気臭いったらあ
りやしない！何よたかが景色を見ただけでひどく感傷的になっちゃ
って！あんたはホントワケのわからないやつだわ！」

レイジ「・・・」

レイジは何も反応しなかったため再び沈黙が訪れる。アーティは未
だ気分が落ち着かないので適当に言葉を探し吐き出していく。

アーティ「・・・もうここに迷い込んで四日目・・・か。幻想郷^{こゝろ}か
ら帰る方法が全然見つからないわね」

確かにそうだ。今頃極東支部ではパニックになっているに違いない。
極東支部の主力である第一部隊の隊長を務めるレイジがいなくなる
ことは支部に大きな打撃を与えるだろう。それだけでなくレンやア
ーティ、ここ最近極東地域に強力なアラガミが増えていることを考
慮しフェンリル本部がF S A Tの人員を割いてまで極東支部に派遣
したサヤカまでもが行方不明になってしまったのだ。（実はサヤカ

ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴペンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイ（ry」

レイジ・アーティ「・・・（。D ;）」

フラン「レイジ、早く行こ。もうすぐ1万字越しちゃうから」

アーティ「メメタア・・・」

居間の襖が見え始める。すると縁側でレンが桃を手一人佇んで
るのが見えた。フランは暗い所が怖いのか、さっさと中に入っ
った。

アーティ「レン、一人でどうしたの？あんたも昔のことを思い出
してる感じ？」

レン「よくわかりましたね。その通りなんです。実は、リンドウ
さんのことで・・・ちよつと」

アーティ「ふーん。さっきこいつも同じような感じで泣きそうなの
ラしてやがったのよ。ここの景色、そんなにすごいのか？」

レン「ええ、とても。話が変わりますけど・・・あ、ちょっと愚痴入るかもしれませんが・・・実は僕、リンドウさんと一緒に戦ったことがあるんですよ」

アーティ「へー」

レイジ「・・・」

レン「彼は僕にとって最高のパートナーでした・・・。はあ・・・。リンドウさん、ひどいですよね・・・。皆置いてけぼりにして、一人でどっか行っちゃうなんて」

レイジ「・・・」

レン「そんな今でも、リンドウさんは本当に皆に慕われているんですよ」

懐かしむ表情でレンは空を見上げながら話し続ける。

レン「数も数えられないような、^{バカ}?なのになあ・・・」

アーティ「さりげなくひどいこと言うわね」

レン「あ、そういえばレイジさんの初陣の時、オウガテイルと戦っていた時でも、やってみましたね」

レイジ「・・・?」

レン「うーん、リンドウさんにしては上出来の緊張のほぐし方なのかなあ・・・」

なぜそんなことを知っているのか・・・？レイジは不思議に思った。

レン「そんなあなたももう・・・立派なリーダーなんですよね・・・。神機使い達を導き、皆に慕われてる・・・」

レイジ「・・・」

レンはレイジに顔を向ける。その表情は真剣そのものだ。

レン「だからこそ、あなたに伝えるべきことがあります。「アラガミ化した神機使いの処理方法」です。ここで言うのもなんです」

アーティ「おいちょっと待て。なんで今その話をするワケ？これから行動を考えるのが先じゃないの？」

レン「確かにそうですが、レイジさんはこのことを知らないかもしれませんが、僕はリンドウさんが死んだなんて信じたくないんです。彼をまた搜索する機会があった時のことを考えれば、知っておいて損はないでしょう？」

アーティ「・・・」

レイジはアラガミ化という言葉自体は何回か聞いたことがある。ほぼ言葉通り、人間がアラガミになってしまうことだろう。処理方法についてまではまだ知らない。

レン「アラガミ化は、偏食因子の定期的な供給が無くなった結果、オラクル細胞が暴走することによって起きる急速な変異現象です」

レイジ「・・・」

レン「アラガミ化が進行した結果、二度と人間には戻れません」

アーティ「だろうね」

レン「また、人間によって培養されたオラクル細胞は極めて多彩な変異を遂げる傾向にあり、一般的な神機が通用しない事態が極めて多い・・・」

アーティ「・・・あれ、そうだったけ？」

レン「ええ」

レイジ「・・・」

レン「・・・そんな、アラガミ化した神機使いの処理方法として、最も効果が高いのは・・・」

アーティ「・・・(w k t k)」

レン「適合した者にしか扱えないという矛盾が孕むため、決定的な

対策とは言えませんが・・・」

レイジはこの言葉を聞いていて、段々聞くのが嫌になっていた。というより寧ろもう先を聞きたくない。無意識のうちに彼は首を横に振っていた。

レン「アラガミ化した本人の神機を用いて——」

レン「——殺すことです」

ドンシッ！……！

アーティ「!？」

レイジはこれ以上喋るのを止めると言わんばかりにレンの両肩を掴み思い切り壁に押しつけた。レンが手にしていた桃が叩きつけた拍子に手から落とし、縁側をコロコロと転がっていく。いくらアラガミ化したからって殺すのはあまりにも可愛そうだし、そんな結果しか出せないお前は一体何をしてきたんだ、と言うかのようにレイジは怒りが籠った目でレンを睨みつける。レンは彼の言いたいことをすぐに理解した。

レン「・・・あなたの言いたいこともわかります。でも今は研究が滞ってて、こうするしかないのが現状なんです」

レイジ「・・・!?!」

アーティ「・・・レイジ・・・」

レンの淡々とした口調にさらに怒りを募らせるレイジ。

レン「・・・リンドウさんを探して、運よく彼に出会えたとしましょう」

レイジ「・・・」

レン「・・・もし・・・その時、彼がアラガミになっていたらどう

しますか？」

アーティ「え……！？」

レン「あなたは、その「アラガミ」を殺せますか？」

そう言いながら、レンはレイジの腕を掴む。するとレイジの視界が歪んだ。なんと感応現象が起きたのだ。咄嗟のことに思わず目を瞑る。

レイジ「ッ！？」

ゆっくりと目を開けると、リンドウを置いて逃げる少し前の場面が見えてきた。サクヤが瓦礫越しに必死にリンドウに声を掛けているのがわかる。コウタの説得でやむを得ず撤退する第一部隊。リンドウはサクヤ達が撤退していく足音を聞きながら呟く。

リンドウ「……行っただか」

リンドウはぐったりとした様子で瓦礫にもたれかかっている。口には煙草が。煙草を吸い、フツと一息吐く。その直後、アラガミが教会のステンドグラスが割れてできた隙間から入って来た。ディア

ウス・ピターだ。

リンドウ「はあ・・・ちょっとぐらい休憩させてくれよ・・・体が持たないぜ・・・」

リンドウはまた煙草を吸い、大きく煙を吐く。煙草を投げ捨ててゆっくり立ち上がり、アラガミのいる方へ歩き出した。その後は激しい戦闘が繰り広げられる。体が持たないと言っておきながら、中々善戦しているリンドウ。そんな中、リンドウとピターの攻撃が同時に出た。その時、

ガキンッ！

お互いの攻撃が弾かれたと思うと、リンドウは突然右手首を押さえ苦しみだした。ピターの攻撃が腕輪に当たったらしい。

リンドウ「シクッたな・・・やるな」

痛みでふらつきながらも、彼の表情から絶望はみられない。ピターは捕喰しようと頭を前に突き出してきた。リンドウはカウンターを狙おうと突きを繰り出す。

ズシュッ

口の中にまでリンドウの腕が入り、一瞬喰われたのかと思われた。しかし喰われたのは神機と腕輪。腕輪は腕と融合しているのによっぽどのがなければ外れない。ピターを怯ませたものの、無理に外れたからか彼は激痛で屈み悲鳴を上げる。

リンドウ「くっ……うおおおおお!!」

神機も、腕輪も喰われた。まさに絶体絶命の状況。すると高台から人影が見えた。よく見ると、なんとシオがそこにいた。

シオは無言のまま高台から飛び降り、リンドウをチラと見てからピターの方へと歩いて行く。ピターは雄叫びを上げて威嚇する。しかしシオが目の前に立ってじっと見つめると、ピターは急に大人しくなり、教会から去っていった。リンドウはそれを見て安心したのか倒れ込み、意識を失う。シオがリンドウへ近づき、様子を見ているところで視界がブラックアウトした。

……この記憶は一体何なのだろうか。何故レンではなくリンドウが出てくるのか？レイジに考える時間を与えず、視界がまた開けてきた。

今度は鎮魂の廃寺。夕方のようだ。とある小屋の中で、彼らはいた。リンドウの腕が奇妙な風貌になっている。恐らく腕輪を失くしたからアラガミ化してしまったのだろう。シオは彼の腕の様子を見ているようだ。

リンドウ「くっ……」

シオ「！」

リンドウが腕を押さえ呻き声を上げる。シオはそれにびっくりしたのか、ガラクタが山積みになっている場所の裏へ隠れ、こっそり顔を覗かせる。

リンドウ「ん・・・？」

リンドウはシオへ目を動かそうとすると、右腕に違和感がした。

リンドウ「腕・・・か？これは・・・俺の腕・・・か？」

急に瞼が重たくなり、また意識を失うリンドウ。シオは動かなくなったのを確認すると再び彼の腕を見つめるのだった。
夜。再びリンドウは目を覚ました。しかし体が思うように動かせないようだ。

リンドウ「腹・・・減ったな・・・」

シオ「ハラ・・・ヘツタ・・・ナ？」

リンドウ「んー？お腹空いた・・・だ」

シオ「オナカ・・・スイ・・・タ・・・ダ？」

リンドウ「お腹空いた・・・」

シオ「オナカ・・・スイタ・・・」

空腹で頭が正常に働かない。殆ど意味のない会話が続いた後、空気は一変する。

リンドウ「ぐっ・・・ぐああ・・・があああああああ！！！」

リンドウの右腕からもやのようなものが溢れ出し、途端に激痛が走り悲鳴を上げる。シオはそれを見るとすぐにリンドウの右腕に手を添えた。するともやが出なくなり、右手の甲に青い光が灯りだした。リンドウの表情が穏やかになっていくのを見る限り、痛みを押さえられているようだ。

リンドウ「お前・・・ありがとう、な・・・」

シオ「・・・（ニコ）」

レイジ「・・・ッ」

視界がまたブラックアウトしたかと思うと、目の前にレンの顔が見えた。記憶の再生が終わったのだろう。驚きの事実にはレイジは啞然とし、レンの肩を掴む腕からふっと力が抜ける。レンは静かに腕をどけ、落ちた桃を拾って彼に背を向けながら口を開く。

レン「・・・この世界はいつだってわがままで、理不尽な選択を迫り・・・それが、歴史として連綿と続いて行く」

レイジ「・・・」

レン「あの時のリンドウさんの選択は・・・皆を幸せな現実に向い

たのでしょうか・・・？彼なら逃げようと思えば、逃げられたはずなのに」

レンは頭をレイジの方へ向け、さらに意味深な言葉を投げかける。
レイジは壁の方を向いたまま俯いている。

レン「そしてあなたは、どんな選択をするんですか？」

レイジ「・・・」

レン「・・・僕にしては変な話をし過ぎましたね。ちょっとトイレに行ってきます」

レンは桃をかじりながらトイレの方へ歩き出した。レンは普段の口調に戻っていたが、彼の言葉がレイジの心の中で、体の中で反響しているような感覚がしてしまっていた。何故か体が動かない。

アーティ「一体何なのよあいつ・・・。それに幻想郷にリンドウが来るなんて思えないし。あの人もそこまで？^{バカ}じゃないでしょ・・・。ほらレイジ、なアにボーっと突っ立ってんの。はよ戻りましょ」

レイジ「.....」

幽々子「あ」

妖夢「？」

幽々子「彼と自己紹介するの忘れてたわ。どおりで名前が浮かばないワケね」

妖夢「あ・・・」

Mission 19 ゴーストファイター（後書き）

作「なんかさ、意味もないのに後書き書くのダルくなってきた」

弟「てかこんなとこ読むヤツなんていんの？こんなgdgd感maxな後書きなんか」

作「報告することがあったら書くこと出来んだけどな」

弟「・・・」

作「・・・」

弟「今日CMでカービィがWiiで出るってやってた。毛糸じゃない方な」

作「やつとか。キューブの頃から出る出る言ってるのに全然出ないなと思ったが、ようやく出るのか」

弟「CMでやってたから多分もうすぐだろ」

作「でも今年中に出るのか？」

弟「あーごめん、発売日見てなかった。また延期すんじゃないの？思いながら流し目で見とったでな」

作「でも横スクで3Dカービィって・・・64以来じゃねーか？胸熱」

弟「あれは神作だと思う。Wiiのもそうだといいな」

・ ・ ・

M i s s i o n 20 鳴かない蛭（前書き）

皆さん、おはこんばちは。wingです。大学生活を送る時に一番厄介なのは宿題ですね。小レポートとかいちいちめんどくさいものばかりだもん……。まあ仕方ないか。それでは本編どうぞ。

Mission 20 鳴かない蚩

「サヤカside」

あれから天狗達がこちらに干渉しなくなっていた。何故かはよくわからないが、文が他の天狗達に説明したのだろう。現在はにとりの工房の中のダイニングで昼食（胡瓜のオンパレード）を食べ終わる頃だ。

サヤカ「あの人、何がしたかったんでしょ・・・」

にとり「さあね。あいつはなんか掴みどころがないってゆーか・・・よくわかんないヤツだよ」

魔理沙「今から思い返すと、やっぱり囧とかやるんじゃないかな。こっちは人間一人。相手は妖怪の中では強力な天狗。力量差的にも人数的にもどう考えても無理があつたな」

サヤカ「ごめんなさい・・・」

魔理沙「お前のせいじゃない・・・まあ文の言うとおり、確かに慣れないことはするもんじゃねーな」

にとり「魔理沙もアリスとかパチュリーみたいに魔法使いになっちゃえばいいのに。そしたらある程度いけたかもよ？」

サヤカ「？それはどういう・・・？」

魔理沙「・・・あー何て言うのかな、同じ魔法使いでも種族そのものが「魔法使い」ってヤツがいるんだ。パチュリーはそれだな。アリスってのは私の友人でそいつも魔法使いだぜ」

サヤカ「じゃあ、魔理沙さんは魔法使いなんだ」

魔理沙「いや違う。私は人間だ」

サヤカ「えっ、でも自分で空を飛んだりしてるのに」

魔理沙「あー・・・アレだ、元々の種族に愛着があるのさ。サヤカ、例えばの話だが、お前は人間から別の種族になりたいと思ったことあるか？妖怪とか」

サヤカ「・・・ないですね」

魔理沙「私が言いたいのはそのうちだった」

サヤカ「なるほど」

にとり「でも魔法使いより魔力が枯渇しやすいのは気になるでしょう？」

魔理沙「まあな。だがそれも慣れれば全然苦にならないぜ」

そんな雑談をしている内に、昼食（笑）を食べ終えた。

にとり「ふう、ごちそうさま・・・おつとまだ一本残ってた」

サヤカ「胡瓜は好きな方ですけど、ここまで胡瓜尽くしとは・・・」

魔理沙「ん、にとり、なんだよそれ。胡瓜に何かけてんだ？」

にとり「ん、失恋フレーバー」

魔理沙「・・・さっきの初恋ジュースとかいうヤツといい、お前の食事には一生ついていけそうにないぜ・・・」

サヤカ「絶対ブルーな気持ちになりますよねコレ・・・。おかしいですよにとりさん・・・」

にとり「そお？普通に美味いんだけどなー」

魔理沙「ワケがわからないぜ」

くにとりの工房・作業場く

さっさと用事を済ませようということで、昼食後後片付けをした後、作業場へやってきた。作業場というだけあってそれらしい構造になっ
ており、作りかけの機械などもあった。

にとり「じゃ、始めよう・・・と言いたいけど、まずは君のそれを

見せてもらつよ。構造がわからなきゃどうしようもないからね」

サヤカ「あッ！」

そう言いながらサヤカの持つ神機に手を伸ばす。サヤカは慌ててにとりの手から神機を遠ざけた。

サヤカ「触っちゃダメです！」

にとり「・・・？なんでだい？」

サヤカ「これは私以外の人が素手で触ったら危険なんです！」

魔理沙「・・・だからなんでだ？パチュリーのヤツも神機を勝手に調べて手を加えてたらしいけどケガとかしてなかったぜ？」

サヤカ「恐らくパチュリーさんも最初は触ったと思います。でも触れるのが扱う人以外だと痛みが走りオラクル細胞に侵喰されてしまふんです。何ともなかったのはすぐに手を放したからでしょう。ちなみにこれは私以外の人が触ると危険です」

魔理沙「おいおい、使い手以外のヤツが触ったらオラクル細胞が蝕むだなんてどんだけワガママな武器なんだよ」

サヤカ「私達の世界でもこれは問題視されてるんです・・・」

にとり「なるほど。これは興味深いなあ」

するととりは突然神機に手を触れた。痛みが走り、すぐに手を放す。

にとり「いつつ・・・なるほどね、こういつことか」

サヤカ「ちよちよちよ！触らないでって言ったじゃないですか！」

にとり「ああごめんごめん。いっぺんどんな感じなのかなって思ってた。もう触らないよ。どんだけヤバいかわかったし」

サヤカ「え、まさかそのために・・・？」

にとり「うん」

魔理沙「大した度胸だぜ・・・」

にとり「それより、これについてもっと詳しく教えてくれないかな。不思議な部分が多すぎる」

サヤカ「わかりました」

サヤカは神機の大まかな構造、特徴をにとりに教えていく。サヤカは神機の構造について専門的な知識はあまりないが、変形させてみたり、各形態を見せるなどしていった。

〈20分後〉

にとり「うん、大体わかったよ。それにしてもまさかの生体武器とはね。これを扱うのは初めてだ」

魔理沙「サヤカ、弾も見せなきゃいけないんじゃないか？」

サヤカ「あ、そうでしたね。ふう、今日は忙しくなりそう・・・」

サヤカは魔理沙から貸してもらった袋からバレットを取り出す。

にとり「おお、結構たくさんあるんだね」

サヤカ「ええ、もう一人の方の方もありますので」

魔理沙「そいつもサヤカと同じ武器を使うんだぜ、名前はレイジってんだ」

にとり「へえ、一度会ってみたいものだ。まあ、とりあえずその弾みたいなものも調べるとするかな」

〈少女調査中・始〉

「ちよつと撃つてみますね」「じゃ的当てだぜ、この失恋フレーブ」「ああッらめえ！それはらめ！らめだつて」「こんなものが存在して何になる！撃て！狙い撃つんだ！」「それを撃てばいいんですか

にとりは好物をダメにされてしまったことに大泣きし、サヤカと魔理沙は後悔の念が湧き始めていた。

にとり「うわ~~~~ん」

サヤカ「ああ・・・やっぱり悪ノリなんてするんじゃない・・・」

魔理沙「さて、問題はどうかやってこいつをなだめるかだ」

にとり「わ~~~~アレが家にある最後の残りだったのに~~~~」

魔理沙「ああ悪かった悪かったって。で、アレは人里で売ってんのか？」

にとり「知らないよ~~~~」

サヤカ「うわ、やってしまいましたね・・・」

魔理沙「しゃーないな、この様子じゃアレ持ってこないと落ち着きそうにねえ。ついでに胡瓜も買ってくるか。人里へ行くぞ、サヤカ」

サヤカ「人里・・・ですか。そこにはさすがに妖怪とかいませんよね？」

魔理沙「お前は何を想像してんだ？流石にそれはないぜ？」

サヤカ「あ・・・そうですね。にとりさん、ちょっと人里へ行って失恋・・・なんたらを探してきます。胡瓜も買っておきますね」

にとり「ぐすん．．．アレないと元気出ないよ」

魔理沙「（あんな名前からして明らかにテンション下がりそうなモンをか．．．？）」

サヤカ「神機．．．どうしようかな。抜き身で人里を歩くワケにはいかないし」

魔理沙「レイジのあの鞘みたいなのはないのか？」

サヤカ「ありません。私はアレを作れる程器用じゃありませんから．．．」

にとり「布がそこにあるから巻いていきなよ．．．うう」

にとりは体育座りをしながら指を指す。その方向には、テーブルの上に長い布があつた。サヤカは礼を言いつつ神機に布を巻いた。

魔理沙「．．．変なモンだな。人に対しては危ないのに、物に触れるのは大丈夫なんだな。「侵喰」ってよくわからないぜ」

サヤカ「元の世界でも未だに謎が多いものですからね。あ、にとりさんバレットは置いてきますね。まだ詳しく見せていないので．．．」

にとり「．．．さっきので大体はわかったよ」

魔理沙「じゃバビューンと行ってくるぜ」

サヤカと魔理沙は足早に工房を後にした。にとりは未だ体育座りで顔を伏せていたが、二人がいなくなると、

にとり「ふ……ふふふ……」

うずくまりながらのため声が籠る。その後ガバツと立ち上がり、

にとり「ふはははは！フレーバーを失ったのは予想外だったけど、魔理沙達が探してくれるみたいだからよしとするか！胡瓜も買ってくれるみたいだし！あいつにしては珍しいよね、自ら奢ってくれるなんてさ！」

にとりは意気揚々とサヤカの置いていったバレットに目を通しながら呟く。

にとり「……まあ、概ね」

「にとり」計画通り（ニヤリ）

すると、誰もいないはずなのに、どこからか声が聞こえてきた。

魔理沙「聞こえてんぞ」

にとり「ひゅいッ！？その声は魔理沙！？」

声のした方へ振り返ると、そこには魔理沙とサヤカの姿が。

にとり「ええッ！？は、早すぎでしょ！」

魔理沙「諦めろ、ここは幻想郷だぜ？」

サヤカ「魔理沙さんスピード出し過ぎですよ……。腕千切れるか
と思ったじゃないですか……」

にとり「……。（。D。・）で、手に入ったのかい……。？」

魔理沙「ああ、なぜか人里で売ってたぜ。新商品ってでかかど宣
伝してたからな」

魔理沙は紙袋の中から失恋フレーバーを取り出してにとりに見せる。

にとり「へえ・・・。(。D;) まあ・・・いいか、ありがとう」

サヤカ「胡瓜も十本ほど買いました」

にとり「おおありがとう、どれどれ、・・・ウホッ、いい胡瓜・・・」

魔理沙「お前今すんごい変な顔してたぞ」

にとり「！？ああごめんごめん。今日のはいい形してるなあと思つてさ」

魔理沙「ふーんそうかい。とりあえずサヤカの武器と弾の改造済ませようぜ」

にとり「魔理沙、気が早すぎるよ。まだサヤカの・・・何て名前だっけアレ」

サヤカ「神機でs」

にとり「そうそうそう。さっきサヤカが神機の大体の構造を見せてくれたけど、まだまだ気になるところも、調べなきゃいけないところも沢山あるんだ。いくら私でも、すぐになんとか出来るワケじゃないんだよ。ましてや生体武器となるとね」

魔理沙「・・・そうか。でも急ぎめで頼むぜ、いつアラガミが山に攻めてくるかわからない、下手したらここをピンポイントで狙ってくるかもしれないしな」

サヤカ「……にとりさん、出来ますか？」

にとり「な」に任せときなつて！最近ヒマで仕方なかったからさ！こいつは腕が鳴るね！」

少女作業中

[illegible]

～ 一時間後・ダイニング ～

魔理沙「・・・あまりにもヒマだから念入りにやりすぎたぜ・・・。
我ながら恐ろしい程に部屋が輝いてるな・・・。」

にとり「ただいま～ってひゅいッ!？」

サヤカ「ここ、どこですか・・・?」

サヤカ達がダイニングに戻ると、見違えるほどに綺麗な部屋になっていることに驚愕する。所々が日光に当たって輝いており、鏡のよ
うに物が映る部分も。

魔理沙「おまえは何を言っているんだ、にとりの家だぜ」

にとり「ま、魔理沙・・・これを、君一人で?」

魔理沙「ああ、つってもあんまりヒマだったもんだからいつも以上
にやっちゃったが」

サヤカ「魔理沙さんって、もうちょっと大雑把な人だと思ってまし
た・・・（これまでの行動からも、口調からしても）」

魔理沙「失礼なヤツだな。私だって女なんだ。こういう繊細さが必
要なことはしっかりするぜ。魔法だって同じだ」

にとり「何はともあれ、ありがとつ。こつちもとりあえず改良の目処が立つたよ」

魔理沙「おお、それはよかったな。あとは実行に移すだけか」

サヤカ「ええ、ようやく一息つけそうです」

ひとまず休憩を取ることにし、にとりは冷蔵庫にサヤカ達でも興味を持ちそうなものがないか探し始める。サヤカと魔理沙はリビングに移動しソファーに座ってくつろいでいる。

サヤカ「なんだかここ、とても親近感が湧いてきます」

魔理沙「私にとっちゃ変わったモンだらけにしか見えないがな。だが便利といえば便利だな」

サヤカ「ふう……」

魔理沙「……あーなんか疲れたぜ、掃除念入りにやったから無駄に体力使っちゃった」

サヤカ「……」

サヤカは顔を天井に向け完全に脱力した体勢になる。幻想郷に迷い込んでから、ここまで落ち着ける時間はあっただろうか。今までの出来事を振り返ると、目まぐるしく思えてくる。恐らくこの束の間の休息もすぐまた目まぐるしい日々埋もれるのだらう。そう思う

と、少し気分が滅入る気がした。

魔理沙「・・・なんか完璧な脱力を見た気がするぜ・・・。そんなに疲れてんのか？」

サヤカ「ここに迷い込んだ時といい、紅魔館の時でも、永遠亭の時でも、たとえ一瞬でも、ここまで心置きなく落ち着ける時間ってあったかなあ・・・て思いまして」

魔理沙「・・・まあアラガミが幻想郷^{こい}に来てなければ、こつも忙しくならなかっただろうな」

サヤカ「・・・」

魔理沙「なあ、突然だけどお前、何か悩んでないか？」

サヤカ「え・・・？」

魔理沙「紅魔館の図書館で、私がお前に今後の話をしようと話しかけた時があつたろ？あん時お前様子が変だったから、気になってさ」

サヤカ「・・・大した問題じゃないでs」

魔理沙「私でよければ相談に乗るぜ」

サヤカ「・・・ここで話す意味、ないと思います。元の世界での話なので」

紅魔館の図書館でのことを思い返し、サヤカの表情が少し険しくなる。あれはあくまでも推測の域を出ないが、ありえない話でもないように思えたため恐怖を感じたのだ。神機使いも、そうでない人間も、やがてアラガミによって滅ぼされる未来。アラガミを地球から排除出来ても、アラガミに依存しきった社会が対応しきれずに後の人類に破滅をもたらす未来。ならば今自分がしていることに意味があるのか。サヤカは心の片隅で心配し続けているのだ。出来ることなら話したい。しかしこれは元の世界での問題であって幻想郷の住人には関係のないこと。だから言っても意味はないだろうと、サヤカは黙秘を続ける。そんな中、にとりがお盆と少し小さめのやかんを持って部屋に入ってきた。

にとり「いやゝ、こないだ霊夢から貰った緑茶があるのをすっかり忘れてたよ」

魔理沙「おお、それがあんなら最初から出してくれよまったく」

にとり「はいどうぞ」

にとりはサヤカと魔理沙の前に湯呑みを置き、彼女もソファに座った後持っていたやかんと湯呑みをテーブルの上に置く。

サヤカ「・・・ありがとうございます」

魔理沙「ようやく口直しが出来るな」

緑茶を飲んでほっとする三人。一気に飲み干した後、にとりがサヤカに話しかけた。

にとり「ねえサヤカ、ちょっと気になったことがあるんだけどさ」

サヤカ「はい」

にとり「君が家に来てアラガミについて話してくれた時と、さつき君と神機の改良について話し合ってた時に思ったことがあるんだ」

サヤカ「・・・？」

にとり「・・・もしアラガミがいなくなったらさ、君らはどうするの？」

サヤカ「・・・！」

あまり考えたくないことを聞かれてしまった。サヤカはピクと反応する。

にとり「さつき、君の右手首につけてる腕輪、取れないって言うってたよね。それのおかげで自分の体がアラガミ化しないようにしてくれてるって」

魔理沙「へえ、お前のその腕輪、そういう役目があったのか」

サヤカ「・・・ええ」

にとり「定期的に偏喰因子を注射してオラクル細胞の暴走を防いでるって聞いて思ったんだけどさ、なんかおかしくない？」

サヤカ「・・・」

魔理沙「・・・？どういうことなんだ？」

にとり「サヤカ達神機使いはさ、アラガミを倒すために存在するワケでしょ？なのになんでアラガミの細胞を体に取り込まなきゃいけないのさ？」

サヤカ「・・・私も疑問に思ったことはあります」

にとり「腕輪で体をオラクル細胞に喰われないように制御して、定期的に注射して・・・なんか、変なんだよね・・・まるで、アラガミを倒さなければならぬはずが、アラガミなしじゃ生きてられないような体にしてるっていうか・・・そんな気がするんだよね」

サヤカ「・・・」

あまり考えたくない。なんでこうなったかなんて、自分だってわからない。サヤカは段々変な気持ちになっていく。

魔理沙「なるほど、確かにそりゃ変だな。てことは、アラガミがい

なくなったら、サヤカ達の世界の人間は・・・」

サヤカ「・・・誰も、生き残れない」

にとり・魔理沙「・・・！」

もうここまできたら話すしかないだろう。先程魔理沙が悩みを聞こうとしていたことから。サヤカは魔理沙の方へ顔を向けながら口を開く。

サヤカ「魔理沙さん、さっき悩みがあつたら話してくれって言いましたよね・・・今から言うのが私の悩みです」

考えたくない、嫌だという気持ちを胸の中で押さえつけ、笑顔を作る。しかし殆ど隠せていない。悲しげに笑っている、そんな表情だ。

魔理沙「・・・何だ？」

サヤカ「紅魔館の図書館で話をした時、思ったんです。そういえば、ここまでアラガミを根絶しようと考えたのは初めてだなんて」

魔理沙「・・・」

サヤカ「今から思い返すと、不思議に思ったんです。元の世界で私達はアラガミを討伐して、報酬を貰って・・・そんな生活にいつの

間にか満足している自分がいることに気づいた時、人類はなんで本気でアラガミを根絶しようとしなかったのかって」

にとり「・・・」

サヤカ「アラガミは倒しても霧散して別の場所で新たな固体になるって私言いましたっけ」

魔理沙「ああ」

にとり「うん」

サヤカ「神機を作れる技術があるなら、霧散したオラクル細胞をなんとかすることだって不可能じゃないと思うんです。でも大人達が言うには、地球上からオラクル細胞を排除することは出来ないと言うんですよ」

にとり「・・・」

サヤカ「そこで私、考えてみたんです。もし地球上からアラガミがいなくなったらどうなるかって」

魔理沙「ほう」

サヤカ「私達の住む世界には、自然が殆どありません。幻想郷^{こい}で例えるなら、今の3割弱とを考えてくれればいいかと」

魔理沙「ええッ！？3割もないのかよ！？おいおい、それじゃ酸素が足りなくなつて皆死んじゃうぜ！？」

サヤカ「ええ、でも私達の住む地球の大気は保たれているんです。何故だかわかりますか・・・？」

にとり「・・・アラガミ、だね」

サヤカ「・・・その通りです。アラガミは捕喰したものの性質を受け継ぎます。そして植物を捕喰したアラガミが光合成してくれているおかげで大気が保たれてるワケなんです。・・・皮肉ですよね」

にとり「ふうん、だとするとそれがアラガミを根絶出来ない大きな理由っぽいね」

サヤカ「恐らく。それとも一つ、私達神機使いにも問題があります」

魔理沙「？」

サヤカ「仮にアラガミがいなくなったら、神機使いの命を繋ぐ偏喰因子の製造が出来なくなります」

魔理沙「・・・えっと、確か神機使いは偏喰因子を定期的に注射しないといけないんだっただな？・・・はッ」

魔理沙は言葉を続けようとした時、ふとその先がわかったような気がして、はっと口の動きが止まる。

サヤカ「・・・もしそれが出来なくなったら、私を含め神機使いは皆、アラガミになってしまいます」

魔理沙「そんな・・・」

サヤカ「長々とした説明になってしまいましたが、私が今悩んでいるのは、さっき言った二つの理由でアラガミの根絶が出来ないことから私達に未来があるのかってことです」

魔理沙「・・・？ちょっと意味がよくわからないぜ」

サヤカ「仮にアラガミを根絶出来ても、光合成するアラガミまでいなくなるから酸素が欠乏して生物が死滅してしまうこと、根絶することによって偏食因子が作れなくなって神機使いがアラガミ化してしまうこと・・・。かといって放っておけば確実に人類は滅亡の一途を辿ってしまう。どの道アラガミが地球上に残って、私達は滅んでいく・・・そう思うと、今私がしようとしてることに意味があるのかわからなくて・・・」

魔理沙「・・・」

サヤカ「私・・・怖いんです」

サヤカの表情はより悲しみの色が強くなり、腕を抱え込む。魔理沙は励ましの言葉をかけようとするが、言葉が見つからず黙り込んでしまう。するととりは少し考え込んだ後、口を開いた。

にとり「いいやサヤカ、決して無駄なんかじゃないよ。君は間違っていない」

サヤカ「え・・・？」

サヤカは顔を上げ、にとりの方へ顔を向ける。にとりは立ち上がった力強くサヤカを見つめている。

にとり「少なくとも君が今やっていることは幻想郷では無駄にはならない。まだここは君のいた世界と違って自然豊かだ。今ならアラガミをやつつけることに躊躇しなくなつていいんじゃないのかい？」

サヤカ「あ・・・」

にとり「それに、ない技術は作ればいい。私が何とかする！君が元の世界に帰った時、私がこれから考える技術を伝えればその問題も解決への糸口になるんじゃないかな」

サヤカ「そんなことしてくれて、いいんですか・・・？」

にとり「君は私の盟友なんだ！君が幻想郷の住人^{じゅうにん}じゃなくても私は・・・いや、私達は、君達に不幸になつてほしくないんだ」

サヤカ「にとりさん・・・」

魔理沙「お前が帰った後でも私達は「元の世界に帰ったからその後のことなんて知ーらない」なんて思わないぜ」

サヤカ「でも・・・」

魔理沙「「なんでそんなに優しくしてくれるのか」ってか？」

魔理沙はサヤカの目の前に移動し、目線に合わせてしゃがみ、優しく語りかける。

サヤカ「一人でくよくよ考え込むなんてつまないことは諦める。ここは幻想郷だぜ？」

サヤカ「・・・」

聞き慣れた言葉のはずなのに、何故か目頭が熱くなる。サヤカは溢れ出る感情を必死に押さえていた。しかしそれも魔理沙にはお見通しだったようだ。サヤカの頭に手を置き、くしゃくしゃと動かす。

魔理沙「くどいようだが、幻想郷^ニは全てを受け入れる場所。お前が今我慢している気持ちだって、ありのままに出しちゃったっていいんだ」

サヤカ「・・・う」

にとり「それに、今回の異変は君だけの問題じゃない。私達も全力で解決に向けて努力するつもりだし、君の手助けだってするつもりだよ」

サヤカは遂に押さえていた感情が漏れ出し、小さく泣き声を上げ始めるサヤカ。魔理沙はサヤカの頭を撫で続ける。

魔理沙「私達はいつだってお前の味方だぜ」

サヤカ「・・・はい」

にとり「・・・涙が枯れた後でもいい、気持ちが落ち着いたら改良を始めようか。じゃ、私は先に作業場に戻ってもう少し君の神機を詳しく調べてみるよ。あとあの弾もね」

にとりはそう言い残して部屋を後にした。サヤカは涙を拭い、魔理沙へ向きなおす。

サヤカ「・・・ごめんなさい、ネガティブになってしまつて。今は泣いてる場合じゃありませんよね」

あまりにも泣き止むのが早いため、魔理沙はまだ無理をしているのかと心配する。

魔理沙「確かにその通りだが、・・・もう大丈夫なのか？心のケアだって時には必要だぜ？」

サヤカ「もう大丈夫ですよ。幻想郷に迷い込む前も、苦しくて泣い

たことは沢山あったのでもう慣れっこです」

魔理沙「・・・じゃあ最後にもう一杯だけ飲んでいくか」

魔理沙はテーブルに置いてあるやかんを持ち、サヤカの湯呑みに緑茶を注ぐ。心遣いに感謝しながらサヤカはネガティブな考えを振り払うように一気に飲み干した。

サヤカ「ふう、では行きましょう」

魔理沙「おう」

サヤカはこの時心に決めた。どんな辛い未来が想定される事態にあっても、決してやる前から諦めない。自分が想像した未来とは違う、皆が笑って暮らせる世界を守ってやるんだと強く、強く決心した。

M i s s i o n 20 鳴かない蚩（後書き）

弟「なあクソ兄貴」

作「？」

弟「サヤカが能力持ちになるのはいつだ？」

作「もうすぐかな、まだ詳しくは考えてない」

弟「レイジがもう2つも持つてるからさ、そろそろヤツにも能力覚醒とかあってもいいんじゃないかと思ってな」

作「キラキラバシューン！」

弟「おいやめろ、俺は種死アンチなんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6664u/>

東方神喰者

2011年11月13日10時02分発行